シャルトンの風

芹沢明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャルトンの風

【Ｎコード】
Ｎ５４０２Ｔ

【作者名】
芹沢明

【あらすじ】
騎士や魔道士を育てる育成機関シャルトン王立学校。そこに通う魔道士見習いシェーナが、とある魔法の実験に失敗し、同じ学校に通う騎士見習いのディアスと魂が入れ替わってしまう。
再び魂交換魔法を唱えるには、闇の魔晶石が必要。しかし闇の魔晶石は入手困難な上に禁呪に使う触媒であるため、自分達で手に入れるしかない。
闇の魔晶石を手に入れる為には、シャルトンから往復で約一ヶ月かかるシェーナの故郷まで行かなくてはならない。

二人は夏休みを利用して、シェーナの故郷に行く事になるが、その前に学期末試験と学期末トーナメントがある。
シェーナとディアスは相手の分野では素人。学期末試験どころか普段の授業すらついて行けない状態。二人はお互いに魔法と剣術を教え合い、期末を乗り越える事になるが……

プロローグ

とある春の放課後。一人の女性魔導士が足早に下校している。普段なら取り巻きの親衛隊がついてくるのだが、今日は用事があると言ってあるから一人だ。

魔導士の名前はシェーナ・アストリア。地方貴族の令嬢だ。

シェーナが通うシャルトン王立学校は、ウェンダン王国が優秀な騎士や魔導士を育てあげるために創立した学校だ。

シェーナは義務教育期間と中等高等教育期間を、故郷ガーネイルにある分校で過ごし、去年、厳しい試験に合格して、本校の魔導士学部へと進学して来た。現在は専門教育課程の二年生。歳は今年で一九歳になる。

まず目に付くのが、腰まで真っ直ぐ伸びた淡い色の金髪。そして透き通るような青い瞳。顔つきは線が細くどこか儚げに見える。男なら守ってあげたくなるだろう。

背は高く、腰はほっそりとしてしなやか。始めて見る人の第一印象は可憐で清楚だろう。それでいて成績は優秀。当然の様に周りの視線と意識を集めてしまう様な女性だ。

もちろん外見も成績も努力して手に入れたものである。

常に規則正しい生活とバランスの良い食事に気をかけて美しい体型を保ち、髪や肌の手入れを怠らない。ただ、胸だけは平均の域を抜ける事はできなかった。

学業にしても人一倍の努力家である。周りからは天才だと言われているが、人の目に付かないように陰でこっそりと努力している秀才である。

そんな努力家のシェーナは、放課後に一人で怪しい魔法の実験をするような子ではないのだが、シェーナにはどうしてもやってみたい魔法の実験があった。しかも誰にも見つからないようしなくてはならない危険な実験だ。

事の発端はシャルトン王立学校がある学校都市ヴェールで、一年に数回しか行われないバザーだ。バザーには各地の商人がわざわざヴェールに訪れ、各地方の名産などを売ってくれる。ヴェールには様々な地方から生徒が集まって暮らしているので、故郷を懐かしみ、尊重し、忘れる様な事がないようにと、学校長が計らってくれたのだ。

シェーナはそのバザーで一冊の魔導書を発見した。いかにも怪しい本だったが、なぜか惹きつけられて買ってしまった。衝動買いとも言う。だがシェーナの感はこれは掘り出し物だと告げていた。

シェーナはその魔導書に描かれた魔法陣と同じ物を描いた布を、リビングの中央に置き、魔晶石と呼ばれる魔力の込められた石を触媒として、布の中央に置いた。

シェーナの直ぐ後ろには籠が二つ置いてある。一つは鳥籠で、中には鳩が一羽入っている。シェーナは籠から鳩を取り出すと、ナイフでちくりと鳩を刺した。そしてナイフの先に付いた血を魔法陣の上へと垂らす。続いて一抱えある籠の前にくると、シェーナは籠を開けずに中にナイフを突き刺した。

「フギャー」

籠の中にいた猫が驚きと怒りの声を上げる。

「ごめんね」

シェーナの口から、こんな怪しい事をしている人物とは思えないような澄んだ声が零れた。

そしてシェーナは、ナイフに付いた猫の血も魔法陣に垂らすと、大きく息を吐いた。

浅くではあるが動物にナイフを刺す事に抵抗があり、胸が痛んだせいだ。特に猫の時は、抵抗されて襲われるのを怖がって、ぞんざいに扱ってしまった。

そして目の前にある物を見てやっと気づく。外から見られないために、カーテンを閉めたリビング。頭上に輝く魔法の光。その下に照らし出される血の付いた魔法陣。刺されて暴れている鳩と猫。生

け贄ではないが、状況的に生け贄に見える。
「……我ながら怪しいわね」
もしこんなところを誰かに見られたら、シェーナが努力して築きあげてきたイメージは粉々に砕かれ、華やかな学校生活は終わるだろう。シェーナはすぐに魔法の実験を終わらせようと起動の呪文を声に出した。
「モーテリア」
呪文が発せられた次の瞬間。魔法陣が輝きだし、血を提供した鳩と猫から光の玉が抜け出した。その光の玉はふわふわと漂い、そして入れ替わるようにお互いの体に入っていった。
「……成功……かな？」
シェーナは恐る恐る猫が入っている籠を開けた。
猫は後ろ足だけで立とうとしては、立てなくてもがき、前足を上下にばたつかせている。まるで鳥のように空を飛ぼうとしているように見える。
一方鳥の方は、本来なら鳥かごの真ん中に吊されている止まり木に止まっているのだが、今はその止まり木に止まれず、籠の底へ落ちてもがいていた。小さな足でバランスを取る事ができずにいるのだ。
「うっ。むごい……」
シェーナは興味本意でこの実験を行ったが、実際に結果を見たら嫌気がさしてきた。
「ごめんね。早く元に戻すから」
そう言って呪文を唱えようとしたその時、玄関のドアをノックする音が鳴り響いた。
「ひっ！」
シェーナは心臓が口から飛び出そうになった。
驚き慌てたシェーナは、火をつけていない暖炉の中に籠を二つ放り込み、魔法陣の描かれた布をソファーの下へ移動させ、カーテンを開けた。

「よし。怪しい所はなにもないわね」
シェーナは確認するように言うと、玄関のドアを開けた。
「やっほー」
シェーナの家に訪れたのは友達のエリスだった。
エリスはシェーナと同じ魔導士学部の魔導士で、学校からそのまま来たのか、魔導士学部の制服である白いローブ姿のままだ。背が低いのでローブが地面に着きそうだ。
シェーナが可憐で清楚なら、エリスは可愛く活発的な印象を受ける。明るい茶髪を肩で切り揃えてるところや、大きな茶色い目がどことなく挑戦的な強い光を放っているところが、活発的な印象を強くしていた。
「どうしたの？」
「どうしたもこうしたも、忘れ物よ」
「忘れ物？」
「忘れてるのは物だけじゃないのね」
そう言ってエリスは小さくため息をついた。
「先生が週末にロッカーを新しいやつと交換するって言ってたでしょ。だからロッカーの中身を持ってきてあげたのよ」
「あーっ！　そう言えば……ってどうやって私のロッカーを開けたのよ！」
シェーナの口調はとても清楚で可憐ではなかった。普段は清楚なしゃべり方をするのだが、エリスと二人きりになると、地が出てしまう。
「先生に合い鍵もらったのよ。もう運び出すからってシェーナの分を持ってけって言われたの。そうでなけりゃ、いくらなんでも勝手に開けないわよ」
「私を呼んでくれればよかったのに……」
「一応探したんだけどね。でも業者の人が来ちゃって時間がなかったのよ。そもそもシェーナが忘れてるからいけないんでしょ。わざわざ持ってきてあげたんだから感謝してよね」

「うん。ありがとう。それで……持って来た荷物は？　一人じゃ大変だったでしょう」
「大丈夫。荷物持ちがいたから」
「荷物持ち？」
シェーナはハッとした。もう一人誰かがいるとは思わず、地で喋ってしまった事に血が引いていく。
「そそ。ディアス。隠れてないでこっちおいでよ」
「……ディアス？　ですって！」
意外な、そして嫌な名前を聞いてシェーナは思わず聞き返した。
「別に隠れてるわけじゃないさ」
そう言ってドアの影からエリスの後ろに現れたのは、黒髪黒瞳の男だ。背は長身でシェーナよりも頭半分高い。引き締まった体には余分な肉がついてなく、戦士として理想的な体つきをしている。いくら体を鍛えても、マッチョな筋肉質では体が動かしづらくて返って邪魔になる。要するに加減と付け方が大切なのだ。その体格から分かる様に、ディアスは剣術学部の生徒だ。剣術学部の生徒と魔導士学部の生徒は、学舎が離れている事からあまり交流がないのだが、ディアスとエリスは同郷であり、幼なじみでもあった。
ディアスは容姿も悪くなく誠実そうに見える。だからディアスに憧れる女性は多い。しかしシェーナにとってディアスはいわゆる敵なので、容姿などは眼中になかった。
シェーナの親友であるエリスの友達なら、シェーナもディアスと仲良くなれそうなのだが、魔導士学部の主席だけでなく、総合主席を狙っているシェーナにとって、ディアスは危険すぎる人物なのだ。
卒業年度毎に決まる総合主席は、剣術学部と魔導士学部関係なく、その卒業年度でもっとも優秀な人物が選ばれる。去年の期末トーナメントで剣術学部の優勝者となったディアスは、剣術学部の主席だけでなく、両部の総合主席に一番近い存在とも言える。それは魔導士学部の期末トーナメントで優勝したシェーナにも言える事なのだが、ディアスを無視する事などできない。総合主席を得るための一

番大きな壁がディアスであり、勝たねばならない敵なのだ。
「持てるか？」
ディアスは背中に背負った荷物をシェーナの前に差し出した。ロッカーの中身を詰め込んであるので、大きいし重い。
「大丈夫よ。んっ」
シェーナは少し仰け反りながら両手で受け取り、直ぐに玄関の中に置いた。
「ありがとう」
シェーナは敵のディアスに対しても微笑んで礼を言った。しかしシェーナは内心動揺していた。エリスと会話を聞かれしまったからだ。
ディアスはシェーナの動揺に気づくはずもなく、学校のアイドルに微笑まれて、少し頬を染めていた。
それを見たシェーナホッとした。大丈夫。きっとディアスは気にも止めていない。
「じゃ、じゃあ、俺は帰るぞ」
「あー待って待って。シェーナの家に上がっていこうよ。シェーナがお礼してくれるって。ねっ、シェーナ？」
「えっ……えっと……」
いつものシェーナならエリスをすぐに家に入れるのだが、リビングには見られてはいけない物がある。一応隠してはいるが、今は誰も家に入れない方が安全だ。
「あれぇ？　わざわざこんなに重い荷物を持って来たのよ。お茶の一杯くらい出してくれてもいいんじゃないかな？」
「でも、男の子を入れるのはちょっと……」
「大丈夫だって。ディアスは悪さするような奴じゃないから。私が保証するわよ」
そう言ってエリスはシェーナの了承を待たずに、ディアスの手を引いて勝手にドアの中に突入した。
「お、おいっ！」

エリスはシェーナがディアスを敵視しているのを知っている。しかしエリスはシェーナとディアスには仲良くしてもらいたかった。どちらも友達だからだ。だからきっかけを作ろうとしたのだ。
「おじゃましまーす」
「おい。エリス。嫌がってるじゃないか。俺は帰るぞ」
ディアスがエリスの手を振り払おうとした。しかしエリスがディアスの手を掴む力が、意外に強くて振り払えなかった。強引に振り払う事もできたが相手は女の子だ。騎士を目指すディアスは女性を乱暴に扱う事ができないので、諦めて引っ張られた。
「……エリスったら強引ね。いいわよ。お茶とお茶請けくらいは出すからちょっと休憩していきなさい。でも余計な所には触れないでね」
「俺は騎士を目指している。礼を欠くような事はしないさ」
「じゃあ、寄っていくってことだね」
「ぐっ」
エリスが嬉しそうに言うと、ディアスは断れなくなった。
ディアスとエリスはリビングのソファーに腰掛けた。その下には魔法陣が描かれた布がある。しかしソファーの下を覗かれなければ大丈夫だろう。そう思ったシェーナは紅茶を入れにキッチンへ向かった。
「んっ？　何あれ？」
ディアスと話していたエリスが、ソファーの向かいにある暖炉の中に、籠が二つあるのに気づいた。そしてエリスの行動は早かった。ディアスが注意する前に飛んで行き、暖炉の中を覗き込んだ。
「あー！　猫さんと鳥さんだ！　可愛い！」
そう言ってエリスは鳥が入った籠を持ち上げた。
「病気なのかなぁ？」
籠の中の鳥は、止まり木に止まる事を諦めたのか、籠の底でぐったりと横になっていた。
「あ、何だ。鳩かぁ」

エリスは籠の中を見てちょっとがっかりした。珍しい鳥かと思ったが、鳩とはありふれている。
そんなエリスを見ていたディアスが、ふと真下を見ると、ソファーの下から布の一部がはみ出ている事に気がついた。
「なんだ？」
ディアスは何気なく布の一部を引っ張ると、見るからに怪しい魔法陣が描かれた布が出てきた。中央には魔晶石が置かれ、乾ききっていない血痕が染みを作っている。
「なぁ、エリス。これ何だ？」
ディアスは見るからに怪しい布をエリスに見せようとしたその時、シェーナが戻ってきた。
「あっ！　だめっ！」
シェーナはティーセットをテーブルの上に乱暴に置くと、もの凄い勢いでエリスが持っている籠を奪い取った。
「えっ！　わっ？」
突然の事に戸惑ったエリスがシェーナの方へ倒れ込んだ。
「ちょっ……」
シェーナもエリスのタックルを喰らってバランスを崩し、籠を放り投げてしまった。
バサバサッ！
籠が開き、猫の魂が宿った鳩が、部屋の中を這いずるように無茶苦茶に動き回った。
「待ちなさいっ！」
シェーナが鳩を取り押さえようと飛びかかると、鳩は爪でシェーナの手の甲を引っかいた。
「きゃっ！」
シェーナは手を引っかかれて、反射的に手を振って鳩を弾いた。
「うわっ！」
鳩はもの凄い勢いでディアスの顔面へと弾かれ、ディアスは突然の事に対処できず、頬を浅く引っかかれてしまった。

「もう、何なのよぅ」
うつぶせに倒れたエリスが顔を上げると、目の前に魔法陣が描かれた布があった。
その魔法陣には鳩の猛襲によって引っかかれた、シェーナとディアスの血が付着していた。
「ん？　なにこれ？　……モーテリア？」
エリスは何気なく魔法陣に書かれた文字を口に出してしまった。
「なっ！　ば……きゃぁあっ！」
その次の瞬間、魔法陣が輝きだし、シェーナとディアスがばったりと倒れた。そしてシェーナとディアスと鳩と猫から光の玉が飛び出し、しばらくうろついた後、違う体へと入っていった。
「えっ？　なに？　なに？」
エリスは何が起きたか全くわからず、目の前で起きた事に唖然とした。
「う～ん……」
すぐに起きあがったのはディアスだった。
「あああああああああああああああ！」
ディアスは起きあがるとシェーナに詰め寄った。
「私が見える……って事は……」
「ちょっと……ディアス。　いったい……？」
エリスがおろおろしていると、今度はシェーナがうめいた。
「何だ何だ？」
シェーナは起きあがると、唖然となってディアスを見つめた。
「何で俺がいるんだ？」

彼は私で私は彼で？

シャルトン王立学校の最終課程である専門教育は大きく分けて二つの学部がある。一つは一般兵から騎士まで育て上げる剣術学部。もう一つは魔法と言う奇跡の法を操る者を育て上げる魔導士学部。

シャルトン王立学校と普通の学校との差は、義務教育課程から魔法の基礎知識や剣術などを教える事だ。だから将来騎士団や魔導士団に子供を入れようと考えている親は、迷わずシャルトン王立学校を選ぶ。

義務教育から中等教育、高等教育までは、地方にあるいくつかの分校でも受けられるが、最終課程である専門教育は、王都の南にある学校都市ヴェールにある本校でしか受けられない。そのためヴェールの本校は王城に匹敵するくらいに大きかった。いや、ある意味王城よりも大きい。なぜならヴェールという都市そのものがシャルトン王立学校だからだ。

ヴェールの住宅街は全て学生のが借りる貸家であり、飲食店街や商店街に並ぶ商品は学生向けのものばかりで、値段も国が補助している分安い。

学校都市とは言え勉強だけしているわけではない。ちゃんとした娯楽施設もあり、生徒達は衣食住はもちろんの事、様々な面において、青春を謳歌できるようになっている。

もちろんヴェールを運営する大人達の区画もあり、大人達が楽しむ娯楽施設等もちゃんと存在しているが、学生達に悪影響がでないように、立ち入り禁止区画になっている。

ヴェールはシャルトン王立学校を中心に、波紋の様に住宅街が並び、波紋を切り裂くように東西南北に延びたメインストリートには、飲食店や娯楽施設が並び、少し離れた丘の上には、貴族達が借りる小さな屋敷が並んでいる。通称貴族丘である。シャルトン王立学校に通う貴族は、貴族丘に家を借りる事が一種のステータスとなって

いた。
基本的にシャルトンに在学する生徒は一人暮らしをする。貴族でもだ。だから貴族が住む屋敷にしては、どの屋敷も小さく造られているし、大きな屋敷を沢山建てる程ヴェールは広くない。それにあまり大きくては一人で管理する事など学生には無理がある。そんな貴族達が住まう家の中でも、少し大きめな家で、怪しい魔法の実験が行われていた。一度は成功したようだが、二度目は事故が起きたようだ。

「どうやら中身は鳩や猫じゃないみたいね」
ディアスの中のシェーナはちょっとホッとした。もし中身が猫や鳩だったら、想像もしたくないようなとんでもない事になっていただろう。いや、もうすでにとんでもないことになっているのだが、まだマシな方に転がったようだ。
「簡単に言うと、私とあなたの魂が入れ替わったのよ」
「はぁ？」
シェーナの中に入ったディアスには、一瞬理解できなかった。
「その布に描かれた魔法陣は、血を垂らした生物の魂を交換する魔法を発動するための物よ」
「……はぁっ？　ってことは俺とお前の魂が入れ替わったって事か？」
そう言ってディアスは自分の体を見下ろした。
「あああああああああ！」
ディアスは愕然とした。わかったのだ。シェーナが言ってることが本当だと言うことが。
「なんじゃこりゃあ！？」
ディアスは見た目で一番変化がある、盛り上がった自分の胸を鷲掴みにした。
「何してんのよ！」
その瞬間シェーナがディアスの頬をひっぱたいた。

「ぐあっ！」
今のシェーナの体はディアスの体で、ディアスの体はシェーナの体だ。当然シェーナは力加減が分からない。思いっきりひっぱたかれたディアスは、ソファーに向かって背中から飛び込むように吹っ飛んだ。
「いきなりなにすんだよ！」
「スケベ！　変態！　いきなりはそっちでしょう！　人の胸を勝手に触るなんて、変態以外何者でもないわ！」
「はぁ？　あのなぁ。自分の体がいきなり変わったら確かめるだろう」
「だからってさわる必要なんてないでしょう！」
「まぁまぁ二人とも。今はそんな事で言い合ってる場合じゃないでしょ？」
「……そうね」
エリスが仲裁にはいると、シェーナは意外にもすぐに落ち着いた。いや、落ち着いたように見えるだけだった。頭の中ではどうしようとどうしようと言葉が堂々巡りしている。
「とりあえず。早く戻せ」
ディアスが言うと、シェーナは体をピクリと震わせた。
「どうした？」
「……今すぐには無理」
シェーナは消えそうな程小さな声で言った。
「何だって？」
「今すぐには無理って言ったのよ！」
「何故だ！？」
ディアスはシェーナに詰め寄った。
「布の上に魔晶石があるでしょう」
そう言ってシェーナは魔晶石を指さした。
「あぁっ！　これ真っ黒になってるよ」
エリスがそれに気づいて言った。

「魔晶石の力が全て使い果たされてる。新しい魔晶石を持ってこないと、魔法を発動させる事ができないわ」
「じゃあ早く取ってこいよ」
「予備がないのよ」
「それなら買ってくるなり、借りるなりしてこい！」
「それも無理。この魔法はその……魂とかを操るネクロマンシーって言う種類の魔法で、一般的には禁止されているの。だからネクロマンシーに必要な魔晶石も売られていないわ。所持する事自体禁じられているのよ。私は闇市場を知らないし……」
「じゃあ、どうやってシェーナはその魔晶石を手に入れたんだ？」
「去年の夏、故郷に帰った時に、旅行先で偶然見つけたよ。使わなくても珍しいから買って帰って来たの。いけないことだけど……」
「それで、シェーナの故郷は？」
「ガーネイル……」
「ガーネイルだって！？」
「そう。ここから馬車でも片道七日はかかるわ。魔晶石がある場所まで行くのに更に三日。往復で約半月かかるわ。学校を休んで行くにはちょっと時間がかかり過ぎるわ」
「なら故郷にいる親に頼んで、持って来てもらえばいいじゃないか。貴族なんだから使用人とかに運ばせればいい」
「魔晶石がある場所は危険なのよ。旅行先でちょっと宿を抜け出して行った場所なんだけど、モンスターが生息しているの。親や使用人に取ってこさせるわけにはいかないわ。かといって冒険者なんかにネクロマンシー系の魔晶石を取ってこいなんて依頼はできないわ。下手すればゆすられる危険性があるし」
　冒険者とは人々のやっかい事を解決して報酬を得たり、モンスターと呼ばれる凶悪な生き物を退治して、その賞金を得て生活している者だ。中には各地に眠る遺跡を探索して一攫千金を得た者などもいる。夢のある仕事だが、荒事が常に付きまとう仕事でもある。だから当然の如くガラの悪い者達も多い。良い冒険者を見極めればい

いのだが、下手をすればネクロマンシー系の魔晶石を持っている事をネタに、ゆすって来る可能性もある。
「なら自分達で取りに行くしかないな。往復で半月なら二ヶ月ある夏休みに取りに行けばいいってことだろう」
「……そうね。それしかないわ。問題は夏休みまでの三ヶ月を、このままの姿でどうにか生活していかなければならないってこと」
「何とかなるだろう。たった三ヶ月……って、期末試験はどーすんだよ！」
「うっ……」
学校には夏休み前に期末試験がある。この試験をしくじると進級審査に非常に響く。下手をすれば留年だ。シェーナもディアスも総合主席を狙っている。だから期末試験は高得点を狙っている。もし体が入れ替わったままで、お互い未知の分野の試験を受ける事になったら、当然進級さえ難しい。
「体が……魂の方か？　まぁどっちでもいいけどさ。入れ替わった事を先生に話して直してもらおう。魔導士部なら闇の魔晶石を保管してるかもしれないし。直せる先生がいるかもしれないだろ」
「駄目よ！　ネクロマンシーは禁呪なの。バレたら退学どころじゃないわ！」
「そんな事言ったってなぁ。禁呪を使う方が悪いんだろう」
「う、それはそうだけど……。あなただって触るなっていったのに、ソファーの下をあさったのがいけないんでしょう！」
「ぐっ」
「騎士を目指してるからそんな事しないとか言っておいて、直ぐにソファーの下をあさるなんて呆れるわね。もし私がネクロマンシーを使った事を誰かに言ったら、あなたが女性の部屋をあさるのが趣味で、しかも私の胸を揉んだって言いふらすわよ。この二つの事をみんなが聞いたらどう思うかしらね？　下手すれば停学よ」
「くっ……。卑怯な……」
「退学がかかってるんですもの。これくらい当たり前よ。あなた、

本当は私に消えてもらいたいんじゃないの？　総合主席を狙っているなら、私はあなたに取って最大の障害だもの」
「そんな事は思っていない」
「どうかしら？」
疑うようなシェーナの視線と、それを受け止め跳ね返すようなディアスの視線がぶつかり、暫く睨み合っていたが、ディアスはため息をついて視線を外した。
「……わかった。言わない。こうなったら俺がシェーナに剣術を、シェーナが俺に魔法を教えるしかないな。たった三ヶ月で」
「三ヶ月……」
魔導士になる者は子供の頃から基礎知識を身につけ、実技という名の訓練をこなして来た。それは剣術も変わりない。それをたった三ヶ月間で、最終教育課程である専門教育の期末試験に、合格する程の実力を身につけなければならない。厳しいどころではない。大抵の人なら諦めるだろう。だがシェーナもディアスも諦める気は更々なかった。
「期末試験だけじゃない。普段の生活や授業だってお互いどうしたらいいかわからないだろう。俺はエリスがいるからいいとして、シェーナはどうするんだ？　俺の友達を一人呼んでこようか？　フォローできる奴がいないと無理だろう」
「信用できるの？」
「大丈夫だ。信用できる奴だよ。俺とエリスの幼なじみでもあるしな」
「あっ、クレイの事？　彼なら大丈夫よ。シェーナ。私からもお勧めするわ」
「……へぇ」
シェーナはちょっとした疎外感を感じた。ディアスもエリスも、そしてクレイと言う男も、みんなお互いを知っている。自分だけがエリスしか知らない。それがちょっと悔しかった。
「じゃあ、明日にでもクレイを連れて来るわね」

「そうだな。明日は休みだし、今日はもう遅いし、明日にしよう」
そう言ってディアスは立ち上がると、ドアの方へ向かった。
「ちょっと。どこへ行くのよ？」
「帰るんだよ。何だか異常に疲れた……」
「待ちなさい。その姿であなたの家に帰られたら困るわ。私があなたの家に入る所を見られたら、変な噂が立つかもしれないでしょう」
「じゃあどうするんだよ」
「しばらくの間、私と一緒に住んでもらうわ」
「はぁ？」
「私はあなたを信用してないの。見張らせてもらうわ。あなたはさっき私の胸をさわったでしょう。一人にしたら何をされるかわからないわ。言っておくけど。元の体に戻った時に……その……私の貞操が奪われてたら、殺すわよ」
「誰がそんな事するか！　男と寝る気はない！」
「相手が男だとは限らないでしょう！　自慢じゃないけど、私は男だけじゃなくて女にももてるのよ。中には特殊な趣味を持った子もいるみたいだし、気をつけなくちゃいけないの。わかった！？」
「もてるとか言っておきながら、その歳で処女じゃないか。気をつけるまでもないんじゃないのか！？」
「うっさいわね！　男運がないのよ！　言い寄ってくるのはあなたみたいな変な奴ばっかりなのよ！」
「まぁまぁ、二人とも。押さえて押さえて。あーもーなんですぐ喧嘩するかな……」
エリスは二人の仲の悪さにうんざりした。こうも二人の相性が悪いとは思いもしなかった。
「とりあえず、あなたは私と一緒に住んでもらうわ。私だって嫌なんだから、あなたも我慢しなさい」
「でも……同じ屋根の下で暮らすなんて、その……危なくない？」
エリスはディアスが聞いてるので遠慮がちに言った。
「大丈夫よ。男の体の私を襲うほど変態じゃないと思うから」

「あぁ。ありえないな。……仕方ない。それにお互い剣と魔法を教え合うにも、都合がいいしな。でもどうするんだよ。俺の体のお前がこの家に入る所を見られてもいけないだろう」
「大丈夫。私に考えがあるわ」
シェーナは郊外の自然地区にある大きな湖の近くに、別宅としてもう一つ家を借りていた。疲れた時や夏の間の避暑に使うという名目で家を借りたが、本当は都市中央では周りに迷惑がかかるような、大規模な魔法の実験をするための拠点して借りたのだ。
その別宅はシェーナのクラス担任と学校のお偉方とエリスくらいしか知らない。そしてシェーナは別宅まで行くのに、空間転移の魔法を使っている。
空間転移と言っても、どこへでも転移できるわけではなく、予め空間転移用の対なる二つの魔法陣を用意しておかなければならない。転移もその二つの魔法陣を行き来できるだけだ。魔法は非常に便利であるが万能でない。その空間転移用の魔法陣をディアスの家にも設置して、通学は別宅からお互いの家まで空間転移によって移動してから、ちゃんとそれぞれの家から通学しているように見せかけるのだ。そうすれば二人が一緒に住んでいる所を見られる心配はない。
「普段は今話した別宅で過ごすわ。学校へはそれぞれの家へ転移して通学するのよ」
「面倒だな。だいたい俺がその空間転移とか言う魔法を使えるのか？」
「大丈夫よ。魔法陣を予め設置すれば、誰にでも使えるようなるから」
「ふ～ん」
「ふ～んじゃないわよ。あなただってこれくらいの知識は当たり前のように身につけてもらう必要があるのよ」
「そう言えばそうか。自覚しておくよ」
「とりあえず。あなたは今夜この部屋に泊まりなさい。私の寝室に入ったら殺すからね」

「あぁ分かったよ。しっかし、殺す殺すって、学校のアイドルがこんなにおっかないとは思わなかったよ。はぁ……猫かぶってたんだな」
ディアスは少しだけシェーナに対して幻滅した。
「エリス。こいつの家知ってる？」
シェーナはディアスを無視して、エリスの方を向いた。
ディアスも地方貴族出身である事をシェーナは知っていた。最大の敵であるディアスの事を調べるのは当然の事だ。貴族出身ならばこの近くに家を借りているはずだ。
「おいおい。こいつはないだろう？」
「人の胸を触る変態はこいつで十分よ」
「ディアスの家なら知ってるよ」
「じゃあ案内して。こいつの家まで行って魔法陣を描いてくるわ」
「うん。わかった。ディアス。鍵かして」
「シェーナ。左ポケットの中に俺の財布が入ってる。財布の小銭入れの中に鍵が入ってるから、渡してやってくれ」
「わかったわ」
シェーナはポケットの中に手を入れると、財布をディアスに渡した。中を見るのはマナー違反だと思ったからだ。ディアスはシェーナから財布を受け取ると、中から鍵を取り出して、エリスに向かって放り投げた。
「よっと」
エリスは手を上げて、器用に空中でキャッチした。
「朝まで大人しくしているのよ。なるべくリビングとキッチン以外はうろつかないこと」
シェーナは念を押して言うと、魔法陣を描くための特殊な道具と、魔法陣の見本が描かれた魔導書を持ち出し、エリスに家の前の様子見てもらい、人がいない事を確認してから、ディアスの家へと向かった。

一人残されたディアスはあまり動かないのが得策だと思い、ソファーの上でゴロゴロしていたのだが、ディアスはいつまでもじっとしていられる人間ではなかった。ふと立ち上がると玄関まで来た。玄関に全身が映せる鏡があった事を思い出したのだ。きっと出かける前に身だしなみをチェックするための物だろう。

ディアスは暇つぶしに今の自分の姿を見てみようと鏡を覗き込んだ。

鏡には見慣れない美人が映し出されている。美しいが剣を使う戦闘にはまるで向いてない体だ。今まで鍛え上げてきた自分の体でないと、どうも落ち着かず不安だ。

ディアスはまるで壊れやすい貴重品を扱うように頬に手を当てた。柔らかくてほんのり暖かい。肌の質が全然違った。ただ鍛えれば良いと思っていたディアスとは違って、大事にされた体だ。

シェーナは学期末に行われるトーナメントで、常に一位にいるだけあって、有力な総合主席候補として人々に知られている。シャルトンでは魔導士学部と剣術学部に、それぞれの主席が用意されているが、両学部を合わせた卒業年度総合主席がもう一つある。だからディアスもシェーナには注目していた。総合主席を取るために一番の障害になるのは、同じ剣術学部のライバル達ではなく、シェーナだと思った。けれど不思議と邪魔だとか敵だとか、そう言う気持ちは浮かんでこなかった。シェーナの事を良く知らないという事もあるし、剣術と魔法では分野が違いすぎて想像ができなかった。凄い奴がいる。ただそれだけだ。しかしどうやらシェーナの方は、ディアスを敵だと認識しているようだ。

ディアスはしばらくボーっと鏡に映るシェーナの姿を見つめた。

シェーナは成績が優秀なだけでなく、容姿端麗で人当たりも良い。そうなると周りが放っておくわけがなかった。シェーナはいわゆる学校のアイドル的な存在なのだ。それがディアスにとってプレッシャーになっていた。

果たして自分はシェーナを演じきれるのだろうか？

ディアスは試しに、鏡に向かって上品に微笑んでみた。意外な事に上手くいった。ディアスは普段荒っぽい所があるが、これでも一応地方貴族の端くれである。上品に振る舞おうと思えばできるのだ。

ディアスは調子に乗って、今度は色々とポーズを取ってみた。長めのスカートを手でつまんで膝を折り、女性流の会釈をしてみたり、あご先に指を当てて、思案しているポーズを取ってみた。そして手を腰に当てて頬を膨らませる。なんだかこのポーズが一番様になっている気がした。そしてスカートをふわりとなびかせつつ、その場で一回転すると、鏡に向かって微笑んだ。

「……ディアス。あんた何やってんの？」

エリスは玄関のドアを開けたまま、不気味な生き物を見る様な目でディアスを見ていた。

「うっ……あ……え～と……」

ディアスは顔を真っ赤にして狼狽えた。考えてみればまるで変態である。

「シェーナがそんな事するなんてありえないし、中身がディアスだと思うと不気味すぎるわ」

エリスは小さく息を吐いた。

「これはシェーナの言うとおりね。ディアス一人にしておくのは危険すぎるわ」

「そ、そうか？」

「そうよ。そうそう、シェーナだけど、別宅にも魔法陣描かないといけないから、今日は別宅で寝るそうよ。転移用の魔法陣って複雑だから、遅くなるみたいだし。だからシェーナから今夜ディアスを見張ってくれって頼まれたのよ。女の子同士なら大丈夫でしょ。何か反論でもある？」

ディアスは帰す言葉が見つからなかった。

「いい？　魔法陣の上に立って、クロス・オーバーって唱えるのよ」

翌日の朝になると、エリスが別宅への行き方をディアスに教えた。

方法は至って簡単。魔法陣の上で呪文を唱えるだけだ。それだけでもう一つの魔法陣の上へと移動する事ができる。
「私が見本を見せるから、後から来てね。あっ、それと。転移先の魔法陣の上に何か乗っていたら、魔法は発動しない仕組みになっているの。だから私が向こうの魔法陣から離れる時間だけ待ってね」
「わかった」
「それじゃあ。お先に。クロス・オーバー！」
エリスは魔法陣の上に乗って呪文を唱えると、魔法陣から光の柱が上がり、エリスはその光の柱に包まれると消えてしまった。転移したのだ。
「……凄いな」
ディアスは恐る恐る魔法陣の上に上がると、エリスの言われたとおりしばらく時間をおいてから、呪文を唱え始めた。
「クロス・オーバー！」
次の瞬間、ディアスは真下から突き上げる光に飲み込まれた。
「うおっ！」
思わず声を上げ、腕で顔をかばって目を閉じると、クスクスと笑い声が聞こえた。
目を開けるとエリスが口に手を当てて笑っていた。
「おっきな声上げちゃって。そんなにびっくりした？」
エリスはいたずらっぽい視線をディアスに向けた。
「あぁ。初めてだからな。で、ここは？」
ディアスは少し恥じるように苦笑すると辺りを見回した。ここは窓一つない部屋だった。
「ここは私の別宅の地下室よ」
答えたのはシェーナ。
「魔法の光が見えないように、地下に魔法陣を設置してあるの」
「なるほどね」
「今あなたが立っている魔法陣の隣にあるのが、あなたの家に繋がってる魔法陣よ。生活必需品なんかは自分の家から持ってきて」

「わかった」
「とりあえず、あなたの部屋を教えるわ」
そう言ってシェーナはディアスを促した。
「あ。私はクレイを連れてくるね」
「わかったわ。よろしくね」
「うん。じゃ、ディアスの家の魔法陣を借りるわね。そっちの方が近いから」
エリスが言うと、シェーナは借りたままだったディアスの家の鍵をエリスに渡した。
「俺のプライバシーはどうなってんだよ……」
「エリスは幼馴染みなんでしょう。家に入れた事はないの？」
「そりゃあ、あるけどさ。勝手にされたら困る」
「信用ないの？」
「わかったよ。気にしないさ」

「へぇ。なかなかいい部屋じゃないか」
ディアスは通された部屋をぐるりと見回した。
カーテンを開けると、目の前に湖が広がっていた。シェーナの別宅は湖畔にあり、湖の向こうには、万年雪に覆われた山々が見えた。
「綺麗な景色だなぁ」
「そうでしょう。この景色が気に入ってこの家を借りたのよ」
「へぇ。良い趣味してるな」
「当たり前でしょう。それと私の部屋は二階にあるけど、勝手に入ったら庭にテント張ってもらうからね」
「頼まれたって入らないから安心しろ」
「なら良いけど……」
シェーナはディアスの部屋を教えると、今度は別宅の間取りを教えていった。
「お風呂はここ。私が入ってる時は、この札を下げて置くから気をつける事！」

シェーナは手のひらよりちょっと大きめの札を、風呂場のドアノブにぶら下げた。
「男の体なんて覗かないから安心しろ」
「う。まぁ……そうだけど……」
シェーナは急に恥ずかしくなった。これからディアスがお風呂に入る度に、全部見られてしまうのだ。
「うぅ……」
「どうした？」
「な、なんでもないわよ！」
シェーナは真っ赤になって言った。

黒い瞳がシェーナとディアスを交互に観察していた。その瞳の持ち主であるクレイは、エリスに呼ばれてシェーナの別宅を訪れていた。来る途中に聞いた、エリスの要領の掴めない説明を、何とか理解したクレイは、エリス達三人が自分を騙しているのだろうと思った。
「やっぱりどう見ても信じられないな」
クレイは茶色の髪をポリポリとかいた。
口ではそう言っているが、クレイは戸惑っていた。シェーナと言えばシャルトン王立学校のアイドルである。そんな有名人が自分を引っかけるために、秘密の別宅まで使って手伝うのだろうか？　しかしシェーナはエリスの友達だ。あり得なくはないのだが想像しがたい。しかしシェーナとディアスの魂が入れ替わったなどと言う話よりかは信憑性がある。
「まぁ、俺がクレイだったらまず信じないな」
ディアスが言った。クレイから見ればシェーナが男口調で話している様に見える。
「今日俺達は、明日からの登校に備えて、お互い基礎的な事はできるように教え合う予定だ。暇かも知れないがそれに立ち会って自分なりに納得しくれ」

「しゃーないな。今日一日付き合ってみるか」
クレイはディアスと同じ剣術学部の生徒だ。剣の腕はディアス程ではないが、成績は学年ベスト五十位内に入っている。ディアス達の学年は八百人程いるのだから、それでもかなりの腕の持ち主だ。体付きはディアスよりもほっそりとしているが、その分俊敏そうだ。
シェーナはディアスがいない時はクレイに剣術を教わろうと思った。顔つきはシェーナの好みではなかったが、格好いい部類に入る。少し楽しみになってきた。シェーナは学校のアイドル的な存在だから誤解されやすいが、シェーナとて思春期の学生だ。異性への関心もちゃんとあるのだ。

まずは日が昇っている内に、ディアスが剣術の基礎をシェーナに教える事になった。
ディアスは始めに剣の持ち方と構え方をシェーナに教える事にした。ちなみに今日シェーナが使う剣は木製。本物の剣より軽いし、ディアスの体なら難なく持てるはずだが、シェーナは重そうに持っていた。意識的な問題なのだろう。
まずディアスは一番基本的な正眼の構えを教えてみた。
剣の持ち方だが、剣の柄頭を左手で持ち、右手は添えるだけ。そして肩に力が入らないようにして、剣先は目の前に相手がいると想像し、相手の喉の高さに定め、目線は剣先に構える。左右の足は正面に向けてすんなりと伸ばし、右足の踵を浮かせる。更に体は正面を向き、背筋を伸ばしてあごを引く。そして力まずリラックスしてないといけない。
「……駄目、無理」
シェーナがその構えに耐えられたのはほんの数秒だった。手を気にすれば足がおろそかになり、足を気にすると手がおかしくなる。どこかを直そうとすれば背筋が曲がったり、あごが上がったり、脇が甘くなったり、剣先が上がったりする。
「こんなの絶対動けないわ」

「大丈夫だ。一度リラックスしてから構え直して」
「……わかったわ」
シェーナは言われた通りに全身の力を抜き、剣を構えなおした。
「すり足はわかる？」
「地面から足を離さないように、ズルズル動くの？」
「そうだ。そのまますり足で前に出てみろ」
シェーナはディアスに細かい指示を受けながら、何とかすり足で前後する。その間に構えは崩れるわ、よろめくわで、クレイは見てられなかった。
しかしディアスの体は覚えているようで、シェーナは驚くほど早く構えとすり足を覚えた。当然ディアスと同じようには動けないが、それっぽく見える。
「なんかさ、体の方が覚えてるみたいね。出来の良いゴーレムを扱ってるみたいだわ」
「ゴーレムってのはどうかと思うが……。数え切れないほど練習したからな。考えるよりも体が動くのかもしれないな」
「ふ～ん。じゃあ、私はこの感覚を覚えていけば早いわね」
「……そうかもな」
次にディアスは振り方を教えた。
「ふんっ！」
調子に乗ったシェーナは、上段から唐竹に剣を振り下ろした。
「うあっ」
しかし真っ直ぐ振り下ろしたつもりの剣は、斜めに振り下ろされ、更に剣の重さに体が引っ張られ、剣先がガツンっと地面を叩いた。なまくらならそのまま剣がへし折れてしまってもおかしくない勢いだったが、木製の剣は軽い分折れなかった。
「あちゃぁ」
クレイが目を覆った。これが本当にディアスだったら良い演技をしてると思う。
「剣を真上から握ってないから脇が開いて真っ直ぐ振れないんだよ」

「むぅ。難しいわね」
シェーナはぶつぶつと文句を言いつつも、ディアスの言う事を聞いて剣を握り直し、素振りを続けた。そしてある程度振ってそれっぽく見えてきたら、今度は打ち込みに入った。
ディアスが木刀を水平に構え、それに向かってシェーナはひたすら木刀を打ち込む。
「やあっ！」
木刀と木刀がぶつかり合う度に、ガツンっとシェーナの手がしびれる。
「振り下ろした時に手の内を絞るんだ。力任せに叩いたんじゃ、力んで正確に打ち込めないぞ」
「もぉ。一度にそんなにいっぱい言われたんじゃ、覚えきれないわよ！」
「最初はそんなもんだ。でも俺達には時間がない。きついかも知れないが頑張るしかないぞ」
そう言ってディアスは水平に構えた木刀をひょいっとどけた。
「えっ？」
シェーナは再び木刀で地面を叩いてしまった。
「ひどい！　急に退けるなんてあんまりじゃない！？」
「ビシッと止めるんだ。外した時に止められなかったら、隙だらけになるぞ」
「うぅ～」
こんな調子で日が暮れるまでシェーナは基礎を習った。
ディアスは体が覚えていると言われて話を合わせたが、内心驚愕していた。そんなものは極限状態に陥った時に、無意識に体が反応する時に使う言葉だ。
実際試合や練習の最中に、無意識的に体が動く事がある。頭で考えるのではなく、もっとも適した動きを無意識の内に行ってるのだ。
ところがシェーナの動きには無駄が多いし、ディアスの動きに似てはいるが、素人臭さが抜けていない。少なくとも最も適した動き

ではない。
そこでディアスは二つの可能性を思いついた。
一つは一種の暗示。シェーナは体が覚えていると、自己暗示的な物を無意識の内に自らにかけ、ディアスの体が覚えている事を引き出しているのかもしれない。
もう一つは天授の才能。シェーナは剣術を人が百必要な行程を、十でこなす天授を持っているのかもしれない。
そしてディアスの体が覚えているから自分はできると思い込み、元からの素質との相乗効果によって、恐ろしい程早く剣術を身につけ、上達しているのだ。
（……まさかな）
ディアスは考えすぎだと思って、それ以上考える事を止めた。

クレイは半日二人に付き合って、やっと納得したようだ。まずディアスの女口調が気持ち悪い。ディアスはそんな喋り方をするような趣味じゃない。そして長い付き合いじゃないと気づかないような、仕草や考え方の違いから別人だと判断した。

「ふふふふ。ここからは私があなたに教える番ね。今までのお返しをしないとね……」
シェーナは意地の悪い笑みを浮かべた。
剣術の基礎訓練の後、シェーナはお風呂で汗を流し、食事を取った後、今度はディアスに魔法の基礎を教える番になった。
「ぐっ。俺は別に意地悪したわけじゃないぞ」
二人はリビングのテーブルの上に魔法の教本を置いて対峙していた。
「まずは基本中の基本から教えるわよ。あなたは世界創世神話は知ってる？」
「舐めるな。それくらいは誰だって知ってるだろう」
「本当に？　一応神話の説明からするわよ」

この国、いやどこの国にも共通して古くから語られている神話があった。ある学者が国々を旅してその神話をまとめると、驚くべき結果が導き出された。地方によって呼び名が違えども、どう考えても同じ神々が神話に出てきたのである。

神々は遠い昔、世界創世の覇権をかけて争った。そしてその戦いに勝った神々は、世界の礎となり、ありとあらゆる物を創造していった。

大地の神となったレリンスは、その名の通り世界の基本となる大地を創り上げた。空の神となったシェーサは大気を創り上げた。そして海の神となったアルレンソは広大な母なる海を創り上げた。これが三大創世神である。

生命の神となったアシャンは、海に陸に空に生命を創り出した。光の神となったレンテは、天空遙か彼方に太陽を創り上げた。闇の神となったアンマは、その創造物の素晴らしさに嫉妬し、夜を作り出して太陽を半分隠した。しかしアンマは罪悪感から月を作る事で、夜に光を差し込んだ。運命と試練の神となったファイレクは、春夏秋冬の四季を創り上げた。

これらはほんの一部で、様々な神々が世界を創世していった。

そして神々は自らの姿を模した人間を創った。

しかし先の神々の大戦で負け、混沌の神となったスィードは、その世界を気に入らず、世界の中に混沌を創り出してしまった。

神々は慌ててその混沌を調和しようと、従属の精霊達を世界に宿した。更に神々はその代表たる地水火風光闇の六大精霊の結晶、すなわち精霊石を創り、世界のバランスを保った。

かくして神話の時代は終演を迎え、人間の時代となった。

世界に入った混沌により、人間は自然の摂理から抜けだし、神々の予想を越えた。そして遂に人間は精霊の存在を知り、精霊の力を得て魔法を生み出した。それだけではなく、とうとう神が創造した精霊石を発見し、その絶大な力を持った精霊石を使い始めた。

魔法の発展は止まること知らず、その力は凄まじかった。多種多

様の魔法を生み出し、大地を空に浮かべ、天候すら操った。しかし熟した果実がいずれ地に落ちる様に、その文明は自らの力の強さ故滅んだ。精霊力を身勝手に使ったため、自然界のバランスが崩れたのだ。

世界中で天変地異が起こった。暖かい地域が寒くなり、寒い地域が暖かくなり、各地で嵐が竜巻が起こり、氷の大地が溶け大洪水を引き起こし、海は荒れ、津波が島々を襲い、山々は次々と噴火し、空は厚い雲に覆われ、幾日も光りを遮った。

世界中の種が絶滅の危機にひんした。

人間も例外ではなく生き残った者はほんのわずかだった。

しかし人間を始め全ての生き物は懸命に生き、世界が元の状態に戻るまで耐え続けた。

その間に精霊石の行方は忘れ去られ文明も後退し、そして人間は新たな文明を築き上げた。

精霊力のバランス崩壊による天変地異が原因なのか、世界にモンスターと呼ばれる異形な生き物が生まれ始めた。そしてそのモンスター達は人や他の動物を襲って食べる。これは人が魔法を使って世界を滅ぼした罪だと学者達は口を揃えた。

これが一般的に人々に知られている範囲の神話だ。ディアスが知っているのもこの程度だった。しかしシェーナはディアスが知っている以上に詳しく神話を説明した。魔法が生み出されるきっかけの話でもあるからだ。

「創世神話に出てくる代表的な神々の名前は全部言える？　神々が世界に使わした精霊達の名前は？　上位精霊くらいまではわかる？」

「……さっぱりわからん」

「試験の最初の方の問題にどれかは必ずでてくるわ。サービス問題だから、必ず覚えておく事。逆にここで点数取っておかないと、他人と差が付くわよ」

そう言ってシェーナは、教本に書かれている神々と上位精霊の名前に赤線を引きながら、丁寧に一つ一つ教えていった。

人は神話の時代に精霊の力だけでなく、より強力な精霊石の力を借りて、巨大な魔法を作り出したが、現在は文明が一度滅んでしまったためか、その精霊石がどこにあるのかはわからない。
けれども自然界には至る所に様々な精霊がいる。その代表的な精霊は地水火風光闇の六大精霊で、魔法は精霊の力を借りて使うのだが、その中でも破壊をもたらす魔法を黒魔法と呼び、治癒や防護の魔法を白魔法と呼ぶ。中にはどちらにも属さない魔法もある。
ディアスはてっきり今日から魔法が使えるのかと、内心ちょっと期待していたのだが、剣の道と同じくそう簡単にはいかないようだ。
剣術に例えると、今日の神話の話は、やっと剣がどんな形をしているのかを教えてもらっている段階である。まだ握らせてもくれない。この調子では呪文を教えてくれるまでには、まだまだかかりそうだ。

シャルトン王立学校は週休二日制である。週五日いけば二日休みだ。
「……！」
ディアスは起きると知らない部屋にいた。
「う～ん。昨日飲み過ぎたっけ？」
酔っぱらって帰れなくなったのだろうかと考えを巡らせながら、ディアスはもうろうとしている頭を振った。すると長い髪が顔にかかった。それを手で払いのけようとしてあることに気が付いた。
「はぁっ！？　金髪？」
ディアスは部屋を見渡して鏡を発見すると、その前に立って自分の姿を見た。
「あっ！　そうだ……体が入れ替わったんだ……」
二日経ったくらいではまだまだ慣れない。しかしこの体でいる間は、この体を使いこなさなければならない。ディアスは気合いを入れるために頬をパチンッと叩いた。
ディアスはとりあえず着替えようとしたが、今はシェーナの体だ

ということを思い出して躊躇した。しかし着替えないわけにはいかない。だからディアスはなるべく体を見ないように着替えた。
「……くそ。俺ってまじめ過ぎるのか……？」

「おはよう」
リビングに行くとシェーナがいた。
「おはよう。……まったく男ってのは朝から節操ないのね！」
シェーナが顔を赤くして言った。
「……しょ、しょうがないだろう。生理現象なんだから」
「くっ。まぁいいわ。朝ご飯作ったから食べなさい。私の体なんだから、ちゃんと栄養つけてもらわないと困るわ。美容にはバランスの良い食事が大事なのよ」
「はいはい。そうですか」
そう言ってディアスは席に着いた。
「まったく何で私があなたの食事まで作らなくちゃならないのかしら……」
「そりゃあ、怪しい魔法なんて使うからだよ。こっちはとばっちり受けてるんだ。これくらいしてもらわないとな」
「あなただっていけないのよ。普通ソファーの下から他人の私物を引っ張ったりする？」
「まだ言うのかよ」
「あなたが蒸し返すからよ」
「わかった。今のは俺が悪かったよ」
「それじゃあ、家事は交代でいこうと思うけど、あなた食事作れる？」
「伊達に一人暮らししてないさ。シェーナこそお嬢様っぽく見えても料理作れたんだな」
「今あなたが言った事をそのまま返すわ」
ディアスは苦笑するしかなかった。

食事を済ますと、シェーナはディアスと一緒に素振りを始めた。まずはまともに剣を振れるようにならなければ話にならない。ディアスは昨日よりも、厳しくシェーナを見た。剣の持ち方や姿勢など細かく見て、おかしいところを指摘する。今からきちんとしないと変な癖がついて、後で泣きを見る事になるからだ。

シェーナも理解しているらしく、ぶつぶつ文句は言いつつもディアスに従った。

しかし一緒に素振りをしていて、最初にばてたのはディアスだった。

「はぁ……はぁ……。何だよこの体……」

ディアスはいつもの半分も素振りをしていないのに、既に腕を上げる事すらできない状態だ。

「おまえって筋肉なさすぎ。体力もなさすぎ」

「あなたと一緒にしないでよ」

ディアスが息を切らしているのに対して、シェーナは息を切らしているどころか、汗さえかいてない。

「さすが俺の体だな」

ディアスはまだまだ余裕なシェーナを見て言った。

「そうね。なんだか怖いくらい体力あるわね。筋肉もあるし。あっ、今思ったんだけど、私の体で変な筋肉つけないでよ。戻ったときに腹筋割れてたら殺すわよ」

「うっ。いや、俺も普段の感を鈍らせないように、一緒に鍛錬しようと思ったんだが……」

「それは私の体なのよ！」

「……だ、大丈夫だ。剣術学部の女生徒は筋肉質な奴ばかりじゃないから、適度につければスタイルアップにも繋がる……はず……。ダイエットだと思えばいいじゃないか。しかも苦労するは俺だし」

「……まぁ、いいけど。それと勘違いしてもらいたくないから言うけど、私にダイエットは必要ないわよ」

「そうなのか？」

「そうよ。あっ、確かめようとしたら……」
「殺すんだろう？　絶対しないって」
「……ならいいわ」

昼食はエリスとクレイと待ち合わせして食べる事になっていた。明日からはそれぞれ違う体で、違う学部に登校しなければならない。だから四人で情報交換をし、少しでも疑われないように、細かい打ち合わせをするためだ。

シェーナとディアスは、教室で仲が良い子や悪い子の名前を教えたり、普段どんな事をしているかを教えあった。エリスとクレイもどうフォローするか話し合った。

「昨日今日で一つわかったことがある」

一段落つくと、ディアスが言った。

「なによ」

「おまえってすっごい猫かぶりだな。正直騙された気分だ」

「うるさいわね。女の子は誰だって美しく見せたいのよ」

「それにしても今のシェーナと、学校のシェーナとじゃ違いすぎないか？　今俺に話してるような言葉使いは絶対にしないだろう？」

ディアスの言葉にエリスがうんうんと頷いた。

「そうね～。シェーナはシャルトンじゃお淑やかで清楚って事になってるからね」

「あぁ。俺もそう思ってたよ。昨日までは……」

ディアスはため息をついた。

「くっ。それよりあなたはその『清楚でお淑やかなシェーナ』を演じるのよ」

「難しいな。今のシェーナの方がインパクトありすぎて想像できない」

ディアスはわざと嫌がらせのために言った。

「できないなら私にも考えがあるわよ。あなたの姿でとんでもない事してやるんだから！」

「てめぇ。それは卑怯だぞ！」
ディアスは腰を上げて言った。
「まぁまぁ、二人共。お互い助け合おうね。共倒れは馬鹿がすることよ」
エリスが今にも掴み合いになりそうな二人の間に入った。
「とりあえず三ヶ月の間は私とクレイが一緒に登下校した方が良いわね。学校生活はなにも学校内だけの事じゃないから。クレイもいい？」
「いいぜ。学校のアイドルと登下校できるなんて、役得じゃないか。見た目はディアスってのが嫌すぎるけどな」
「ひでぇな。って事は俺はエリスとか。なんて言うか、波瀾万丈な生活になりそうだな」
ディアスはむしろ面白そうに言った。
「あなた達は気楽ね」
シェーナはため息をついた。
「それと週末は私も手伝うね。休みの最初の日は毎週用事があるから無理だけど、次の日は大丈夫だから一日付き合ってあげるわ。私がディアスに教えて、クレイがシェーナに教えた方が効率いいでしょ。と言うわけでクレイ大丈夫？」
「いいぜ」
「二人共せっかくの休みなのに悪いな」
「いーのよ。友達でしょ。それにどうせ三ヶ月だしね」
「そう言うことだ」
シェーナは友達のために力になろうとする二人が、なんだかとても眩しく見えた。

打ち合わせが終わり別宅に戻ると、今度はディアスがシェーナに魔法を教わる番になった。
昨夜は神話の勉強から始まり、大まかな魔法の歴史やら、色々と眠たくなる事を教えてもらったのだが、今日はやっと魔法について

詳しく話してくれる事になった。
「昨日も言ったけど、魔法には大きく分けて地水火風光闇の六つの属性があるわ。そして世界の至る所にいる精霊の力を借りて使うの。例えば風の強い所は風の精霊力が強いから、風系の魔法が威力を増すわ。本当は全ての属性の魔法を使えれば、その場その場に応じて使い分けができていいんだけど、人によって精霊との相性があるの。例えば私は割とどの属性も使いこなせるけど、それでも風の精霊と相性がいいから、風系魔法の威力は他の魔法よりも高いわ。逆に風と正反対の位置にある地系魔法はあまり得意じゃないの。威力も他の魔法よりも落ちるわ。周りも私が風が得意って事を知ってるから、あなたには風の魔法を中心に覚えてもらうわよ」
「なるほど。それにシェーナの体にあった属性の魔法なら、魔法が成功しやすいって事だな」
「そう言うこと」
「それで相性ってのはどうやってわかるんだ？」
「対象の魔力を計る魔法があるわ。その魔法を使えば属性の傾向も調べられるの」
「便利なもんだな」
「戦闘を行わない魔導士達が、順列を決めるために開発したって聞いたわ」
「はーん。なるほどね。でもそれだけじゃ本当の強さじゃないだろう」
「そうね。でもとりあえずの目安には使えるわよ」
そう言ってシェーナは魔力計測の魔法を自分を対象にして唱えた。するとシェーナの目の前の空間に、魔力を示す帯状の光りや、円盤を一部カットしたような光りが現れた。
「この数値がディアスの体の魔力よ」
「なんて書いてあるんだ？　まだ俺には読めん」
光の帯の横には、魔法に使われている精霊文字が一緒に浮かび上がっていた。

「今は気にしないで。今教えても分からないと思うから」
「了解」
「ふむふむ。あなたの魔力って本当に低いわね」
「魔導士学部の生徒と一緒にするなよ」
「それもそうね。それで相性はと……。ふむふむ、光の精霊と相性がいいのね。逆に闇の精霊とはあまり相性よくないわ。他はそこそこと……」
「それを見たって今の俺とは関係ないんだろう」
「今のあなたとはね。私もあなたの体で魔法を唱える事があると思うのよ。だからついでに調べたの」
　そしてシェーナは、地水火風光闇の精霊は、それぞれの上位精霊から下位精霊まで様々な精霊がいる事を教えた。例えば火の上位精霊にはイフリートと呼ばれ、まるで炎の巨人の様な精霊がいたり、下位精霊には炎のトカゲの姿をした、サラマンダーと呼ばれる精霊がいる。使う魔法のレベルによって、どの精霊の力を借りるのかも変わってくるのだ。
　どうやら今日も魔法を唱える所まで辿り着けそうにないディアスであった。

男女逆転学園生活

ディアスは緊張していた。何しろ今から自分はシェーナとして登校しなくてはならないのだ。だから通学路の途中で待ち合わせしていたエリスを見つけるとホッとした。

「おはよう」

ディアスはなるべくお淑やかで清楚な雰囲気で挨拶した。

「おはよー。うんうん。そんな感じだね」

昨日の夜。ディアスはエリスに教えてもらい、お淑やかで清楚なシェーナっぽいしゃべり方を練習した。なぜシェーナ本人じゃなくてエリスからなのは、自分の姿をしたシェーナに教えてもらっても、正直気持ち悪くてはかどらなかったのだ。それに客観的に見ているエリスの方が良い気がしたのもある。

シェーナは有名人なだけあって、ディアスは登校中に沢山の生徒に挨拶された。その度にディアスは軽く手を振って挨拶を返した。

「ちょっと、ディアス。わざわざ手を振り返さなくてもいいって。ディアスだって朝の挨拶の時に手を振らないでしょ」

エリスは小声で言った。

「すまない。緊張しているんだ」

「言葉使い！」

「ごめんなさい。気をつけるわ」

「それでよし。それと人が多くなってきたからシェーナって呼ぶからね。ちゃんと反応するのよ」

「わかったわ」

教室に入るとディアスはシェーナの席を探した。シェーナの席は真ん中よりもちょっと後ろの窓際にあった。その周りには四人の女生徒が集まっていた。その四人がシェーナの姿に気づくと、ディアスを取り囲むように寄って来た。

「シェーナ様。おはようございます」

その四人は声をそろえて挨拶をした。
（こいつら練習してるのか？）
ディアスはおはようの合唱とシェーナに様をつけている事に驚いた。
「おはようございます」
こいつらがシェーナの言っていた、シェーナ様親衛隊という奴だろう。
シェーナ様親衛隊の一人がシェーナの椅子を引いた。座れという事だろう。こいつらはシェーナの意思とか考えているのだろうか？
「ありがとう」
ディアスは礼を言って座った。ディアスはみんな立っているのだから、立ち話でも全然よかった。逆に四人に見下ろされている方が落ち着かない。ディアスは反射的に机の上に腰掛けて、目線の高さを同じにしようと思ったが、今の自分はシェーナだと思い出して踏み止まった。四人は一方的に争うようにディアスに話しかけて来る。ディアスはその勢いに押されて、相づちを打つくらいしかできなかった。
エリスはシェーナと同じ教室だった。エリスは荷物を置くとディアスの後ろに回り込み、ディアスだけに聞こえるくらいの小声で囁いた。
「教室の廊下側にいる三人組に気をつけて。特に髪の長い女の子は、シェーナを目の敵にしているわ。名前はサラ。自分がナンバーワンにならないと気が済まないタイプの人ね」
ディアスとエリスの視線に気が付いたのか、その髪の長い女性がこちらに向かってきた。
「朝からご機嫌がいいようね。愛想振りまいて、まるで学校のアイドルにでもなったつもりなのかしら？　図に乗った女って怖いわ」
サラは見下すようにディアスを見た。
今朝シェーナの姿をしたディアスが、手を振って挨拶していた事が、ちょっとした話題になっていた。今日のシェーナは機嫌がいい

と。
（シェーナって意外と苦労してんだな……。あれだけ有名なら敵も多いのか……）
さっきまでキャーキャー騒いでいた親衛隊の四人は、サラが怖くていつの間にか離れた所で、事態が収拾するのを見守っていた。
（あいつらは友達ってわけじゃないのか……？）
「何よ、その目は」
サラは歯ぎしりしてから言った。
ディアスはシェーナに同情して物思いにふけっていたのだが、親衛隊にチラッと視線を送っただけで、視線をサラに向けたままだった事に気が付いた。つまり同情の視線をサラに送っていたのだ。
「人を哀れんだ目で見て……冗談じゃないわよ！　貴方何様のつもり！？」
サラがシェーナに向かって何を言っても、ディアスにとっては他人事である。別に怒りを感じるわけでもないのだが、いい加減に鬱陶しくなってきた。ディアスは今朝登校してから何も悪い事はしていない。一方的に絡まれる筋合いはないのだ。
（うぜぇ）
そう思ったディアスはサラを睨んだ。
学校を卒業していないから一流とは言えないが、同学年でトップの力を持つ戦士の眼力である。戦闘で相手を圧倒するための視線。それをサラは無防備に受け止めてしまった。
「ひっ……」
サラはまるで衝撃波を喰らったような錯覚を感じた。まるで試合中に対戦相手と対峙しているかのようだ。しかも今までこんなに圧倒された事はない。自然に足が震えて来た。
「皆さん。おはようございます」
そこへタイミング良く担任の先生であるフィアが入って来て挨拶をした。
生徒達は各々の席へと戻った。

サラもディアスの視線から解放されて、よろめきながら席へ逃げた。
その日、シェーナはやっぱり機嫌が悪いという噂が流れたのだった。

時間を少々さかのぼる。
シェーナはクレイと一緒に登校していた。
「学校のアイドルシェーナと一緒に登校できるなんて夢のようだな」
クレイは楽しそうに言った。
「でも今の俺はディアスの体だぞ」
シェーナは少し呆れ、少しがっかりした。クレイの様な反応は飽きるほど経験している。
「それが残念で仕方ないよ。でもディアスの体でなけりゃ、今こうして一緒に登校する事も、友達になれるかもしれないきっかけもなかったんだぜ。これはこれで良かったんだよ。前向きにいこうぜ」
「私は良くないわよ。あぁ、早く戻りたい。……って友達？」
「図々しかったかな？」
「いいえ。よろしくね」
シェーナは戸惑いつつも少し頬を染めて微笑んだ。ディアスの顔で。
「うぅ。すまないが、ディアスの体で女口調だけはやめてくれ。それと照れたのは分かったが頬染めて微笑まれると……こう言っちゃ失礼だが、怪しまれるだけじゃなくて気色悪い！」
「そ、そうだな……よしっ！」
シェーナは改めて気をつけるように気合いを入れた。
「おっはよっ！」
声と共もシェーナは背後から叩かれた。
「きゃっ！」
シェーナはバランスを崩してつんのめった。普通ならそのまま倒れるところだが、シェーナは足を一歩前に出して踏み止まった。シ

ェーナが考えるよりも、ディアスの体が反射的に体を動かしたのだ。
「きゃっじゃねーよ。気色悪いな」
後ろからディアスを叩いたのはジーンという男だった。
「おっと、今日は日直だったんだ。じゃあな」
そう言ってジーンは足早に先に行ってしまった。
「なんなんだ……」
「単なる挨拶だろう。俺らも行くぞ」

剣術学部の教室は夕方から使われる。日が明るい内に外のグラウンドや鍛錬場で実技を習い、夕方になってから剣術理論や戦法戦術の抗議が始まるのだ。
だからシェーナはいきなりピンチだった。
実技の授業前に学生服から、動きやすい服装へと着替えなければならない。服装は動きやすければなんでもよかった。しかしシェーナは男物の服を持っていない。だからディアスから服を借りてきている。制服はともかく男の服を着る事に抵抗があったが、今はディアスなのだ。そう思えば問題ないのだが、シェーナは男臭い更衣室の中で、半裸の男達と一緒に着替えなければならない事に激しい抵抗を感じた。自分の体は男の体なのだと思いこませ、凄まじい早さで着替えると、すぐさま更衣室から脱出した。
（明日からは制服の下に着替えを着て来よう……）
シェーナは頬を真っ赤にし、涙目になって恥ずかしさに耐えた。女性なら可愛らしいと思えるが、今はディアスの顔である。出口でばったりと合ったクレイの顔は、不気味な生物を見た様な表情をしていた。
今まで向けられた事のない視線を感じ、シェーナはクレイを突き飛ばして走り去った。
（最悪……）

魔道士学部の午前の授業は室内での魔法の講義だ。

（……まったくわからん）
ディアスは昨日シェーナに魔法の基礎知識を教えてもらったが、それとはまるで次元が違う内容に悪戦苦闘していた。
「バノンの魔法陣は火の第三階級の精霊が司っています。第二節の詠唱を唱える時に、このバノンの魔法陣を召還するのですが、その時に術者にかかる負担は、魔力数値にして五十程です。さて、五十の負担がかかる魔法と言えば、先週教えた水系の魔法はなんでしたでしょう？　シェーナ。答えなさい」
運が悪い事にシェーナが指された。
「えっ？」
ディアスは戸惑った。知っているはずがない。先週は剣術学部で剣を振っていたのだから。
「先生。それはフリジットだと思います」
答えを出すのに時間がかかっているシェーナに変わって、サラが答えた。
「正解です。でも私が指名したのはシェーナですよ」
「すみません。どうもシェーナさんが答えられないようでしたので、思わず答えてしまいました」
もちろん親切からではないのは、誰が見ても明らかだった。
でもディアスに取ってありがたい助け船だった。
（ナイスだ。サラ）
ディアスはサラに向かってにっこり微笑んだ。
「うっ」
しかしサラにはその笑みが不気味な物にしか思えなかった。

一方シェーナは授業が始まって一層ピンチになっていた。
授業と言うよりは、稽古といった方がいいだろう。その稽古は柔軟体操から入り、ウォーミングアップもかねて、素振りから始まる。
その素振りなのだが、シェーナは緊張のためかまともに振れなかった。

「おいおい。ディアス。まるでど素人じゃないか。どうした？」
担任のレンツァが眉をひそめた。
「いや……その……」
シェーナが困っているとクレイが助け船を出した。
「こいつ。どうやらスランプみたいなんですよ」
「スランプか。なるほどな。俺も昔あったよ。まぁ、そう言うことなら仕方がない。気が済むまで素振りをしていろ。あんまり直らない様だったら、荒療治するからな」
「……はい」
シェーナはクレイに助けられてホッとしたが、スランプじゃないので治しようがない。荒療治なんてされたらつぶれてしまう。シェーナは泣きたい気分になった。
素振りが終わると、シェーナはクレイとペアを組んで打ち込みに入り、そしてとうとう寸止めによる打ち合いの稽古に入った。
「よう。ディアス。お前でもスランプなんてあるんだな」
声をかけてきたのは、今朝登校路で叩いてきたジーンだ。
「俺だって人間だぞ。スランプの一つくらいあるさ」
「じゃあ、お前を倒すのは今がチャンスってわけだな」
そう言ってジーンが剣を構えた。
「来いよ」
「……わかった」
シェーナはジーンの構えた練習用の剣に、自分の練習用の剣を合わせた。ディアスに稽古や試合を始める時に、まず最初にお互いの剣を軽く合わせると聞いていたからだ。
キンッと小さく金属の音が鳴る。練習用の剣は刃をつぶしてあるが、鋼の剣で殴れば当然痛いし、打ち所が悪ければ死ぬ事もある。
「はっ！」
ジーンがいきなり剣を袈裟懸けに振るった。
シェーナはとっさに避けようとしたが、対応できなかった。
「うっ」

シェーナは反射的に目を閉じたが、予想した痛みは来なかった。
当然の如くジーンが寸止めしたからだ。
「おいおい。避けもしないで、目を閉じる馬鹿がいるかよ」
ジーンには悪気はなかった。こいつにもスランプなんてあるのか？　と疑い半分からかい半分で稽古の相手を挑んだのだったが、ディアスの状況が予想外に悪い事を知り、罪悪感込み上げてきた。
「悪かったな」
「いや、いいんだ……」
しかしそれを見ていたクラスメイトが、相方を放り出して近寄ってきた。
「はっ！　こいつはいいや！」
近寄って来たのは金髪を固めて逆立てて、軽薄そうな男だ。
「よせよ。ケイン」
「ジーン。てめぇは黙ってろ。おい、ディアス。俺とも相手してくれよ。この間の傷がうずくんだ」
（何こいつ……。ださい上に危ないわ……）
シェーナは恐怖した。魔法が使えれば、こんな奴一撃で倒せる自信がある。しかし今は魔法を使うことができない。
「おい。ケイン。ディアスとやる前に俺とやらないか？」
そう言ったのはクレイだ。
クレイは剣を抜くと、ケインの喉元に剣を突きつけた。
「ちっ」
ケインは舌打ちすると去っていった。
「自分より強い奴は相手にしない最低な奴だよ」
クレイはシェーナにだけ聞こえるように言った。
「気をつけろよ。今がチャンスだと思って、あいつみたく狙ってくる奴が少なからずいるみたいだ」
「ディアスって敵が多いの？」
「そうだな……。あいつってさ、前回の期末トーナメントでも、その前の期末トーナメントでも優勝してるだろう。シェーナには負け

るけどディアスも結構人気あるんだ。強い奴に憧れる者、逆に反感を感じたりする者。色々いるって事さ。中にはディアスを倒して俺が学年ナンバーワンになってやるって思ってる奴もいるかもしれない。そこら辺はシェーナの方が分かるんじゃないか？」

「……そうね」

シャルトン王立学校では、生徒達の昼食の選択肢はかなり広い。お金のない生徒達は安上がりな学生食堂で済ます事が多いが、そうでない生徒達は学校の外にある飲食街へ行く。

魔導士学部と剣術学部は、校舎は別々だが隣同士に建てられてあるため、その気になれば両学部の生徒達は、待ち合わせてしてどこかへ食べに行く事なんて簡単だ。

シェーナ達は午前の授業が終わると、お互いの状況を報告するために、同じレストランで待ち合わせしていた。シェーナがクレイと一緒にそのレストランに着くと、既にディアスとエリスが、食事を半分くらい済ませていた。

「おっそーい！」

エリスがシェーナを見つけると、手を振りながら言った。

「先生に個人指導受けてたのよ」

「シェーナ。口調が女だぞ」

シェーナが言うとクレイが注意した。シェーナは気が緩む度に女言葉を使ってしまう。

「ごめん。疲れてたから……」

シェーナは素直に謝った。するとおやっとエリスが眉を上げた。

「俺の方はスランプになったって事にしている」

シェーナが改めて言った。

「急に剣が使えなくなったための理由としてね。お前って結構人望あるみたいだけど、敵も多いんだな。おかげでひどい目にあったぞ」

「ケイン達ね。あいつはお山の大将になりたがってるから。私が弱くなったと思って、今の内に叩きのめしておこうってつもりなので

しょう」
　ディアスは完璧に女言葉を扱っていた。
「冗談じゃない！　そんなのたまったもんじゃない！」
「クレイがいるでしょう。クレイならケインなんて子供を相手にしてるようなものだわ。あれでどうやってお山の大将になるつもりなのかしら」
「……そうだな。クレイは頼りになるな。一人じゃ正直逃げ出してたかも」
「惚れるなよ」
「大丈夫。それとこれとじゃ話は別だ」
「ふふ～ん。でも脈ありって感じじゃないの？」
「ちゃ、茶化すなよ。エリス。それよりそっちはどうなんだ？」
「こっちは順調にピンチよ。ね？」
「えぇ。まず授業がさっぱり分からないわ。先生がおっしゃってる話がちんぷんかんぷんなのよ。それと実技なんだけど、魔法が全く発動しないわ。ここに来るまでにエリスに聞いたんだけど、ただ詠唱するだけじゃだめな……なっ……なっ……うがあああああああああ！　歯が浮く……」
「もっとゆっくりしゃべって。落ち着くのよ」
　身もだえ始めたディアスをエリスがなだめる。
「当たり前だ。ただ丸暗記しただけで魔法が使えたら、魔法学部なんていらない。本だけで十分だ」
　魔法を発動させるためには、呪文を唱えるだけでなく、頭の中で特殊な図形を浮かび上げたり、指先で特殊な印を結ばなければならない。時には魔法陣を召還したりもする。
「何で昨日教えてくれなかったのよ」
「それを教える所までたどり着かなかったんだよ。時間がなくて。それに教えるにしたって、種類が沢山ありすぎて、すぐには覚えきれないぞ」
「そうなの……。でも今日はあの日だから集中できないって事にし

ておいたから大丈夫」
「はぁあっ！？」
シェーナはそれを聞いて顔を真っ赤にした。
「ちょっと待って！」
シェーナはテーブルに手を着き、身を乗り出して叫んだ。ガシャンとテーブルの上の食器が跳ね上がる。
「あんた。まさかそれをみんなの前で言ったんじゃないでしょうね！」
「えっ？　そうだけど。剣術学部では割とみんな平気で言ってるわよ」
女性は子供を産むために月に一度痛い思いをする。その日と前後数日、個人差はあるが、腹や腰が痛くなって、激しい運動ができない。魔道士学部では魔法を学べばいいだけだから、自分があの日だと言う事を隠し通す事ができる。しかし毎日激しい運動をする剣術学部では、絶対にばれてしまう。そして学校側も一日つぶしてしまうのは、もったいないと言うことで、別カリキュラムを組むのだ。どの女性も入学して間もない頃は、こそこそと別カリキュラムを申請していたのだが、慣れてくれば平然とあの日だからと言うようになっていた。どうせばれるのだから、こそこそする必要はないと。
「剣術学部と同じように考えないでよ！　あーもー。恥ずかしくて顔から火が出るわ」
シェーナは両手で顔を覆った。
シェーナは感情的になると、男口調で喋るのを忘れ、いつものように喋る傾向があった。
「頼むからそれはやめろ！」
今度はクレイだけでなく。ディアスもエリスも語尾が違っていたが同時に叫んだ。
しかしシェーナは聞いちゃいなかった。
「それもこれも、あんたのせいよ。あ・ん・た・の！」
とうとうシェーナはディアスの胸ぐらを掴んで揺さぶった。

「ぐあっ。やめっ、やめ……。俺は女の胸ぐらを掴むような事は……うえっ」
「ふぬっ！　ふぬっ！」
シェーナは全くディアスの声を聞いてなかった。興奮してディアスを頭をカックンカックンと揺さぶり続けた。
「この私が個人指導を受けることになるわ、みんなの前で生理発表されるわ、今まで築き上げてきた私のイメージを、ど・う・し・て・くれるのよ！」
しかしディアスは何も答えなかった。それもそのはず、ディアスの体から繰り出される、カックンカックン攻撃に、シェーナの体が耐えられず気絶していたのだ。
そしてこの日の午後の授業でも、二人は何もできずに終わってしまった。

「あのケインと言う男に勝ちたいわ。弱い人間しか相手にしないなんてちょっと許せないわ」
学校から別宅に帰ってきたシェーナが、ディアスを見つけると言った。ここにはエリスとクレイくらいしか来ないので、口調を気にする必要はない。だからいつも通りに喋っている。
「そうだな。俺が弱くなったと思って狙ってるんだろう。だがすぐには勝てないと思うぜ。あいつだって成績はそこそこいいしな。とりあえず、今はひたすら素振りと打ち込みしかないぞ」
「冗談言わないで。そんな悠長な事してられないわ。技とか教えてよ」
「あのな……シェーナだって、基礎が大切な事はわかってるだろう？」
「もちろんよ。でも、この体が覚えてるんでしょう」
「おいおい。そんな都合良く動かないぞ。ちょっと物覚えが早くなる程度なんじゃないか？　もし体が覚えているだけで、強くなれるんだったら、もうケイン程度なら楽勝だぞ。でもそうじゃないだろ

う。まずは俺の体になじむことから始めないとな。でもまぁ今日はいくつかの斬撃の種類を教えるよ」
「……わかったわ」
そしてディアスはシェーナに斬撃を教えていった。
「今まで素振りしていたように、上から真っ直ぐ振り下ろすのを唐竹と言う。相手に向かって右肩から斜めに振り下ろすのが袈裟切りだ。逆に左から斜めに振り下ろすのが逆袈裟と言う」
ディアスは一瞬にして剣を抜くと、シェーナに向かって三連撃放った。シェーナの頭と両肩口で寸止めしたのだが、シェーナはびびりまくって瞳孔を細めた。
「き、斬られるかと思ったわ……」
「驚かせちゃったか？」
「わざとでしょう？」
「当たり」
ディアスはクスリと笑った。
「次に胴へ左から右へ薙ぎ払うのが右薙、逆に右から左へ薙ぎ払うのが左薙だ」
今度はシェーナをびびらせないために、シェーナの前でゆっくりと右薙に剣を振るい、返す剣で左薙に剣を振るった。
「そして左下から右上に切り上げるのが右切りあげだ。逆が左切りあげ。そして真下から切り上げるのを逆風と言う」
最後にディアスは左下から右切りあげに切りあげ、そのして唐竹に剣を振り下ろし、逆風に切りあげ、逆袈裟に切り下ろすと、右下から切り上げた。
「そしてこれが……」
ディアスは剣を引くと地面と水平に構え、剣先をシェーナに向けた。
「突きだ！　はっ！」
ディアスはシェーナの喉元に向かって剣を突き出した。
「ひっ！」

剣はシェーナの喉元を、指一つ分空けてぴたりと止まった。
「突きはもっとも使われる技だ。実戦だと人を斬ったら血と脂で刃が鈍り、切れ味が落ちるからだ。大きな剣で肉をぶった切るならまだしも、そうでないのなら、切れ味の鈍った剣だと、斬るよりも突く方がいい」
「な、なるほど……」
シェーナは冷や汗をかきつつ、喉元に突きつけられた剣に視線を落とした。
すぅっと剣が引かれると、ふぅっと息を吐く。
「まずは全ての斬撃の素振りだ。その後に型と技を教えるから」
「わかったわ。ものには順序があるものね……」
シェーナはびびったせいか、大人しくディアスに従った。
「そうだ。斬撃がわからなくちゃ、連続技も教えられないからな」
シェーナの素振りは暗くなっても続いた。
いくらディアスの体でも、明日は筋肉痛でしんどいだろう。

くたくたになったシェーナは、お風呂で汗を流し食事を取った。この後はディアスに魔法を教える番だ。
「どうしたの？」
シェーナがお風呂から上がって来ると、ディアスはソファーの上でへばっていた。
「眠い……。シェーナの体で剣なんか振ったから異常に疲れた。明日は筋肉痛だな……」
「あんまり無茶をしないで。私の体なんだから」
「わかってるよ。でも徐々に体力と筋肉を付けないと、やってられないな」
「わかってると思うけど、筋肉には気をつけてよね」
「了解」
ディアスはだるそうに言うと、汗を流すために立ち上がった。

「じゃあ、基本的な集中の方法を教えるわね。エリスから授業内容を聞いたけど、今は火の魔法を教えてもらっているところね」
シェーナは剣術だけでなく、日々の授業内容をエリスから教えてもらっていた。
エリスは人に何かを教えるのはあまり得意ではないが、シェーナは聞き手上手で、エリスから上手く要点だけを聞き取り、教本と照らし合わせて勉強していた。そうしないと三ヶ月もみんなから遅れてしまい、本業が疎かになってしまう。
「火の魔法を唱える時は、三つの三角を真横にちょっとづつずらして並べたような図を頭に思い浮かべるて。これをマジックシンボルって言うの。覚えておいて。試験にも出るから」
そう言ってシェーナは紙の上に、王冠の様な図を書いた。
「これ思い浮かべながら、意識を眉間に集中するのよ」
シェーナはディアスの眉間に向かって指さした。それも振れるか振れないかギリギリの所で指を止める。
「じんじんくるでしょう」
「ああ」
「そこよ。そこに意識を集中するの。慣れない内は、自分で指を指して感じるのよ」
「なるほど。良く絵本や劇なんかで、魔道士が額に手を当てて呪文を唱えているのは、この事だったのか」
「そうね。でも眉間に指を当ててるようじゃ、その魔道士はダメね」
「……なるほど」
「とりあえず、火の呪文を教えるわ。まずは簡単な発火の魔法よ。詠唱内容を教えるから、今言ったように集中するのよ」
「まてまて、メモするから」
ディアスは慌ててペンを握った。
「いくわよ。火の精霊よ。我に集いて姿を見せよ！　ファイア・アピア！」
ボッとディアスの目の前に小さな火が現れた。しかし火種がない

ので一瞬で消える。
「うあっ！」
ディアスはびっくりして仰け反った。さっきの仕返しである。
「あはははっ」
「驚かすなよ」
「ごめんごめん。じゃあ、やってみて。狙いは目線の先よ」
「……わかった」
ディアスはメモを見て暗記すると、息を深く吸い込んでから詠唱を始めた。
「火の精霊よ。我に集いて姿を見せよ！　ファイア・アピア！」
ボッ！
「うおっ！」
ディアスは思いもよらない威力にびっくりした。
「おい。シェーナが放ったのよりもでかいぞ？」
「あたりまえよ。私の体とあなたの体じゃ、魔力に桁違いの差があるわ」
「あ、そうか。俺の体は今シェーナだったんだ……」
「自覚が足りてないんじゃない？　同じように、次は光をつける魔法を教えるわ。実はこっちの方が基本かな。まずは光の魔法の集中方法だけど……」

ディアスとシェーナは少しずつではあるが、お互いに剣と魔法を教え合った。
そして月日はそろそろ一ヶ月を過ぎようとしていた。すでにシェーナとディアスを知る者は、二人の長すぎるスランプに、とうとう二人は弱くなったと認識し始めていた。

シェーナは放課後校舎裏に呼び出されていた。相手はマッチョな男だ。だからクレイが一緒に来ていて、隠れた場所からシェーナの様子を見守っている。いざと言う時に飛び出してシェーナを助ける

ために。
しかし……
「待ってましたよ。ディアスさん」
その男はどこかそわそわしていて落ち着きがなかった。そんな様子の男をシェーナは何度も見てきた。嫌な予感がする。
「ディアスさん。俺、ディアスさんがお仲間だと知って嬉しいっす！　だから言うっす！　俺……ディアスさんの事が好きっす！」
「……はぁっ！？」
シェーナは立ち眩みしそうになった。よく女子の間では、美少年同士の恋愛小説などが流行ったりするが、マッチョは論外だ。
（これが現実なの……）
現実は小説のような甘いロマンスに溢れていない。その事にシェーナはがっかりした。
「すまない。俺は男には興味ないし、お仲間でもない」
シェーナはディアスの面子を守るために言った。
「でもディアスさんは、男に目覚めたって言う噂が……」
「そんな噂どこから聞いたんだ？」
そう言いつつシェーナは冷や汗をたらした。オカマと間違われてもおかしくない行動をしてきた記憶が山程ある。
「あちこちで噂になってますよ」
「噂は噂だ。みんなにも言っておけ。俺は普通だと」
「……そうでしたか……。あの、この事は……」
「大丈夫だ。今日俺は放課後ここには来なかった。真っ直ぐ家に帰った。そうだろう？」
「ありがとうございます。やはりディアスさんは素敵だ……」
マッチョな男は頬を染め、目を潤ませると、踵を返して走り去って行った。
「……どうしよう」
シェーナは罪悪感を感じた。ディアスが知ったらどうなってしまうのだろう。めちゃくちゃ怒るだろうか。そう思うと怖くなってき

た。
「どうやら噂はデマだったようだな。少々安心したぞ」
そう言って現れたのは長髪の男だ。まるでカラスの様な黒い髪に、刺すような鋭く黒い瞳。少し危険な香りがする男だ。スリルを求める女なら放っておかないだろう。そしてシェーナの好みではないが美形である。美少年同士の恋愛には、さっきのマッチョでなく、この男の様な者が出てきて欲しいものだとシェーナは思った。
しかし目の前の男は、そんな美少年の恋愛小説には絶対に現れないとも思った。気配が物騒過ぎるのだ。そして自然体ながらも隙が全く感じられない。シェーナは一発でこの男は、ディアスに匹敵する強さを持っていると直感した。しかし……
（……誰だっけ？）
非常にまずい。相手はディアスを知っている。しかしシェーナは目の前の男が誰だかわからない。クレイは物陰に隠れているので、助けを求めるわけにもいかない。
「カマを掘られて弱くなったと聞いた時は、自分の耳を疑ったぞ」
「疑って当然だ。デマだと知って安心する程信じるんじゃねぇよ」
「そうだな。しかし弱くなった事は確かのようだな。こうして対面してても、まるで威圧感が感じられない。以前のお前はどうした？
スランプだそうだが、いつまでもスランプだと俺が許さんぞ。完璧でないお前を倒したとしても、何の意味もない」
シェーナは思い出した。こいつの名はジェスター。ディアスがいるせいで、期末トーナメントでずっと二位だった男だ。
「なかなか調子がでなくてね。しかし後期までには戻してみせる」
「遅いな。それでは前期トーナメントに間に合わない。何とかしろ」
「何とかって言ってもな。これぱっかりはわからない」
なんとか平静を装っているが、シェーナは冷や汗をかきっぱなしだった。
「わからないじゃだめだ。どうしても治らないのなら、俺が荒療治してやろう」

「それはもう試したよ」
嘘だった。そんな事冗談ではない。
「まぁ、期末トーナメントまでには努力するよ」
「……わかった。お前だからこそ信用しよう。しかしもしも俺の期待を裏切ったら、わかるよな？　その事を覚えておけ」
そう言ってジェスターは踵を返した。
「ああ、覚えておくよ」
ジェスターが見えなくなると、シェーナはその場にへたり込んだ。
「おい。大丈夫か？」
「……駄目、無理」
「……」
「嘘よ。でもどうしよう。絶対無理だよぉ」
「弱音吐くなよ。どうにかするしかないだろう」
「剣を使い始めてまだ一ヶ月しか経ってないのよ。やっと基礎が身に付いてきたばかりなのに、どうやってトーナメントの予選を突破するのよ。及第点取るので精一杯だわ」
「俺やディアスがいるだろう。大丈夫だって」
「でもディアスはもう私に何も教えてくれないかも……」
「あの噂か……」
「まあ、俺がフォローするから……がんばれ」
「駄目、無理。泣きそう……」

「ごめんなさい」
「……いったいどうした？」
ディアスは突然シェーナに頭を下げられて戸惑った。放課後になって別宅のリビングに呼び出されたら、そこにはシェーナだけなく、クレイとエリスまで集まっていた。何が始まるかと思えば、いきなり謝られてわけが分からない。
「その……ほら……、私って時々いつものしゃべり方するでしょう。あれって結構聞かれていたらしくて……。後……私、訓練とかで倒

れる時って、やっぱり女の子の様に倒れちゃうの。それは仕方ないでしょう。私は女の子なんだから。だから……その……後はクレイお願い！」
「仕方ないな。まぁ、なんだ。ぶっちゃけて言うと、ディアスがオカマか同性愛者じゃないかって噂が流れてる」
「はぁ？　ちょっと待て！　誰が同性愛者だと！？」
クレイは真っ直ぐディアスを指さした。
「ちなみに俺もとばっちり受けてる。どうやらお前の相手は俺らしい」
クレイががっくりと肩を落とした。
「クレイもごめん」
シェーナが学校で頼れるのはクレイだけだ。だからどこへ行くのもクレイと一緒だった。だから二人はデキてるのではないかと噂がたったのだ。
「うがあああああああああああ！」
いきなりディアスは頭を抱えて叫んだ。
その反応にシェーナがビクッと震えた。
「……なんで……俺が……ホモだと……」
ディアスは同性愛者が嫌いだ。一度同性愛者に言い寄られて襲われた事があった。その時は撃退したのだが、色んな意味で怖い思いをした事は、誰にも話していない秘密だ。
「あっ！」
シェーナは見てしまった。ディアスの目尻に光る物がにじみ出て来たのを……
「ごめん。本当にごめん」
「……はは。いいさ。普通の状態じゃなかったんだ。仕方ないよ……」
ディアスは乾いた笑いを浮かべた。
「悪いが今日は一人にしてくれないか」
そう言ってディアスはリビングから出て行った。

「どどどどどうしよう」
焦ってうろたえてるシェーナを見たクレイとエリスは、お互いに困った顔を見合わせた。
「どうしようって言われてもなぁ」
「ねぇ」
「あれだな。シェーナはちょっと真剣味が足りないと思うぞ」
「えっ？」
「シェーナってさ、義務感から剣術を覚えようとしているんだろう」
「……そうだけど」
「そしてディアスの事を敵視している。今はそうじゃないかも知れないけど、最初の頃は嫌ってさえいただろう」
「……正直言ってそうよ。ディアスは総合主席を狙う上での最大の障害よ。本当はこうやって馴れ合う気なんてなかったのよ」
「それが原因だな。俺から見ればシェーナが剣術を覚えるよりも、ディアスが魔法を覚える方が早いし、上達しているように見える。それがなぜだかわかるか？」
「……わからないわ」
「じゃあ教えてやる。ディアスはシェーナのために頑張ってるからだ。エリスから聞いたけど、普段の学校生活でも、お淑やかで清楚なお前を演じきってるってさ」
「そうよ。ばれないためだけじゃなく、シェーナの評判を落とさないために頑張ってるわよ」
「……え？」
「でもシェーナはどうだ？　義務感から必要最小限の事しかしていないんだろう？　ディアスなんかどうでもいいと思ってるから、普段の行動で粗が目立つんだ。しゃべり方にしろ倒れ方にしろ。気配りがなさ過ぎる」
「あいつが……私の事……そんなに……」
「あぁ。それに少し前にこんな事言ってたよ。シェーナは凄い奴だって。演じきれる自信がないって。シェーナには万人を引きつける

カリスマ性ある。俺にはシェーナ程のカリスマはない。そいつは持って生まれた才能みたいなものだから、それ以外の能力でシェーナを越え、必ず総合主席を取ってみせるってな。あいつはある意味シェーナに憧れていたんだよ。色々と裏切られて来たがな。まぁそれは俺も同じだが……」

クレイはとんだ猫かぶりだったよと、最後にボソッと言ったが、シェーナは聞かなかった事にした。それどころじゃなかった。

シェーナは今まで感じた事のない程の大きな罪悪感に襲われた。自分はなんて小さい奴なんだろう。なんて酷い奴なんだろう。そして自分とディアスの器の差がはっきりとわかり、敗北感まで感じた。思えばディアスはずっと自分を友達のように接してくれた。それは友達がエリスくらいしかいない事に、気遣ってくれていたのではないだろうか？　どんなにシェーナが冷たくしても、ディアスは暖かかったではないか？　もしかしたら同情だったのかもしれない。でもそれでも良かった。何故自分は今までディアスの優しさに気が付かなかったのだろうか？

気づくとシェーナは涙をこぼしていた。

「私……ディアスの所に行ってくる」

シェーナは流れる涙をぬぐいながら、ディアスの部屋へと向かった。

「クレイ。良かったの？」

「何がだ？」

「もしこのまま何も話さなければ、シェーナ、あなたの事好きになってたかもよ？　最近学校じゃずっと一緒にいるんでしょ？　頼りにされてたんでしょ？」

「……そうかもな。でもシェーナは俺の好みじゃないよ。それに俺は超人類と付き合う自信がない！」

「ぷっ。何よそれ？」

エリスは笑いながら聞き返した。

「だって超人類だろう？　シェーナもディアスもな。奴らは普通じ

ゃない」
　クレイもつられて笑った。
「俺は普通の恋で十分だ。親衛隊に怯える事もなく、誰かに妬まれるような事のない普通の恋で十分だ」
「……そか」

　ディアスは部屋にいなかった。シェーナはディアスを捜して別宅をあちこち歩き回り、屋根の上まで来てやっとディアスを見つけた。
「ディアス……」
　シェーナの声を聞いて、寝っ転がっていたディアスが、上半身を起こして振り向いた。
「シェーナ。お前、初めて俺の名を呼んでくれたな」
「えっ？　あっ……その、ごめん」
　シェーナはディアスの事を、総合主席を争う敵としか見ていなかった。だから一定の距離を置くために名前で呼ばなかった。馴れ合いをしたくなかったのだ。敵は敵であり、一線置いた関係を保とうとしていたのだ。今考えてみれば、何故そこまで意地を張る必要があったのだろうかと馬鹿馬鹿しく思えた。
「私。ディアスの事、総合主席を狙う敵としてしか見てなかった。だから名前で呼ばなかったの。だからごめん」
「今は違うのか？」
「……うん。たぶん。無意識に名前が出たの。それって心の奥ではもう敵として見てないって事だと思う」
「そうか」
　ディアスが微笑むと、シェーナは一瞬ドキッとした。
「私、クレイから色々聞いたの。ディアスが私の事を色々と気遣ってくれたり、私の評判を落とさないように頑張ってくれているとか……。それなのに私……」
　シェーナは熱い何かが込み上げて来て、それを押さえる事ができずに涙を流した。

「あいつ。余計な事を……」
「私も頑張る。今日みたいな噂は二度と流させない。汚名も返上できるように頑張る。ううん。返上してみせる。だから……」
「それならもういいよ。元に戻れば噂なんて消えるさ。グダグダ言ってる奴はぶちのめしてやるさ」
「……ごめんね」
「今日のシェーナは謝りっぱなしだな」
「だって私が悪いし……」
ディアスは気にするなとは言わなかった。言えばシェーナを追いつめる事になると思ったからだ。シェーナは十分反省している。ならもういいじゃないかと思った。
「もういいよ。シェーナは十分反省してる。もういいんだ」
「ディアス……」
「そろそろ戻るか。クレイもエリスも心配してるだろうしな」
「ちょっと待って。あのね。一つお願いがあるの」
シェーナは恐る恐る言った。本当は今言うタイミングじゃないと自分でも思う。しかしこの思いを止める事ができない。
「なんだ？」
「こんな私だけど、友達になってくれるかな？」
「ぷっ」
ディアスは吹き出した。
「なっ？　なによ！　人が真剣に悩んだ末に言ったのに！」
「だって、俺はもう友達のつもりだったからな。それは思い上がりだったかな？」
それを聞いてシェーナの顔がぱっと明るくなった。
「全然っ！」
「……それでだ。俺もシェーナに言わなくちゃならない事がある」
ディアスは頭をポリポリとかきながら言った。
「なに？」
「実はだな。魔法が使えなくなって、シェーナが弱くなったと思っ

た男達が襲って来た」
「え！？」
シェーナは血の気が引いた。まさか……
「魔法じゃかなわないから、ぶん殴って蹴り飛ばして撃退した」
「……はぁ。やられたかと思ったわ」
「その言い方はいろんな意味で危ないからやめとけ」
「なっ！　なに考えてんのよ！」
シェーナは顔を真っ赤にして怒鳴った。
「冗談だって。落ち着け」
「それで？　その後どうなったの？」
「今度は複数できた。だがしっかし、魔道士学部の生徒って体力も腕力もないなぁ」
ディアスは少し呆れているようだ。
「へ？」
「最初の不意打ちをかわした後は速攻片づいた。あれだな。魔道士ってのは懐に入られるとてんでだめだな」
「どうやって間合いに入ったの？　魔法をかわせたの？」
ディアスの言うとおり、魔道士は接近戦を苦手とする。だから敵を懐に入らせないように、間合いを開ける訓練をしている。
「わりと簡単だったぜ。相手の目線と手を見ていれば、いくらでも予想がつく」
「簡単じゃないわよ……」
光の槍や炎の弾丸は、突きだした手や杖から高速で放たれる。それを避けるにはかなりの訓練を積まなければできるようなものじゃない。魔道士学部の生徒は、魔法を当てる訓練もしてきたが、避ける訓練も怠っていない。シェーナだって避けれるようになるまで、かなり時間がかかった。ちなみに訓練では防御障壁を予め張ってから、魔法を避ける練習をする。そうでなければシェーナも何回死んだかわからない。
それをディアスは訓練なしでやってのけたのだ。剣を避けるのと

は全然違うのにだ。
「まぁ、そんなわけで、シェーナは男を素手でぶちのめす事ができる女って事になった」
「はっ？」
「そう言うことだ。すまない。でもこれってシェーナの体を守るためにやったんだぜ」
「あ……あはははは……。いいのよ。これでおあいこだもんね」
シェーナは乾いた声で笑った。
「もう一つある」
「えっ！」
「急にシェーナの親衛隊が増えた。やはり闘う女は格好いいからかな。特に下級生がお姉様お姉様ってうるさくてかなわん」
「それって、もしかしてあっちの趣味の人達……？」
「さあな。もしかしたらそうかもしれない……」
「親衛隊って勝手に作ってるけど迷惑なのよね……。まともな人少ないし……。もう分かってると思うけど、私って実は友達少ないのよ」
「やっぱり有名人ってのは近寄りがたいところがあるからなぁ。知り合いにはなりたいけど、友達になると色々と面倒だって思うかもな」
「う。確かにそう思うかも……」
「サラってさ、結構良い奴だと思うぞ」
「え？　なんで！？　サラって私の事嫌ってるでしょう。何かと目の敵にしてさ」
「でもシェーナの事を同級生としてまともに接してるのって、教室の中じゃエリスを除くとサラくらいだと思うぞ」
「……そうなのかな？」
「そうさ。素直に接すれば、結構良い友達になれると思うけどな。それを決めるのは俺じゃないから放ってあるけどね」
「ありがとう。そうね。体が元に戻ったら私から歩み寄ってみるわ。

ディアスの時みたいにね」
「シェーナ、お前って変わったな。前より輝いてる」
シェーナは頬を染めて視線を外した。
「おだてないでよ」
「なに恥ずかしがってんだよ。前のシェーナってさ。意地張って最高の女、最高の魔道士、最高の生徒を演じていただろう。それがすっかりなくなってる気がする」
「え、そんな風に見えてた？」
「そう思ってたのは俺だけかもしれないけどな」
「確かにそう見えてもおかしくないわ。親やみんなに期待されると、つい背伸びしちゃうの。私にミスは許されなかった。妥協も許されなかった。だから私は頑張ってきた。でもそれは間違いだったのよ。みんなのためじゃなくて、自分のために頑張っていれば、もっと普通にいられたのかもしれない……」
「今からでも遅くないんじゃないか？　丁度評判落ちてるしね。落ちる時は早いぜ。大衆ってのは残酷だからな。見切りをつけたら、新しい生け贄探し出して、前の生け贄には見向きもしないぜ」
「それはそれで寂しいわね。でも私はディアス達がいるからかまわないわ」
「それが普通ってやつだぜ」
「そうね」
シェーナはクスクスと笑って夜空を見上げた。
「夜空って綺麗ね。なんだか今初めて気がついた気分だわ」
「今まで余裕がなかったんじゃないか？　空はいつでも綺麗だぜ」
「余裕かぁ。そうかもね。色々とありがとう。私、ディアス達のお陰で変われそうよ」
「そいつは良かった」
ディアスの笑顔にシェーナはドキッとした。見た目は自分なのだがから、変な気分である。

「ディアス！　次よ、次！」
シェーナは変わった。今までと違って自分のために、そしてディアスのためにと思う気持ちが、剣術の上達を早めたのだ。まだ剣術をディアスに習って一ヶ月ではあるが、荒削りでも基礎を身に着け、次々と技と言えるものを身に着けていった。
「そうだな。次は返し技とか教えるよ。今まで教えてきた技を、防ぎつつ逆に相手に攻撃する技だ」
「へぇ……いいわね」
シェーナは剣を振るうのが楽しくなっていた。いや、ディアスと剣を交えるのが楽しくて仕方ないのだ。しかしシェーナ自身はまだその事に気づいてはいなかった。
一方ディアスも次々と魔法を覚えていった。
「今まで攻撃魔法を教えて来たけど、今日から防御魔法も教えるわよ。ディアスは魔法を避けられるかもしれないけど、広範囲魔法を撃たれたら避けきれないわ」
「ふむ。防御は大事だな」
「流石ディアス。わかってるわね」
ディアスは魔法の歴史やらうんちくやらは、覚えるのに時間がかかったが、実際に魔法の詠唱内容を覚える時は、飲み込みが早くすぐに覚えた。シェーナの方も余計な部分は省いて教えているせいもあった。

「ディアスって魔道士学部でも結構良い線いってたんじゃない？」
シェーナが夕食をディアスと食べながら言った。
ちなみに今日の料理はディアスが作った物だ。見た目は多少崩れているが、味はシェーナよりも美味い。シェーナにはそれが悔しかったりする。
「良い線か。でも剣術じゃもっと良い線いってるだろ。やっぱり俺は剣の道を選んで正解だったんだよ」
「何勘違いしてるのよ。私が言いたい事は、ディアスは魔法のセン

スもあるって事よ」
「ありがとうな。でもそれを言うなら、シェーナも剣の素質あるぞ」
「ほんと！？」
「ああ。なんだか褒め合ってちゃ成長しない気もするがな」
ディアスは苦笑しながら言った。
「あら。時には褒める事も大切よ。やる気が出るもの」
「そうかもな」
「ねぇ、エリスとクレイは何してるのかな。二人とも週末は二日の内片っ方しか手伝ってくれないし。二人とも毎週同じ日に用事があるなんて、怪しいわね」
「やっぱりシェーナは知らないんだな」
「え？」
「エリスとクレイは付き合ってるんだぜ。今頃デートの真っ最中だろう」
「えええええっ！」
シェーナは腰を浮かせて声を上げた。
「知らなかった……」
「あいつら誰にも内緒で付き合ってるからな」
「じゃあ。なんでディアスは知ってるの？」
「長い付き合いだぜ。いい加減気づくし、何回か二人がデートしてるのを見かけてる」
「でもなんでディアスにも言ってないんだろう。幼なじみなんでしょう？　三人は」
「幼なじみだからだよ。三人の内二人がくっついたら、なんか気まずいだろう。エリスもクレイも俺が気づいてる事を知ってると思うけど、あえて触れないでいるんだ」
「複雑なのね」
「複雑だよ。人間の気持ちってのはね。まぁ、俺にも恋人とかできれば、あいつらも遠慮する事なくなると思うけどな」
シェーナはディアスの言葉にドキッとした。そして急にディアス

を意識してしまった。考えてみれば同棲しているのである。今の状態は恋人同士だと言われてもおかしくない。ディアスが自分の姿をしているために、今まで意識していなかった。しかし一度意識してしまうともう手遅れだった。顔が赤くなり鼓動が激しくなる。

（な、何意識してるのよ……）

シェーナは慌てて平静を取り戻そうとしたが、どうもだめだ。どんどん顔中が熱くなってくる。このままじゃ顔が真っ赤っかになってしまう。

「私……ちょっと具合が悪くなったから、部屋に戻ってるね。悪いけど、片付けお願い」

「大丈夫か？　飯、まずかったかな？」

「ううん。美味しかったよ。悔しいほど……」

「そ、そうか。ならいいが……、薬とかいるか？　って魔法で治せるのか？」

「魔法は万能じゃないわ。それに治癒系の魔法は、私よりエリスの方が得意よ」

「じゃあ、エリスを呼ぼうか？」

「いいわよ。デートの邪魔しちゃ悪いから。ありがと」

そう言ってシェーナは逃げるようにリビングから出て行った。

「エリス。放課後相談したい事があるんだけど……」

シェーナは昼食の帰りに、エリスだけに聞こえるように言った。ディアスとクレイはシェーナ達のちょっと前を歩いている。シェーナはそうなるように、歩く早さを落としたのだ。

「いいわよ。それよりも大丈夫？　クレイの話だと、午前中全然集中力なかったって言ってたわよ」

「う……まぁ……そうなのよ」

「……あの日？」

「なっ！　ディアスの体であの日が来るわけないじゃない！」

「冗談よ。となれば……残りはアレしかないわね」

エリスはニヤリと口元を歪めて微笑んだ。はっきり言って怖い。
「その笑み怖いわよ」
「うふふふふ。そうかぁ。とうとうシェーナにも春が……ぶっ」
「わっ！　わっ！」
シェーナは慌ててエリスの口を手でふさいだ。幸い先に歩いているディアスとクレイには聞こえてないようだ。
「続きは放課後ね。大船に乗ったつもりで、まーかせて！」
エリスは親指を立ててウィンクした。
「……よろしく」
シェーナは急に不安になって来た。相談する相手を間違えてしまったかもしれない。

「……で？　どっちなの？」
ヴェールの中でもかなり外側にある喫茶店にシェーナとエリスがいた。他人から見たら男女の組み合わせなので、デートかと思うかも知れない。
シェーナは周りに人がいない事を確認すると、いつものように話し始めた。
「ディアスなんだけど、なんて言ったらいいかな……、急に意識するようになったの。これって……恋なのかな？」
「なんだか聞いてる方が赤面しちゃうわね」
「私も恥ずかしくて心臓が飛び出そうよ」
「それってどう見ても恋でしょ」
「……やっぱり？」
「そうよ。あ～もう。恥ずかしいわね。シェーナってさ、まわりに担ぎ上げられて、まともな恋なんて今までした事なかったでしょ？」
「うっ。そうかも。ちょっといいなぁって思う男の子がいても、いつも親衛隊に邪魔されるのよ。だからいつもうやむやになって、その内どうでもよくなっちゃうのよ。それと……周りの目や反応が怖いの」

「もったいないなぁ。シェーナなら誰だって一発で良い返事もらえると思うな」
「そうかなぁ？」
「たぶんね。でさ、今って周りの反応を気にしないでいいし、親衛隊に邪魔される事もない。素直に自分の気持ちを相手にぶつけられるチャンスじゃないかな？」
「そっか。そうだよね。うん」
「シェーナは今、恋の舞台に立ってるわ。後はシェーナの気持ち次第ね」
「恋の舞台……。なんだか素敵ね。そう言うエリスも、今恋の舞台に上がってるのよね？」
「なんだ。やっぱりバレてたのか」
エリスはちょっと照れた笑いをこぼした。
「実はディアスに聞いたの。全部……」
「……そか」
「幼馴染み三人って微妙な関係みたいね」
「友情と愛情が絡むとやっかいなのよ。幼馴染みって気兼ねなしに付き合えるけどさ、だからって何でもできるわけじゃないし。三人の関係を崩したくないから、時には逆に気を使ったりする事もあるのよ」
「……なんかエリスって凄いわね」
「そう？」
エリスが首をかしげると、シェーナはコクコクとうなずいた。
「話を戻すけど、シェーナってさ。本気の恋するのって遅すぎだわ」
「うっ。私もそう思う」
「損してるわよ。恋ってさ、良い事ばかりじゃなけど楽しいわよ。でも選択を間違わないように慎重にね。余分なプライドや、意地とか全部取り払って、残った感情から答えを導きだしてみて」
「……わかった」
「頑張ってね」

「うん」

シェーナは帰るのが怖かった。わざと回り道をしたり、小物を買ってみたりした。ディアスの体で可愛い女物の小物を買った時、お店の人が頑張ってねと言ってくれた。きっと彼女へのプレゼントだと勘違いしているのだ。そう言えばディアスはどんな物を持っているのだろう。趣味は剣以外に何があるのだろう？　好きな食べ物は？　好みのタイプは？　気づけばシェーナはディアスの事で頭がいっぱいになっていた。それに気が付いて恥ずかしくなったシェーナは、自分をごまかそうといきなり走り出した。

（私って何やってるんだろう……）

シェーナは放課後、毎日ディアスに剣の稽古をつけてもらっている。今日はその稽古に遅れてしまった。

「遅いぞ、シェーナ」

ディアスは既に素振りを始めていて、額に汗をかいていた。

「ごめん。ちょっと用事があって……」

実際用事があったのだ。嘘はついていない。でも何も言わずにディアスを待たせてしまった。そんな後ろめたさが声を小さくさせた。

「なぁ。俺、何か悪いことしたか？」

ディアスは剣を納めて汗をぬぐった。

「えっ？　全然そんなことないわよ」

「じゃあ、何で避けるんだよ？」

「私。避けてなんかないわよ！」

シェーナは思いもよらない事を言われてびっくりした。

「そうかなぁ？」

「私、ディアスの事嫌いじゃないし……」

（むしろ好きだし）

シェーナはハッとした。今初めて確信した。自信を持ってディアスが好きだと。

確信した瞬間、シェーナは真っ赤っかになった。なんだかクラクラする。目を合わせていられない。体中が上気してゆでだこのようになった気分だ。
「おい。どうした？　顔が赤いぞ」
ディアスが近寄って手をかざしてくる。きっとおでこを触って熱を確かめるつもりだ。
「はうっ！」
動揺して動けないシェーナは、なすがままにおでこに手を当てられた。
「熱っぽいな」
（……もうダメ……）
ディアスが目と鼻の先にいる。しかしまともに見られない。
「あ……あの。ディ……ディアス。ちょっと熱っぽいから今日はもう寝る。ごめんね」
「分かった。ゆっくり休みな。後でおかゆでも作って持って行くよ」
「う……うん」
この時からシェーナはディアスとまともに顔を合わせられなくなった。やっと話せるようになったのは、週の半ばを過ぎてからだった。

「やっといつものシェーナになったな」
ディアスはシェーナと剣を合わせながらいった。
（誰のせいだと思ってるのよ！）
「ごめんね。心配した？」
「ああ。おれが何かしたのかなって」
（したわ。十分過ぎるほど！）
「ディアスは何も悪い事してないから気にしないで」
「そうか……」
「それよりさ。今週末、気晴らしに王都にでも遊びに行かない？
ずっと稽古と勉強で疲れちゃったわ。たまには息抜きも必要だと思

うの」
シェーナは何度も練習した台詞を言った。
「そうだな。たまにはいいかもな」
「やったね！」
「クレイとエリスも誘うか」
「え？　いいわよ。デートの邪魔しちゃ悪いわ」
シェーナはあらかじめ予想していた反応に対して、用意していた言葉を返した。シェーナはあらゆる会話のパターンを予想して、シュミレーションしていたのだ。そのせいで昨夜は寝付けなく、教室の授業で熟睡し、先生に怒られたのは内緒である。
「そうだったな。ま、いいか」
「うんうん。それでさ、今王都で流行ってるミュージカルを見に行こうかと思ってるんだけど、ディアスは興味ある？」
「う～ん。行ってもいいぜ。ミュージカルは見た事ないから、ちょっと楽しみだな」
「ほんと！？　私も楽しみ」
「それじゃ。再開するか」
ディアスは疎かにしていた剣を再びシェーナに向けた。
「仕方ないわね」
シェーナとしてはもっと話していたかったが、仕方なくディアスに剣を向けた。

王都に遊びに行く朝、別宅の前にあらかじめ手配しておいた馬車が到着した。
「おいおい。たかが息抜きに金使ってるなぁ」
ディアスは少々驚いた。
「馬車を手配するのは貴族のたしなみよ。それにこっちの方が目立たないでしょう」
「あぁそうか。勘違いされたら面倒だしな」
「……別にそう言う意味じゃないわよ」

シェーナはただ邪魔されたくなかっただけだった。もし親衛隊に見つかったりしたら、デートどころではなくなってしまう。
シェーナは馬車に乗ってから話題をあれこれ探した。昨夜色々と考えていたのだが、いざとなったら緊張して何も思い出せない。
「なぁ、シェーナ」
「な、なぁに？」
だから口を開いたのはディアスが先だった。
「今のままじゃ、及第点は取れてもトーナメントは予選すら通過できないんじゃないかな？　俺もシェーナも七歳の頃からシャルトン王立学校に通ってるだろ。周りのみんなだってそうだ。もう十年以上も修行して来た奴らだ。それをたった三ヶ月頑張った程度で勝てると思うか？　はっきり言ってそんなに甘くない」
「……そうね」
シェーナは期待した話題からかけ離れていたのでがっかりした。でもディアスが言ってる事は、シェーナも薄々思っていた事だ。いや、なるべく考えるのを避けていた。
「だから、俺はやっぱり剣も使いたい。そうすればまだ勝ち目がある。それでだ。剣に魔法をかける事ってできるのか？」
「確かにそう言う魔法はあるわ。魔法でしか倒せないモンスターなんかもいるしね。でもあまり注目されていない分野でもあるの。モンスターを倒すにしても、魔法しか効かない様な特殊なモンスターを倒す時にしか使わないし、使うにしても自分じゃなくて味方の戦士にかけるくらいで、まず自分にはかけないわ。自分の武器に魔法をかけて闘うよりも、攻撃魔法を撃った方が強いもの」
「なら剣術ができる俺ならどうかな？」
「それは確かにいいかも。剣にかける魔法って範囲が狭い分、拡散されないのよ。だからその分魔力が凝縮されて威力が高いわ」
「なるほどな。放たれる魔法はどうやっても、ある程度魔力が拡散されちまうしな」
「分かってきたじゃない」

「そうでなきゃ困るだろ」
「そうね」
「それでさ、魔導士学部のトーナメントって武器を使ってもいいのか？」
「いいわよ。杖を使ってる人が一番多いかな。魔法の杖は魔力を増幅してくれるから」
「杖を使ってるのは見た事あるさ。俺が言いたいのは刃物とかそういう武器さ」
「あぁ。そういう事ね。刃物も使っていいわよ。実際短剣や剣に魔法をかけて闘う人もいるわ。ただ防御に使うためってのが多いわね。短剣や盾とかに防御魔法をかけて、強力な防御障壁を作り出して相手の魔法を防ぐのよ。だからディアスが剣に魔法をかけて闘うのは全然かまわないと思うわ」
「それを聞いて安心したよ。後で教えてくれよな」
「うーん。私も詳しくないから、一緒に勉強する事になるかな」
「そうか。ならシェーナも剣に魔法をかけて闘ったらどうだ？」
「剣術学部なのにトーナメントで魔法を使えるの？」
「使っちゃいけないっていうルールはない。時々少しかじった魔法を使う奴がいるしな。でも魔法で勝った奴はいないと思う」
「そりゃそうでしょう。魔道士学部でも本格的な剣術で挑もうって人は見た事ないわ」
「じゃあさ。二人で新しい風を吹かせようぜ」
「いいわね。面白そうじゃない」
二人は顔を合わせて微笑んだ。

ミュージカルの内容はありふれた物だった。とある国のお姫様が騎士と駆け落ちするのだが、当然追っ手がかかる。しかし二人は追っ手を何度も危機一髪で退け、隣の国へと逃亡する。しかし後一息と言う所で追っ手に取り囲まれて窮地に追い込まれる。そしてお姫様が騎士をかばって死んでしまう。騎士もお姫様の後を追うように、

なすがままに殺されてしまう。しかし二人の魂は一緒に天国へ向かい、そこで幸せになると言う話だった。
「あれはないよぉ。死んじゃうなんてかわいそうだよぉ」
ミュージカルのクライマックスから、シェーナはずっと泣きっぱなしだった。
「あんまり泣くなよ。恥ずかしいから」
シェーナが自分の体で泣く分にはかまわない。でも今はディアスの体なのだ。
「なによ。ディアスだって目に涙溜めてるじゃない」
「だけどさ。見た目女の俺はいいけど、男が号泣きするってのも恥ずかしいわけで……」
「でもほら、いるじゃない？　例えばごっつい男の人でも感性豊かで、感動しちゃうと直ぐ泣いちゃう人。そういう人って結構可愛いわよ」
「そんなもんかなぁ。まぁ、いいや。それよりも城を見て行かないか？」
「うん。いいわよ」
ウェンダンの王城は美しい堀に囲まれている。まるで湖の上に浮かんだ島に建てられているようだ。城は高い城壁に守られ、四方と中央には高い塔が天に向かって伸びている。そしてその頂上にはウェンダンの国旗が風になびいていた。
「綺麗だよな」
「ウェンダンの自慢よね」
「将来さ。あんな綺麗な場所で働けたら凄いんだろうな」
「でもちょっと窮屈そうよ」
「……そうかもな」
「ね。ご飯食べよう。ちょっと早いけど、早めに帰らないと明日に支障でるから」
「いい場所知ってる？」
「実はね。予約してあるんだ。混む時間じゃないから予約いらない

かなぁって思ってたんだけど、完全予約制だったから」
「おいおい。俺あんまりお金持ってないぞ」
「大丈夫。付き合ってくれいたお礼におごるわ」
「シェーナってさ。前から思ってたけど金あるな」
「何言ってるのよ。ディアスだって貴族でしょう。これくらいたいした事ないと思うレベルのレストランよ」
「いや、たぶん俺とシェーナじゃ、金銭感覚が違うと思うぞ。貴族丘に家を一件借りるだけじゃなくて、郊外の湖畔にもう一件借りるなんて、シェーナくらいじゃないのか？」
「そうかなぁ？」
「俺の家の爵位は男爵だけど、シェーナの家の爵位は？」
「伯爵よ」
「うわっ。やっぱし。でも伯爵家なら王都の王立士官学校でも行けたんじゃないのか？」
　シャルトン王立学校は一般平民から下級貴族が入学できる学校である。それに対して王立士官学校は伯爵以上の貴族か、貴族にコネのある者でなければ入学できなかった。
「もちろん行けるわよ。でも士官学校じゃ伯爵が一番下の爵位なのよ。まぁ平民も少しいるけど。毎日上級貴族のご機嫌うかがいながら生活するのは嫌よ。それに上の学校の下っ端よりも、下の学校のトップの方が気分いいじゃない」
「なるほどな。でも親は士官学校へ行けって言わなかったのか？」
「言われたけど説得したわ。でもやっぱりこっちに来て正解だったわ。ディアス達に会えて、私……今、とても最高だわ」
「そいつは良かった。そう言われて俺も嬉しいよ」
「ディアスは……私に会えて良かったと思う？」
　シェーナは恐る恐る聞いた。
「ん？　俺か？　会えて良かったと思うぜ」
「そか。うふふふ」
　シェーナはくるりと回って微笑んだ。

「……頼むから。俺らしく振る舞ってくれ……」
「う。そんな目で見ないで……」
ディアスはまるで不気味な生き物を見る目で、シェーナを見ていたのだった。

たどり着いたレストランを見て、ディアスは唖然とした。
「これがシェーナの普通か……」
ディアスはど田舎の貴族である。王都から離れれば離れる程、標準レベルが下がる。例えば王都でちょっと高めのレストランがあるとする。しかし地方に行くと、そのレベルのレストランは最高級レストランになったりする。
「どうしたの？」
「うちの領地にはこんな凄いレストランなんてないぞ」
「うそ？」
「真面目にない」
「田舎なのねぇ」
シェーナはしみじみ言った。
「うっさいな。いいだろう。その分素朴で良い所だぞ」
「へぇ。一度行ってみたいな」
「やめておいた方がいいぞ、都会の貴族様には退屈過ぎる場所だ」
「あら、うちの領地だって王都からかなり離れた場所にあるわよ」
「ガーネイルはそこそこ大きい都市だろう。村がやっと町になったようなロードウェンと一緒にしないでくれよ」
「そっかぁ……。まぁ、とりあえず入りましょう」
ディアスは思った。今日のこの一食の値段は、学食の数ヶ月分に匹敵するだろうと。そんな事を考えている自分にふと気が付いた。名ばかりの地方貴族である自分と、シェーナの様な名門貴族では、かなり差があるものだと。

帰りも同じ馬車だった。どうやらシェーナは馬車を一日借り切っ

ているらしい。
「シェーナって本当に金あるな」
「ディアスが貴族のくせにないのがおかしいのよ」
「だから、うちの爵位はシェーナの家程高くないし、お金もない」
「うーん……そんなもんなのかなぁ」
「そんなもんだ。まったくシェーナと一緒にいると、金銭感覚がおかしくなりそうだ」
「じゃあ……楽しくなかった？」
シェーナは恐る恐る訊いた。
「いや。楽しかったよ。でも俺を誘うなんて意外だったな」
「それは……」
時は来た。そう思った瞬間、シェーナの心臓が爆発しそうになった。しかし今ここで言わねば今日ディアスを誘った意味がない。シェーナは覚悟を決めた。
「それはね。私……ディアスの事が好きになっちゃったから……」
「えっ！」
ディアスはいきなりな事に驚き、戸惑い、しばし考え込んだ。
「……ディアス。返事を聞かせてよ」
シェーナは蚊が鳴く様な声で言った。
「ごめん。シェーナ。俺、今までシェーナの事を異性として見たことがなかった。最近やっとうち解けて、友達になれたかなってくらいで……。なんていうか、そんな風に見られているとは思いもしなかった」
「……それで……どう？」
シェーナは動悸で息が詰まりそうになるのを必死に押さえて言った。
「正直わからない。いきなり言われても困る」
「……そう」
その後二人は一言も喋らなかった。馬車は湖畔の別宅に止まり、二人は申し合わせたように、自分の家へ転移した。

シェーナは久しぶりに中央部にある家で長い時間を過ごした。
「あんな事言わなければ良かった……」
そうすれば今までの関係が続いただろう。しかし発展もなかった。
今はディアスがいるかもしれない湖畔の別宅には行きたくない。ディアスの顔を見るのが怖いのだ。
シェーナは今夜自宅で寝る事にした。自分一人しかいない家は静かで寂しい。シェーナの心はぽっかりと穴が空いた様に空虚だった。この寂しさをディアスに埋めて欲しい。今になってやっと、ディアスの存在が自分の心の大半を占めている事が分かってきた。

朝になると、シェーナはトランスポーターを使って、湖畔の別宅へ飛んだ。
転移して光の柱が消えると、別宅の魔法陣の近くに荷物が置かれていた。見覚えがある。ディアスのだ。それに気づいたシェーナは、弾かれたように走り出していた。ディアスは出て行く気だ。しかし荷物があると言うことは、まだ出て行っていない。
ディアスはリビングにもディアスの部屋にもいなかった。念のためトイレをノックしたが空だった。
とてつもない不安がシェーナを支配した。
ディアスがいなくなる。嫌だ。それだけは嫌だ。ずっと側にいてくれなくちゃ嫌だ。
ふとリビングから外を見ると、そこにはディアスがいた。
ディアスは剣の感を鈍らせないように、早朝必ず一人で稽古している。
シェーナは勢いよくドアを開けて外に出た。
「ディアス！」
シェーナは息を切らせつつディアスの前に立った。
「トランスポーターの荷物は何！？　まさか出て行く気じゃないでしょうね！？」
「そのまさかだよ。ここを出て行く事にした」

「何でっ！？」
「もう俺を信用しても大丈夫だろ。シェーナの体は大切に扱うから安心してくれ。外に出る時もちゃんとシェーナの家に転移してから出るから安心してくれ」
「もうそんな事どうでもいいわよ！　側にいてよぉ！　こんなの嫌だよぉ！」
　シェーナの目から熱い涙がこぼれ落ちた。
「悪い。シェーナの気持ちは嬉しいし、シェーナといても楽しい……けどな」
「けどって何よ！？」
「けど、今は駄目なんだ。怖いんだよ。シェーナの気持ちに溺れてしまいそうで……。今の俺には恋愛している余裕なんかないんだ。俺は夢を叶えるために強くならなくちゃいけないんだ！」
「どうして？　どうして夢のために強くならなくちゃいけないの？
　それを話してくれないと、私……苦しいよ」
「わかった。話すよ。俺の家は地方貴族だ。領地は小さな町が一つだけ。のどかで平和で良い町なんだ。でもそれだけだ。俺はもっと波瀾万丈な生き方をしたい。人生が瞬間の連続である事を感じられるような生き方をしたいんだ。そのためには田舎町に留まっているわけにはいかない。王都に出て、国に貢献できるような仕事をしたいんだ。幸い俺は剣に自信がある。だから剣の力で夢を切り開こうと思った。しかし俺の様な田舎貴族は王立士官学校なんか門前払いさ。でもシャルトンで総合主席を取れば認められる。エリートコースに入ればその分でかい事ができる。そしていつか俺の名を国中に響かせるんだ。ただの一般兵士で終わりたくないんだ。だから今はごめん」
「……ってるよ」
「えっ？」
「そんなの間違ってるわよ！　本当に強い人は恋をしても腕が鈍る様な事はないわ。そんな事で腕が鈍る様な実力なんて、全然強くな

いわよ！　あなたは私に色々と教えてくれたわ。あなたには覚えがないかもしれないけど、私はあなたから色々と学んだわ。だから今度は私があなたに教えてあげるわ！」
　シェーナは弾かれた様に言うと、手を前で組んで印を描き始めた。
「闇の精霊よ。虚空より現れ、託せし我が肉を示せ！　サモン・スタッフ！」
　呪文完成と共に、シェーナの目の前に杖が出現し、シェーナはその杖を左手で握りしめた。通常右手は印を描くので、杖は左手で持つのだ。
「私があなたの恋人になっても、あなたの最強のライバルであり続ける事ができる事を！」
　シェーナは杖を構えると、集中力を高め、魔力を練り上げた。
　ディアスは感じた。シェーナが放つ闘気を。シェーナは本気だ。
「私はね。今まで生きて来て、これほど楽しかった事はなかった。エリスやクレイがいて、そしてあなたがいて。あなたは私の気持ちが嬉しいって言ってくれた。だから、私のわがままなのかもしれないけど、私はこの恋を終わらせたくない。だから私は闘うわ。私のために。そしてあなたのためにも！」
「そこまで言ってくれるとはな」
　ディアスは正直嬉しいと思った。ディアスもシェーナの事が気になっていたのだ。しかしそれは何とも言えないようなうやむやな感じだった。将来の夢の方が優先されていたために抑制され、自分の気持ちに気づかないふりをしていたのだ。けれどもディアスは今、自分がシェーナに惹かれている事を認めようとしていた。しかしそれは今までの自分を否定する事になってしまう。今まで恋をしないで剣一筋で生きて来た自分が、間違っていたと認めてしまう事にもなる。今までの自分の生き様を否定してしまう事になるのだ。
「うだうだ悩んでいても仕方ないわ。私と闘って、その中で答えを見つけなさい！」
　シェーナは後ろに後退しつつ、杖をディアスに向けて呪文を唱え

始めた。
「火の精霊よ。汝我に集いて槍となれ！　ファイア・ジャベリン！」
シェーナが突きだした杖の先から、炎の槍がディアスに向けて放たれた。
ディアスは炎の槍を横に飛んで避ける。炎の槍はディアスがいた所を通過し、遙か後方の地面に激突し爆炎を上げた。直撃していたら間違いなく死んでいる。
「あぶねぇ。……本気だな」
「あなたなら避けられる。だから本気で撃ったの」
それは信頼だった。
「そうか。それじゃあこっちも本気にならないとな」
「あなたの魂をぶつけてきなさい。それで私が必要かどうかわかるわ。それでも私が必要じゃないのならば……諦めるわ」
「わかった」
ディアスはすらりと剣を抜いた。
「ディアス・ライマール。いざ……参る！」
ディアスの気が一気に爆発した。
凄まじい闘気が風となってシェーナに襲いかかる。その瞬間シェーナは後退していた。それがシェーナを救った。あまりにも早い。シェーナは背筋がぞっとした。かなり距離を取ったつもりでも、ディアスはその間合いを一気に縮めて剣を振るっていた。もし後退していなかったら、勝負はもうついていた。あれは本当に自分の体なのかと疑いたくなる。
「光の精霊よ。全てを惑わす光となれ！　デイリーコンサイス・ライト！」
シェーナが周囲に向かって魔法を放った瞬間、ディアスの視界からシェーナが消えた。いや、違う。シェーナのいた辺りの空間が、ぐちゃぐちゃに歪んで見えるのだ。
シェーナが放った魔法は、光を無作為にねじ曲げ、人の視界を狂わせる魔法だ。そのぐちゃぐちゃに見える空間の向こうで、魔力が

爆発した。
「来るっ！」
ディアスはとっさに真横に飛んだ。その次の瞬間。高速の光弾がディアスのいた場所を貫いた。しかし狂った景色から現れたのは一発だけじゃなかった。無数の光弾がディアスがいた辺り一面に向かって飛来する。
「こなくそ！」
ディアスは弧を描く様に回避し、避けきれない光弾は剣で弾いた。
シェーナもディアスが見えないので、ある程度当たりをつけて魔法を放っているのだろう。その光弾の軌跡から、シェーナは扇状に光弾をばらまいている。ディアスはシェーナのだいたいの位置を軌跡と気配から読み取ると、弾幕から抜け出すために、回り込むように前に出た。
「くっ！」
ディアスは左方と右股に痛みを感じ、転びそうになりつつも、バランスを保ち、弾幕から脱出すると、光の撹乱障壁を突破した。
ぐちゃぐちゃになった世界を抜けると、シェーナは斜め先にいた。
「まさか？」
シェーナは光の壁から突然現れたディアスに驚いた。
（甘ぇ！）
「エア・ストリーム！」
ディアスは唱えておいた魔法を放った。
ディアスの手から突風が吹き荒れ、シェーナは息が詰まり、飛ばされないようにするだけで精一杯になり、身動きができなくなった。
「もらった！」
ディアスは間合いを詰めつつ、剣を平にしてシェーナに向かって横薙の斬撃を放った。
「テレポート！」
「なっ？」
しかしディアスの剣は何もない空間を薙いだだけだった。シェー

ナが目の前で消えたのだ。
「ライトニング・ブラスト！」
ディアスは驚異的とも言える反射神経で、前に転がり込む様に身を投げ出した。その上を稲妻が枝を伸ばすようにして広がり炸裂した。避けたつもりのディアスの背中が痺れるように痛む。
（今のは詠唱がなかったぞ！）
ディアスは体制を立て直しつつシェーナの方を向くと、シェーナは既に呪文を唱えていた。
ディアスはシェーナの魔力の高まりから、長い詠唱をしてるのだと判断し、短い詠唱の魔法を唱えた。
「ファイア・アピア！」
それは一番単純な発火の魔法だった。しかしシェーナの目の前で発火した火は、シェーナの視覚から一瞬ディアスを隠した。そのわずかな時間でディアスは間合いを詰める。そしてシェーナの呪文詠唱が終わると同時に、ディアスの剣がシェーナの肩口ギリギリで寸止めされ、シェーナはディアスの胸に杖を突きつけていた。
これが実戦だったら相打ちだろう。
見つめ合う二人の柳眉が下がった。
「やっぱりディアスって強いわね。魔道士って一人で一個中隊に匹敵する強さを持ってるって言われてるのに」
「それは軍隊で言う戦略的な強さだろ。一対一ならそうでもないさ」
「……そうみたいね。私、結構自信あったんだけどな」
「俺だって一本取るつもりだったよ」
二人はほぼ同時に剣と杖を引いた。
「ふ～」
シェーナはその場に座り込み、ディアスもついでに腰を下ろした。
「ねぇ？」
「ん？」
「これでもお互いふぬけになって終わると思う？　私はいつでもディアスと戦えるわ。ディアスの夢の足手まといにはなってないつも

りよ」
「そうだな。認めるよ。いや前から認めてたよ。俺はそれに気づかないふりをしていたのかもしれない」
「認めるだけじゃ嫌よ。私は欲張りなの。あのね。ちょっと私の話聞いてくれる？」
「うん？」
「私はね、今まで夢とか考えた事がなかったの。ただただ周りに流されていただけなの。私の家はね、昔王様が参加したモンスター討伐の際に王様を守り、手柄を立てた事で貴族になれたの。それから代々アストリア家はモンスター討伐に参加しているの。だから私も魔道士になって、そのままモンスター討伐隊へ入るんだって、漠然に思ってたわ。でもディアスは私と違ってちゃんと自分の意思で夢を持っていた。正直凄いなって思ったわ。私もその夢を一緒に共感したい。もしね、ディアスがふぬけるような事があったら、私が叱ってあげる。一人じゃいつかつぶれちゃうかもしれない。でも二人なら乗り越えられるかもしれない。それに一人よりも二人の方が楽しいわよ」
「お前って物好きだなぁ。いいぜ。正直言うと、俺もシェーナの事好きなんだと思う」
「！」
「でもな。なんて言うか……最後の最後で好きになりきれていない部分があるんだ。シェーナを見ていても自分を見ている感じと言うか……。こう……ドキッとこないんだ」
「あっ！　私がディアスの姿をしているから……？」
「うん。内面的には惹かれるんだけど、どうも最後の一押しがないんだ。友達として好きなのか、異性として好きなのかあやふやなんだ。だからさ、体が戻るまで待って欲しいんだ。今の状態じゃキスだってできないと思う。男とキスしてるみたい……と言うか男とキスだろう？」
「……そっか。わかったわ。じゃあ、出て行ったりしないよね？」

「ああ。シェーナがそんなに俺の事を思ってるとは知らなかった。俺はその思いには応えたい」
「嬉しい……。私、最初はディアスが私の事を大切に扱ってくれてるなんて思いもしなかったわ。でもちゃんと私の立場とか考えてくれてて……凄く嬉しかった。それがきっかけでディアスが気になって、いつの間にか好きになってた」
「……そうなんだ」
湖の向こうから吹いてくる風は冷たくて、火照った体に気持ちよかった。二人はしばらく黙ったまま湖を見つめていた。それだけで楽しかった。
「なぁ、シェーナ」
「なぁに？」
「さっきの戦いでさ、シェーナって呪文詠唱なしで、最後のラストスペルだけで魔法を発動させたよな？」
魔法は精霊に人の魔力を与え、精霊力を活性化させる代償として、超自然的な恩恵を与えられて発動する。その魔法の呪文には大きく分けて三つの句がある。まず始めにどの精霊に対して魔法を紡ぐのかを決める属性句から始まり、次にその内容の本句、そして最後に魔法を発動するための発動句。その発動句の事を別名でラストスペルと呼んでいる。
「あれってどうやるんだ？」
「あぁ、短縮魔法の事ね。あれはこの腕輪を使うの」
そう言ってシェーナは左腕につけた腕輪を見せた。
「この腕輪に唱えたい魔法を溜めて置く事ができるのよ。でも溜めている間は常に魔力が消費するの。だからある程度の魔力と魔力容量が必要だわ。それと、ほら、ここに宝石が付いているでしょう」
シェーナはディアスに宝石が見えるように腕を回した。
「この宝石の数だけ魔法を溜めておくことができるの。溜める魔法によっても変わるけど、溜めている分どんどん魔力を消費するわ。ディアスの体じゃあ上級魔法一個、中級魔法一個が限度ね」

「中級だけならいくつだ？」
「中級魔法十個で上級魔法一個分かな。だから十一個ね」
「なるほど。それでシェーナの体なら最高いくつ溜められるんだ？」
「私は上級魔法を十個かなぁ」
「凄いな」
「ふふふ。伊達に総合主席を狙ってないわよ。あっ、それより怪我は？」
シェーナは立ち上がってディアスの体を見た。
「ごめん。今治すから」
「俺こそシェーナの体を傷つけてごめんな」
「ううん。その傷は私がつけた物だもの。気にすることないわ。それにそれくらいのケガなら魔法ですぐ治るもの。でも今痛いのはディアスだし」
そう言ってシェーナは回復魔法を唱え始めた。
「癒しの精霊よ。我に集いてこの者の内なる癒しの力を引き出し、傷を癒したまえ。ヒール！」
シェーナの手のひらから暖かい光が溢れた。そしてシェーナはディアスが怪我をした部分に手を当てる。暖かい光がディアスを包み込み、スゥーっと痛みが引いていった。
「ありがとう」
「どういたしまして」
「魔法って便利だよな」
「そうね。この魔法も近々教えるわね。それで話を戻すけど、短縮魔法が使えるようになれば、強力な魔法が使えなくても、結構戦えると思うの」
「それはいいな。そうそう。俺の方からもアドバイスがある」
「なぁに？」
「風系の魔法を色々と勉強して気が付いたんだけど、突風の魔法は相手の動きを止めるのにかなりいい。短縮魔法で相手の動きを止めれば隙ができる」

「なるほど。さっきのエア・ストリームね。あれは焦ったわ。奥の手を使わなくちゃ避けられなかったわ」
「前に言った剣に魔法をかけて闘うって話だが、剣に風系の魔法をかければ、剣速を上げたりできないか？」
「できるわね。その分体に負担がかかるけど」
「そうか。でも短時間なら平気だろ」
「たぶんね。それと剣を振ったら真空波を打ち出すような事もできると思うの」
「そいつはいいや。間合いを広げられる。シェーナは風系の魔法が得意なんだろ。もっと色々とできるかもな」
「そうね。それに風は炎や光の魔法みたく派手じゃないから、上手くごまかせるしね」
「ははは。上手くいけば魔法を使ってると気づかれないかもな」
「それはないでしょう。いくらなんでも相手にはばれそうよ」
シェーナもディアスにつられてクスクスと笑い始めた。
「案外鈍いの多いぜ」
「ケインとか鈍そう」
「ケインなら魔法ってわからなくても、インチキだっていいそうだけどな」
「ぷっ。そうかもね」

そして一ヶ月が経ち、ディアスは様々な魔法を覚えていった。代表的な地水火風光闇の内、シェーナの体と相性が良い、火風闇の三種の攻撃魔法と防御魔法を、中級レベルまで覚えた。更に一時期下降していたシェーナの成績も、かなり取り戻す事ができるようになった。
模擬戦でも上級魔法を使う事ができないが、短縮魔法を上手く使い、上級魔法を使っている生徒にも負けていない。むしろ中級魔法までで対抗できる事に注目をあびていた。上級魔法を使える生徒は多くない。だから中級止まりだった生徒から見れば、今のシェーナ

は新たな可能性と希望を与えてくれる存在になっていた。しかしその事によって、シェーナを驚異と見なさなくなっていた猛者達が再び動きだした。
「ちょっといいかしら？」
ディアスは放課後の帰り際に呼び止められた。
呼び止めたのは、去年の後期トーナメントの決勝で、シェーナに敗れて二位となったトレイシアと言う女生徒だ。
トレイシアはシェーナよりも頭一つ高く、体つきは細くしなやか。長い栗色の髪をポニーテールに結び、春の風に揺れている。姿勢も常に正しく、服装を見てもだらしがない所が一つもない。顔つきはきりっと凛々しい。いわゆる格好いい女だ。
「何か用？」
「ええ。悪いけどそこのあなたは外してくれる？」
トレイシアは風でなびく長いもみあげを押さえつつ、返事はシェーナに、その後の言葉はエリスに向けて言った。
「わかったわ。シェーナ。頑張ってね」
そう言ってエリスはさっさと帰ってしまった。
（薄情者！）
ディアスは心の中で叫んだ。
「シェーナ。ちょっとついてきなさい」
そう言ってトレイシアが向かったのは人気のない体育館裏だった。
「あなた、スランプってのは嘘でしょう？」
ディアスは心臓が飛び出るかと思った。
「何で上級魔法を使わないの？　以前のあなたの戦い方は、小技で相手を翻弄し、上級魔法で一気に肩をつけていたわ。でも小技しか使っていない。例えそれで相手を倒せても、成績十位以内の猛者には勝てないわ。小技程度でどうやって多重に張られた上級防御障壁を破るって言うの？」
「忠告はありがたいけど、私は上級魔法を使わなくてもそれくらいなんとでもなるわ。冗談を言ってるように聞こえるかしら？　でも

手の内を明かすほど私は馬鹿じゃないわよ」
　そう、ディアスには魔法剣があった。普通の魔道士ならばまず自分の武器に魔法をかけない。だから対魔法剣対策も疎かになっているはずだ。ディアスはそこにつけつけ込む隙がある。魔法剣は射程が零に等しい分、威力が半端じゃない。例え中級の魔法剣でも上級防御魔法を易々と貫く威力があった。そのためには雨のように降り注ぐ魔法を潜り抜けなければならないのだが……
「悪あがきは見苦しいわよ。どんな奇策を使っても、私の上級防御障壁は破れないわ」
「それはどうかしらね？　やってみないとわからないんじゃない？」
「いい加減にして！　あなたにとってはただの実験かもしれないけど、私や私のように本気であなたと戦いたがっている者に対して失礼よ！」
「あら、実験じゃないわ。ただ上級魔法を撃ってるだけが戦いじゃないのよ。例え中級魔法でも使い方によっては上級魔法をしのぐわ。魔法に上下はないの。ただの戯れ言だと思ってるのなら、トーナメントで私と戦ってみなさい。本当に戯れ言なのかどうかわかるわ」
　そう言ってディアスは踵を返した。
　ハッキリいってハッタリも良いところだ。ディアスが踵を返したのは、これ以上話しているとボロがでそうだからだ。魔法の論理合戦ではディアスには勝ち目がない。
「大きく出たわね」
「うあああああああっ！」
　いきなりエリスがディアスの前に降って来た。
「驚かすな……かさないでよ。いったいどこから降ってきたの？」
「上」
　そう言ってエリスは体育館の屋根を指さした。
「聞いてたの？」
「もち。こんな面白そうな事が目の前で起きてるのに、私がそのまま帰るとでも思ったの？　それで、どうするの？」

「まぁ、何とかなるでしょう」
「無責任ねぇ。トレイシアって言ったら、シェーナと同等の力を持っているわよ。去年シェーナがトレイシアに勝ったのも、殆ど運が良かっただけよ。間違いなくあなたじゃ勝てないわ」
「はっきり言うとは珍しいわね」
「それ程トレイシアは強いって事よ。あれ程完成された魔道士はなかなかいないわ。もし中級魔法だけで戦って負けたら、シェーナの立場がないわ」
「……ならどうしろって言うのよ」
「勝ちなさい」
「矛盾してるわよ」
「人間無理でも、どうしてもやらなければならない時があるのよ。残り一ヶ月の間、クレイとのデートを諦めてもいいわよ。私も特訓してあげる」
「ありがとう。助かるわ。ありがたく特訓も受けるけど、私には奥の手があるわ」
「例の魔法剣？」
「そうよ。あくまで魔法は補助。私は剣で戦うつもり」
「それで勝てるの？」
「シェーナには引き分けたわ」
「あぁ、シェーナが告った時のあれね」
「ぶっ！　み、見てたの！」
「うん。クレイと一緒にね」
「な、ならわかるでしょう」
「ええ。でもあの時のシェーナは確かに本気だったけど、その本気も八割ってところね。愛するあなたを殺さないために、無意識に力を抑制していたと思うわ。本気のシェーナの戦いを見た事あるからわかるの。でもトーナメントでは、相手を殺さないように、先生達が強力な防御結界を張るから、何も遠慮する事がないのよ。防御結界にも限度があるけど、先生達がかける防御結界は、まだ私達みた

いな学生には絶対に破壊できない。先生達との格の差を見せつけられるわ。少しへこむわよ」
防御結界とは防御障壁の上位魔法であり、当然防御障壁とは比べ物にならないほどの耐久力を持っている。
「つまりトレイシアはあなたの命を気にせずに本気の本気で来るわ。それでも勝てるの？」
「私も本気の本気じゃなかったから」
「……それもそうね。ディアスもシェーナの事好きみたいだし。それに女の子に本気で剣を向けるような人じゃなかったわね」
「そりゃそうよ」
「でもね。もしそれで負けたら、どうなるかわかってるよね？」
「え？」
「わかってるわよね？」
エリスはニッコリ笑って返した。
「うっ」
だが目が笑っていない。こんな時のエリス程怖い物はない。負けたら地獄が待っている。
「……善処します」
「男ならきっぱり言う！」
「勝ちます！」
「ならよし。じゃあナルアのチーズケーキと、チョコトルテね」
「はっ？」
「今日の事はシェーナには黙っておいてあげる。わかるわね？」
要するに口止め料だった。
「……太るわよ」
「私っていくら食べても太らない体質だからいいのよ」
「その分胸に行ってるんでしょう」
「羨ましい？」
「物には限度があるわ。シェーナくらいのが丁度いいわ」
「それはディアスの好みでしょ。でも良いこと聞いたわ」

エリスの顔に邪悪な笑みが浮かんだ。
「へっ？」
「ディアスはシェーナの乳が好きー！」
いきなりエリスが叫んだ。
「ぶっ！　てめぇ！　何言ってやがる！」
ディアスはたまらず声を上げた。
「何かしら？　シェーナ。言葉使いが下品よ」
「くっ！」
「ふふふ。モンブラン追加ね」
「……わかりました」

波乱の学期末

とうとう前期最後の月に入った。

普通の学校では嫌な試験がある月である。しかしシャルトン王立学校ではトーナメントが開かれるので、年二回のビックイベントでもあった。

シャルトン王立学校にはトーナメント本戦用の大きな武舞台以外に、トーナメント予選用に四十もの小武舞台が用意される。シャルトン王立学校の専門課程は四学年あるのだが、各学年が使える武舞台は十づつしかない。ディアス達の学年だけでも、剣術学部と魔道士学部会わせて八百人以上いる上に、予選だけで一人五試合行われる。とてもじゃないが一日で終わるわけがないのだ。

一試合五分でも試合と試合の間の時間を入れればかなり時間がかかる。朝から始まり夕方まで試合を行っても一日に全生徒の半分しか試合を行う事ができない。しかし生徒から見ると、二日に一回しか試合をする事ができない。要するに一人五試合するのに十日かかるのだ。それが終わると八日かけて、それぞれの学年の本トーナメントが行われる。

トーナメントの前に筆記試験がある。これぱっかりは好きな生徒は少ない。

シェーナ達はディアスが心配になって、放課後ディアスとエリスがいる教室へやって来た。ディアスとエリスは予め集まる事になっていたから残っていたのだが、殆どの生徒は明日からトーナメントに備えて、早々と帰宅していた。まばらに残っている生徒は、見慣れない剣術学部の生徒が来ている事に一瞬目を向けたが、特に気にする事なく雑談を続けている。

シェーナ達は他の生徒がいたので、しばらく自分達も雑談していたが、残って雑談していた生徒達が教室からいなくなり、自分達だけになる本題に入った。

「どうだった？」
シェーナが神妙な顔でディアスに聞いた。
「サッパリわからなかった」
「えええええっ！」
「うっそ。ばっちりだぜぇ！」
「それなら良いけど……」
「甘い！　甘いわよ！　シェーナ」
エリスが言うとクレイもうんうんとうなずいた。
「ディアスがあんな言い方をする時は、ギリギリな時よ」
「えええぇっ、大丈夫なの？」
「……たぶん及第点は取れていると思う……」
ディアスはか細い声で言った。
「まぁ、仕方ないわよね。赤点さえ取らなければいいわ」
「そう言ってくれると楽だな」
「いいのよ。元はと言えば私が悪いんだし。私があんな魔法の実験さえしていなければ、こんな事にならなかったんだし。ごめんね。しなくていい勉強までさせちゃって」
「ん。いいよ。良い勉強になったしね。それに試験がなければ怠けて魔法の知識がつかなかったかもしれないな。そういえばシェーナの方はどうだった？」
「私が赤点を取るとでも思ってるの？」
「取るわけないか」
「そうよ。安心した？」
「最初から心配なんてしてないさ」
「そっか」
「そうだ」
エリスはくるりとクレイの方を見ると、わざと引きつった笑みを浮かべた。
「二ヶ月半前じゃありえないラブラブぶりね。私達も負けてられないわ！　私達の方がもっとラブラブだって事を見せつけるのよ！」

「はぁ？　何対抗心燃やしてるんだよ」
エリスはクレイの言葉なんて聞いちゃいなかった。いきなりクレイの首に手を回すと、クレイの唇に自分の唇を重ねた。
そしてチラリとシェーナを流し目で見る。
「なっ！」
シェーナは驚いて声を上げた。
エリスはシェーナが見ている事を確認すると、本格的にキスを始めた。
これにはクレイも驚いた。人の前でこんな事するのは初めてだ。
「ちょっ、エリ……んっ」
エリスは離さないとばかりにクレイの頭を抱え込む。
「えっ……うあっ！」
シェーナは真っ赤になって、食い入る様に二人を見た。ディアスもポカーンとあっけに取られて見ている。
（ふふふ。とどめよ）
エリスはクレイの手を持つと、自分の胸へと押し当てた。
「ええっ！　なっ！　うそっ！」
シェーナの顔はいよいよ耳まで真っ赤になった。
「ふふ。クレイ……続きは後で……ね」
エリスはクレイの口を解放すると言った。
クレイはカクカクと首を振る。
「ふふふ。どうよ！」
エリスは勝ち誇った笑みを浮かべた。
「うぅ。悔しい……。ディアス。私達もキスしようっ！」
「嫌だ。中身がシェーナと分かっていても、見た目は男だ。それだけは勘弁してくれ」
「あんなの見せつけられて悔しくないの！？」
「羨ましいとは思うけどな。そう言うのはなんだ……元に戻ってから考えると言う事で……」
「あう……。けちっ！」

「それにこんな所でできるか！」
「放課後の教室でキスとか憧れない？」
「そうかなぁ？」
「そ・う・な・の！」
シェーナはエリス達が羨ましくて、悔しくなった。
ふとエリスを見ると、勝ち誇った笑みを浮かべていた。
「ふっ。勝った」
そんなシェーナをエリスが鼻で笑う。
「むぅ……」
シェーナは学年トップの優等生だ。しかし恋愛に関してはエリスの足下にも及ばなかった。

そしてとうとう実技試験と言う名の期末トーナメントが始まった。十日にも及ぶ試験の間は、生徒は自由に試合を観る事ができる。皆ライバル達の試合を偵察するために、試合の武舞台の間を行き交い騒然としている。
ディアス達四人の内で、最初に試合をするのはシェーナだ。
もちろんギャラリーにはディアス、エリス、クレイの姿があった。しかしギャラリーにいるディアスの体はシェーナなのだ。他人から見れば、魔道士学部の優勝候補であるシェーナが、魔道士の予選ではなく、剣術学部の予選を見に来ているとあって、大騒ぎになった。
ディアスはシェーナが心配で来たのだが、その事による周りの反応まで考えていなかった。しかし周りのギャラリーは当然と言えば当然の勘違いをしていた。
シェーナは総合主席を争うであろうディアスの試合を見に来たのだと。そのせいで予選なのに武舞台の周りには、人垣で埋め尽くされていた。
シェーナは落ち着いていた。普段から人の注目をあびているせいもあって本番には強い。
しかし相手は違うようだ。初日の一試合目からとんでもない相手

に当たり、気後れしている上にもの凄い盛り上がりである。まだ一度も予選を通過していない者にとっては、凄まじいプレッシャーだった。
「ディアス対ロイ。始め！」
審判を務める先生が試合開始の合図を出した。
「おおおお！」
緊張に耐えきれなくなったロイが、いきなり突っ込んで来た。
（この人。足運びがなってないわ。よほど緊張しているのかしら？）
シェーナは間合いに入るなり振り下ろされた剣を避けつつ、剣を右薙に振るった。
ギィィンッと甲高い音がして、シェーナの手に堅い感触が返ってきた。
「勝者、ディアス！」
「おおおおおおお！」
審判がシェーナに向かって言うと、ギャラリーがわっと歓声を上げた。
シェーナは歓声に応える様に剣を天にかかげた。
選手は試合が始まる前に、対物理、対魔法の防御結界がかけられる。そのため相手に剣を当てても殺すことがない。だから本気で打ち込めるのだ。そしてもう一つ。ダメージを受けると変色する特殊な変色障壁を張ってある。ダメージによって無色から緑、黄色、赤へと色が変わる特殊な障壁だ。しかも外からしか色は見えず、選手の視界を妨げる事はない。唯一例外は真っ赤になった時。すなわち致死ダメージをくらった時のみ、中からも外が赤く見える。選手に自分が負けた事を知らせるためだ。
シェーナは倒れたロイを無視して、掲げた剣をディアスに向けた。
どっと沸くギャラリー。
（おいおい。マジかよ）
ディアスはまだ試合もしていないのに、いきなりに視線を尻込みした。周りはディアスの、いや、シェーナの反応を期待している。

ディアスは腰に下げた杖を抜くと、シェーナに向けて突きだした。魔法を撃つポーズである。
「おおおおっ！」
前期期末トーナメントでは戦う事のない組み合わせだが、宣戦布告に応えた事に、ギャラリーは割れんばかりの歓声を上げた。
ディアスは踵を返すと、武舞台から逃げるように遠ざかった。いや、実際逃げていた。
その後をエリスとクレイが追う。
ディアスは人気のない所までくると軽く息を吐いた。
「ふぅ。なぁ、シェーナってのりがよすぎないか？」
「そうね。目立つ所に立つと、パフォーマンスしたがるわね。要するに目立ちたがりなのよ。人気があるのもそのせいね」
「俺はあんなことしないのに……」
「調子に乗ってるのよ。シェーナは調子に乗るほど強くなるわ。良い傾向よ」
「そうなのか」
「そうよ。お昼からはディアスの試合が始まるでしょ。頑張りなさいな」
「エリスは余裕だな」
「だって今日は試合ないもん」
「クレイはあるんだっけ？」
「ああ。今日の最後の試合だから、まだまだ余裕だな」
「本当は緊張してたりして？」
「余計な事言うなって。本当に緊張したらどうするんだよ」
「そんな事を言ってるって事は、もう緊張してる証拠ね！」
「うあああああああ。だから言うなぁぁ！」
そして昼一からディアスの試合が始まった。
なんと相手はサラだった。
「初っ端からあなたと戦う事になるとは思ってなかったわ。でも良

い機会だわ。あなたの出鼻をくじいてあげる！」
サラはビシッとディアスを指さした。
「お手柔らかにね」
そう言ってディアスは呪文を唱える構えを取った。
「シェーナ対サラ……始め！」
魔法を唱えるためには、相手と間合いが開いていないといけない。そのために大概の生徒は試合が始まると後ろに下がるのだが、ディアスは前に出た。
意表を突かれたサラは一瞬止まったが、再び詠唱の続きを唱え、ディアスに向かって炎の弾丸を放った。
「ファイア・ブリッド！」
対してディアスが放ったの突風の魔法だ。
「ウィンド・ブラスト！」
凄まじい突風が吹き荒れ、炎の弾丸は明後日の方向へと飛んで行った。そして突風をあびたサラは息が詰まり、次の呪文を唱えられない。
「光の精霊よ。光陣より来たりて、我が前に盟約を示せ！　シャイニング・スピア！」
ディアスは至近距離から光の槍を放った。
サラは身をひねって避けようしたが避けきれず、変色障壁の色が一気に黄色に変わった。
サラは間合いを取るために後退するが、ディアスの方が動きが速い。死角へ死角へと動くディアスを、サラはまともに捕らえる事すらできない。
「ファイア・ブラスト！」
サラの耳元でボッと音が聞こえたと思うと、サラは炎に包まれていた。
「きゃぁあ！」
対魔法防御障壁があるために熱くはないが、視界を覆う炎にサラは悲鳴を上げた。

そしてサラの変色障壁は真っ赤になった。
炎が収まるとサラはディアスが十分な間合いを取っていた事に気が付いた。間合いを取っていないと、ディアス自身も自分の放った炎に巻き込まれていただろう。
「いったい何が起きたって言うのよ……」
サラは呆然としていた。今までこんな近い間合いで戦った事がなかった。魔法の打ち合いはお互い距離を取って行うものなのだ。
「くっ。まただわ……」
サラは自分が負けた事に気づくと言った。
「まだ終わりじゃないわよ。後期でまた戦いましょう」
「勝利者の余裕ってやつ？」
「違うわよ。あなたみたいに私の事をまともに相手してくれる人って、少ないのよね。だから嬉しいのよ」
「へっ？」
サラは呆然としていた。いったいシェーナは何を言っているのだろう？
「わからなければいいわ。楽しかったわよ」
最後の一言はシェーナとしての演技でなく、ディアスの言葉だった。
サラは何かと突っかかって来たが、それはある意味挑戦であり、ディアスはいつでもその挑戦を受けて来た。ちょっと言葉にトゲがあったが、慣れてくれれば、こいつはこう言う言い方しかできない不器用な奴だと思い始めた。そう思うと可愛いく思える。本当はサラもシェーナの事を嫌っていない。本当に嫌っていれば一々突っかかってこないで、無視すればいいのだ。
「何を言っているのかさっぱりだけど、あなたから挑戦するとは珍しいわね。その挑戦受けて立つわ。後期は負かしてあげるわ！」
「楽しみにしてるわね」
武舞台を降りようとしていたディアスが振り向いて言うと、サラは何か吹っ切れたような笑いを浮かべた。その笑みをディアスも微

笑んで返した。
（ちょっと余計な事したかな……）
ディアス達四人は予選でそれ程強敵とは当たらなかったが、クレイとエリスはかろうじて勝ち進んでいる状態だった。
クレイは初戦から四回戦目までは完勝していたが、惜しくも最後の一戦では判定負けになり、エリスは判定勝ちが二つに、完勝が三つの成績だったのだが、殆どの試合において、変色障壁が赤の一歩手前まで染まっていた。
ディアスとシェーナは元々備わっていた戦闘センスのお陰で、全て完勝で勝ち進んでいた。
そして予選が終わり、剣術学部第二学年のトーナメント開催の朝、トーナメント表が闘技場のあちこちに張り出された。
「何とか第一関門突破ね」
シェーナが闘技場の正面に張り出されたトーナメント表を見て言った。
残念ながらクレイとエリスの名前はなかったが、ディアスとシェーナの名前が、トーナメント表に乗っている。予選通過である。
「お互いよくやったな」
ディアスもホッとして言った。
「でもギリギリって感じがするわ」
シェーナはそれでも申し訳なさそうに言った。周りの噂は聞いている。今学期のディアスは絶不調。優勝は誰だと。裏で行われている賭の倍率も下降しっぱなしである。
「気にするな。落ちた成績は後期に取り戻せばいい」
「ごめん」
「だから気にするなって。それよりも……とにかく頑張れ。ここまで来たらもう頑張るしかない」
ディアスはここまで来たらもう十分だと言いそうになったが、それはシェーナには言ってはいけない気がした。だから頑張れとしか

言えないのだ。しかし勝てとも言えなかった。なぜならシェーナのトーナメント一回戦目の相手は、去年後期の期末トーナメントで三位のフィリアだったからだ。
　シェーナもやっとそれに気が付いた。
「まじ？」
「とにかく頑張れ。魔法でも何でも全てを出しきるんだ」
　ディアスは心配を隠しつつ応援の言葉をかけた。
「そうだよ。頑張れシェーナ」
　クレイも応援の言葉を送った。
「でもディアスの体じゃ上級魔法は使えないのよねぇ」
　しかし空気を読もうとしないエリスが、言ってはいけない事を言ってしまった。
「な、何とかしてみせるわ！」
　ディアスの体では魔力が足らなくて上級魔法が使えない。シェーナは左腕に付けた魔法の腕輪を見た。ディアスの体で魔力を上げる特訓をし、今では二十五個の中級魔法を入れる事ができる。上手く短縮魔法使ってやるしかない。

『皆さん！　長らくお待たせしました！　これより前期期末トーナメント本戦を開始致します！』
　闘技場全体に大音量の女性の声が響き渡った。
　全生徒が入れる程の大きな闘技場で、人一人の声が響き渡るはずがない。風の魔法で声を大きくしているのだ。
　アナウンスの声が響き渡ると、闘技場に集まった生徒が歓声を上げた。とうとう始まるのだ。期末トーナメント本戦が。
『始めに校長のお言葉を聞きください』
　お決まり事である。しかし誰も校長の話なんて聞いていなかった。
『それでは第一回戦を始めます。第一回戦第一試合はディアス・ライマールとフィリア・レルバインの対戦です。ディアスは今まで出場したトーナメントに全て優勝していますが、約三ヶ月前から絶不

調との噂が立ち、今回の予選での成績はあまり良くないとの噂。対してフィリアは去年の前期では四位、後期では三位の成績です。しかも後期では準決勝でディアスに敗れています。打倒ディアスに燃えるフィリアは果たしてディアスを倒す事ができるのでしょうか！？　今回のトーナメントは初戦から目が離せません！　おぉっと両者入場です！」

そのアナウンスに闘技場の全ての観客が歓声を上げた。

シェーナは柄にもなく緊張していた。今シェーナに勝ち目は？と聞いたら、「駄目、無理」と返ってくるだろう。しかしやるしかないのだ。そして二人は武舞台に上ると、歓声は絶頂を迎えた。普通なら尻込みしてしまう歓声だが、シェーナにとってそれは追い風となり、段々と落ち着いてきた。それにつれて緊張も薄らいでいく。

（これよ。この歓声が私に力を与える……）

そしてシェーナは対戦相手のフィリアを見た。

シェーナは自分の容姿には自信があった。しかし思わず感歎の声が出てしまうほどフィリアは美しい。線が細くてキリッとした顔立ちは凛々しく、腰まで伸びた銀の髪はプラチナでできているのではと思うほど輝いている。そして剣術学部だというのに、手足は筋肉質でなくしなやかで美しい。女性として理想的な体つきである。フィリアは容姿だけならシェーナに負けていない。しかしフィリアには学校のアイドルになれない致命的な欠点があった。それはフィリアが女色だと言う事だ。男は軟弱と決めつけて相手にはせず、恋心は常に女性へ向いている。しかもフィリアには何人もの彼女がいると言う噂だ。これでは男達にもてるはずもなかった。極めつけにフィリアはなんて言うか……ちょっとあっちの世界の住人なのだ。

「ディアス。ハッキリ言うけど。あなたには失望したわ。男の中ではマシな方だと思っていたけど取り消すわ！」

フィリアは試合開始地点に立つとディアスに言った。

「あの威圧感はどこへ行ったの？」

フィリアは苛ついていた。前回のトーナメントで対峙したときは、

凄まじいプレッシャーに自分の闘気が消し飛ばされそうになったが、今は何も感じない。
「不調なんだよ。何だか知らないけど……」
「長すぎるわ。トーナメントに合わせて体調を整えられないだけでも、あなたは弱くなった。体調管理もできない戦士なんてもう終わりね。私が止めを刺してあげるわ！」
シェーナは何も言い返せなかった。真っ向から本気で言っている相手に、嘘で誤魔化したくない。
「言い返す事もできないの？」
シェーナは言い返す代わりに魔力練り上げた。三ヶ月前までは、魔道士から見れば殆どないに等しい魔力だったが、今は努力の甲斐があって、強力とまではいかないが、魔道士の平均魔力より、ちょっと上まで魔力を上げる事ができた。
その力を感じ取ったのだろう。フィリアが腰を落として構えた。
「ディアス対フィリア……始め！」
審判が対戦の開始を告げると、シェーナは後退しつつ呪文を唱えた。
「風の精霊よ。汝、我に集いて全てを切り裂く斬風となれ！　シルフィード・ソード！」
呪文が完成すると同時にシェーナが持つ剣に風が渦巻いた。
しかしフィリアは動かない。フィリアは後の先を取る戦いを得意としているため、自分からは動かない。まずは相手の動きを見ているのだ。そのフィリアの眉がピクンと上がった。シェーナが魔法を唱えている事に気が付いたのだ。
（魔法？　ありえないわ。いったいディアスに何があったって言うの？）
フィリアは警戒しつつ、シェーナの側面に回り込もうとジリジリと動く。しかしそれがあだとなった。
「風の精霊よ。我が手に集いて刃となれ！　ウィンド・スウィギング！」

シェーナが突きだした剣先から、真空波が放たれた。
しかしフィリアは余裕で避けると、一気に間合いを詰めて来た。間合いが開いていると、一方的に攻撃を受ける事になるからだ。
「風の精霊よ。我に集いて盟約を果たせ。突風となりて吹き荒れろ！　エア・ストリーム！」
シェーナの放った突風が吹き荒れ、フィリアの接近を妨げ攻撃を鈍くする。
一方シェーナの剣には、真空の刃を剣身に付与して切れ味を鋭くし、更に試合開始直後にかけた風の力により剣速を早める魔法がかかっている。
「はっ！」
シェーナは突風に乗り、一気に間合いを詰めると、まさに風のような斬撃を放った。
ギィインッ！
「こざかしいわ！」
しかしフィリアは必要最小限の動きでシェーナの剣を受け流した。
勢いがあった分、シェーナは大きく流されて、体が宙を流れた。
（受け流されたら、無理して体勢を立て直そうとせず、流れに乗って間合いを取るんだ）
シェーナはディアスに教えられた事を思い出し、流れの向こうに飛び込む様に前転した。その上をフィリアの剣が通過していく。
しかしシェーナが体制を立て直して振り向くと、目の前に銀の刃があった。
「アンチ・フィジカル・ディフェンス・シールド！」
シェーナは銀の刃をひねって交わしつつ、フィリアが様子を見ている間に溜めておいた、対物理防御障壁を張った。その事により突きから横薙に派生する斬撃を防ぐ事ができた。
そして斬撃を喰らいながら、お返しとばかりに剣を振るう。
「せぇえい！」
だがフィリアはまたしてもシェーナの斬撃を紙一重で避けると、

何事もなかったように剣を振るう。
シェーナが一撃目を受け止められたのは奇跡に近かった。続く二撃目でシェーナが張った防御障壁が砕け散った。シェーナは後ろに飛んで間合いを開けようとするが、まるで吸い付くようにフィリアは間合いを空けさせない。
「そんなちんけな魔法で！」
フィリアの横薙の一閃がシェーナに浅く入り、変色障壁が黄色に染まった。
「私を倒せると思うな！」
トドメの突きがシェーナの喉元へ激突した。
シェーナは真っ赤になった変色障壁をまとって吹っ飛ばされた。もし変色障壁の下に、防御結界がなければ、今頃シェーナの喉は串刺しになっているだろう。いや、あの勢いならば、頭が飛んでいたかもしれない。それを思うとシェーナは震え出した。
「ふんっ。やはり男ってのはだらしないわね」
フィリアはそう言って踵を返した。
一瞬静まりかえった闘技場がどよめきだした。
『これは大番狂わせ！　優勝候補のディアスがまさかの完敗です！』
「おおおおおお！」
そおアナウンスにつられて、闘技場が歓声につつまれた。
まさかの展開に歓声上げる者、フィリアの勝利に興奮する者、賭に負けて罵声を飛ばす者、様々な声が闘技場を揺るがした。
「うそ……」
シェーナはどこかで何とかなると思っていた。優勝は無理だとしても、いい所まで行くのではなかと思っていた。しかし現実は一回戦敗退である。相手が悪かったと思えばそれまでかもしれない。しかし何とかなると思っていた自分が情けなかった。
シェーナがとぼとぼと通路を歩いていると、十字路の左から男がユラリと現れた。

ジェスターだ。
「……なんだ？　あの戦い方は？　魔法で誤魔化すのがお前の戦い方か？」
ジェスターからにじみ出てくる怒気に、シェーナは恐怖し、足がガタガタと震え出した。
それを見たジェスターの瞳孔が開いた。そしてその目が失望へと変わる。
「俺が怖いのか？　まるで別人だな……。お前には呆れたぞ。前に言った言葉を覚えているか？　荒療治をしてやると。しかし荒療治など必要ない。お前はこのまま終われ」
（殺される！）
ジェスターは剣を抜くと、次の瞬間にはシェーナの目の前にいた。
振り下ろされる剣を、シェーナはまるで他人事の様に見ていた。
今は防御障壁などないのだ。
しかし次の瞬間、金色の髪がシェーナの視界を覆った。
ギィィィンッ！
そして甲高い金属の悲鳴が通路にこだました。
「ディ、ディアス！？」
間一髪割り込んできたディアスが、ジェスターの剣を受け止めていた。
「ディアスだと！？」
「心配になって来てみて良かったよ」
そう言ってディアスはジェスターに剣を向けた。そしてそのまま押し返す様に剣を振るう。ジェスターは剣を受け止めつつ後退した。
「この斬撃。この威圧感……。そうか。お前がディアスか！」
ジェスターは驚愕すると同時に歓喜した。
「そうだ。俺がディアスだ。訳あってシェーナと体が入れ替わっている」
「なるほど。これで合点がいった。道理で……な」
意外にもジェスターはすぐに理解した。何かの魔法を失敗したの

だろうと思ったのだ。
「そう言う事だ。だからシェーナをいじめないでくれよ」
「そうか。すまなかった」
ジェスターは剣を納めると、意外にも礼儀正しく頭を下げた。
シェーナは安心したのか、その場にへたり込んだ。
「ディアス……。その……ごめん」
そしてシェーナは涙をボロボロとこぼした。
「いいんだよ。シェーナは良くやった。相手がフィリアじゃしょうがないよ」
「でも……私……」
「シェーナは頑張った。及第点も取れた。今回の分は俺が後期で取り戻せばいい」
「ディアスゥ……」
「そうか！　戻れるのだな！？」
「ああ。後期には元に戻ってるさ」
「それを聞いて安心したぞ」
「いいか？　俺と戦いたければ、この事は誰にも言うなよ。もしばれたら退学になるかもしれない」
実際に退学になるのはシェーナだけかもしれないが、それはあえて言わない。
「わかった」
「それとこの事はシェーナをいじめた事でチャラだからな」
「抜け目のない奴だな」
ジェスターは口元をゆるめた。
「明日はお前がシェーナとして戦うのだな」
「そうだ」
「ならばその戦いを楽しみにしておこう」
「シェーナ。立てるか？」
「駄目、無理。腰抜けちゃった……」
「おいおい。今の俺じゃ持ち上げるのちょっときついぞ」

「しかたない。俺が送って行ってやろう」
ジェスターが手を差し伸べたが、シェーナはそれを押し返した。
「ディアスがいい」
「……だとよ」
ジェスターは苦笑するとさっさと消えた。気を使っているのだろう。
「助けてくれてありがとう。私……嬉しかった」
「どういたしまして。でも間一髪だったな」
「うん。ピンチな時に助けてくれるなんて、ちょっと格好良すぎだぞ」
「たまたまだよ。それより明日は応援してくれよな」
「もちろん！」
二年前期の期末トーナメントの優勝者はジェスターだった。そして二位はフィリア。しかし二人の顔はどこか物足りないように見えた。

そして次の日。魔道士学部二学年のトーナメントが始まる。今日はディアスの番だ。
『これより一回戦第三試合を始めます。選手は武舞台へ入場してください』
アナウンスが流れ、客席から歓声が上がる。しかしその歓声も、ディアスが現れるとどよめきに変わっていった。それはディアスの……いや、シェーナの腰にありえない物が吊されていたからだった。
『シェーナ入場です。おっと、これはどういう事なのでしょうか？
シェーナの腰にはなんと剣が吊されています。シェーナはディアスと同じく今まで全てのトーナメントで優勝してきました。しかし数ヶ月前からディアスと同じくスランプに陥り絶不調。昨日のディアスは魔法で乗り越えようとしましたが、失敗に終わっています。果たしてシェーナは剣をつかって乗り越えられるのでしょうか！？
対してレーニックは前回のトーナメントで初出場にて八位の成績

です。果たしてどちらが勝つのでしょうか！？」
　そのアナウンスを聞いてシェーナはへこんだ。なにも昨日の事をぶり返さなくてもいいのに。そして改めて思い知らされた。アナウンスに名前が出て来る程、ディアスは注目されていたのに、自分はそれに泥を塗ってしまったのだ。申し訳なくて身が破裂しそうだ。
「ディアス。大丈夫？　試合が始まるわよ」
　エリスが心配そうに覗き込んだ。
「ああ。大丈夫だ」
　ディアスならこう言うだろう。そう思ってシェーナは顔をあげた。
「キャァァァアアアアアア！　シェェェェェナァァさぁまぁぁぁぁぁぁぁ！」
　選手出入口の丁度上の観客席にいたフィリアが、凄まじい大音響の叫びを上げた。黄色い声援と言うよりどこか狂気じみた叫び声だ。
　びくっとディアスは見上げると、目が合ってしまった。その瞬間どこかいっちゃってたフィリアの目が正気に戻り、顔がとろけるようにふにゃふにゃに緩んだ。
「頑張ってくださぁぁぁぁあいぃぃぃぃ！」
　フィリアは限界ギリギリの絶叫を送った。
（マジかよ？　こいつは？）
　フィリアは親衛隊にこそ入っていなかったが、シェーナのファンだったのだ。それも熱狂を通り越している。
（こいつ昨日自分が倒した相手がシェーナって知ったらどうするんだろう……）
　ディアスはそんな事を考えつつ、武舞台へ向かった。

　ディアスは試合開始と共に一気に間合いを詰めた。
「光の精霊よ。天空より御下りて我が剣に宿れ！　スカイ・レイ・ソード！」
　レーニックは慌てて間合いを取ろうとしたが間に合わない。既に

目の前には蒼い光をまとった刃が迫っていた。
ギィィンッ！
闘技場が静まりかえった。
レーニックの変色障壁が一瞬にして真っ赤になった。
剣はレーニックの首の脇を抜けていた。
ディアスはわざと防御障壁をかすめるように突きを放ったのだ。
堅い防御結界に真っ正面から突きを放つと腕を痛める。
「おおおおおおお！」
闘技場は割れんばかりの大歓声を上げた。
『一瞬です！　まさに一瞬のできごとです。レーニック茫然自失！
動けません！　これはトーナメント始まって以来の最短記録ではないでしょうか？』
「しょ、勝者シェーナ！」
アナウンスの声を聞いてやっと審判が声を出した。
レーニックは腰が抜けて倒れていた。彼は見てしまったのだ。至近距離からシェーナの、いやディアスの目を。その目からたたき込まれた眼力が、レーニックを動けなくしていた。

「キャァァァァァァ！　シェエエナァァァさぁまぁあ！　ステキィィィィィイイイイ！」
フィリアは客席から身を乗り出して声あらんばかりに叫んだ。
ディアスはその真下からボーゼンとしてフィリアを見た。
剣術学部ではあんなに狂ったフィリアを見たことない。これではいくら容姿がよくてもやばすぎる。
「キャァァァァ……はぅ……」
フィリアは叫びすぎて貧血を起こし、気が遠くなって乗り出していた手すりから落っこちた。
「うあっ！」
ディアスは落ちてくるフィリアをとっさに受け止めた。腕の中ではフィリアが涎を垂らしつつ白目をむいていた。

（マジか……）
恐るべしフィリア。まさに狂気の果てである。
「仕方ないなぁ」
ディアスはフィリアを背中に担ぐと、選手出入口へと歩き出した。
「ただの貧血だよ」
医務室の先生は呆れて言った。
「普通、貧血になるまで叫ぶかねぇ。これじゃそのうち喉を痛めるよ」
「私に言われても困るのですが……」
ディアスは本当に困った。
「起きたら言っておいてくれ」
ディアスはベットに横なったフィリアを見た。そして思わずつばを飲み込んでしまった。こうして寝ているとまるで天使の様だ。女性の寝顔をいつまでも見ているなんて失礼だと思い、視線を外そうとした時、フィリアが目を覚ました。
「うにゅう……あっ！　シェーナ様」
フィリアは目を覚ますと、寝たままキョロキョロと周りを見渡した。
「私……落ちたんだ」
フィリアは落っこちた自分をシェーナが助けてくれて、医務室まで連れて来てくれたのだと思った。正確にはディアスなのだが、そこまでは分からない。
「シェーナ様が私を運んでくれたのですね」
フィリアは恥ずかしくなったのか、かけ布団で顔の半分を隠して言った。
（やべぇ。可愛すぎる……）
ディアスはいつもと違うフィリアに戸惑った。
「そうよ」
「ありがとうございます。私感激しました。シェーナ様って強いだ

けじゃなくて優しいのですね！」
「そんな事ないわよ。それよりフィリア」
「はいっ！　あぁ……シェーナ様が私の名を……。私を知っているなんて……」
フィリアは恍惚としたとろける顔になった。
（だめだ。こいつは……イッちゃてる……）
「応援は嬉しいんだけど、恥ずかしいからあまり叫ばないで欲しいのよ。それにあまり叫びすぎると喉を痛めるわよ」
「えっと、それは……」
「いい？」
「……はい」
フィリアは素直に答えると、ショボンと落ち込んだ。そして潤んだ目で上目使いにディアスの様子をうかがっている。男の前では凛々しく強気なフィリアだが、シェーナの前ではしおらしく可愛い。
（これで中身もまともだったらな。もったいない……）
「それじゃ、次の試合があるから行くわね」
「あっ！　私も行きます」
「寝てた方がいいんじゃない？」
「ただの貧血だから大丈夫です。シェーナ様の試合があるのに寝てられないわ」
フィリアは勢い良く起きると、ベットから飛び降りた。
「……そう？」
「そうです！」
「途中まで御一緒させてください！」
「まぁ良いけど……」
ディアスはフィリアの迫力に押されてしまった。

ディアスの二回戦目の相手グレイルは、剣を警戒して間合いを開けつつ魔法を撃った。
「アイス・ファランクス！」

グレイルとディアスの間に現れた氷の刃が、ディアスに降り注ぐ。
ディアスは苦もなく氷刃の群れを避けつつ呪文を唱える。しかし放たない。短縮魔法を使うために溜めているのだ。
しかしグレイルは、ディアスが避けるのに精一杯だと判断した。有利に立ったつもりになったグレイルは、次々と魔法を繰り出した。
ディアスにとって魔法は避けやすかった。詠唱と言う予備動作がある分、どんな魔法が放たれるのか予想できるからだ。その点に置いて、シェーナが放った短縮魔法は予想できずやっかいだった。だからディアスは自分も短縮魔法を使う事にしたのだ。
「あまたに漂う大気の精霊よ。我、祭壇を背に盟約をはたさん。汝、幾千もの光りとなりて、天地を繋がん！」
ディアスは自分が使えない上級魔法の詠唱は、知識として身に着けていた。魔道士の戦いにおいて、知識は武器となり防具となる。そしてディアスはただ避けながら魔法をため込んではいなかった。相手が得意としている系統の属性を見極めていたのだ。
「ライトニング・レイン！」
「アンチ・ウィンド・シールド！」
稲妻は風の属性魔法である。だからディアスは耐風防御障壁を張って防いだ。一属性限定の中級魔法は、限定されている分、上級防御障壁に匹敵する。
武舞台の上空から無数の稲妻が、雨のように降り注ぎ天地を繋いだ。
しかしディアスの周りには風の防御障壁が展開しているので、稲妻はディアスまで届かない。ディアスは稲妻の雨をまるで何もなかったかのように突き進んだ。
「馬鹿なっ！」
グレイルは目を見開いて驚愕した。
「あまたに漂う闇の精霊よ。我闇の理を用いて精霊門を開かん。汝ら魔力に干渉せよ！　我を守る盾となりて！　アンチ・マジカル・ディフェンス・シールド！」

グレイルは対魔法防御障壁を張った。
剣には魔法がかかっている。その魔法を防げば、鋼の剣は魔法がかかっているために一緒に弾かれるのだ。しかし……
「ディスペル！」
ディアスは剣を振るいながら、自分の剣に解呪の魔法をかけた。
ディアスの剣はただの鋼の剣となり、魔法を防ぐ事しかできない対魔法防御障壁を素通りし、グレイルを横薙に薙ぎ払った。
「うわぁっ！」
グレイルは変色障壁を真っ赤に染めながら、真横に吹っ飛んだ。
「ぐっ……。馬鹿な。ありえない」
「勝者シェーナ！」
闘技場は割れんばかりの大歓声を上げた。なにせ上級魔法を使ってくる相手を、中級魔法のみで倒したのだ。それは誰もが夢を見るが、なかなか実現する事が難しい。
そしてディアスの使う魔法剣に、みんなが注目し始めた。この日から魔法剣を取得しようとする者が続出するのは、目に見えて明らかだった。

ディアスは準決勝まで進む事ができた。ディアス自身信じられない事だ。まさか準決勝まで進めるとは思わなかった。幸いまだ魔力には余裕があった。しかしその反面、シェーナの体で剣を振るい続けるには、体力の消耗と筋力への負担が激しかった。
「うし。後は気合いだ！」
ディアスは控え室で気合いを入れた。選手の控え室は個室になっている。トラブルを避けるためだ。ディアスは全身を映し出す大きな鏡の前に立った。そこにはディアスではなくシェーナが写っている。
「シェーナには感謝しているよ。今の状態があったからこそ、俺は魔法を覚える事ができ、更なる可能性に気がついた。ちょっとシェーナの体に無理をかけるかもしれないが、許して欲しい。その代わ

り優勝をお前にプレゼントしてやる」
　ディアスの次の対戦相手はトレイシア・ラインヤード。同学年で最強の相手だ。トーナメント開催委員会ももっと気がきいた組み合わせにしてくれれば良いのにとディアスは思った。本来ならば決勝にこそふさわしい対戦である。
　ディアスが闘技場に姿を現すと大歓声が上がった。
『シェーナの登場です。一回戦、二回戦と我々の度肝を抜いた戦いを見せてくれたシェーナ。今回はいったいどんな戦いを見せてくれるのでしょうか！？　おおっと！　反対側からはトレイシアの登場です。前回のトーナメントでは決勝でシェーナに敗れているトレイシア。今回はその雪辱を果たせるのでしょうか！？』
「シェーナ。それがあなたの答えなのね？」
　トレイシアはシェーナが十分に本気で戦える相手だとわかりホッとした。
「そうよ。これが今の私の戦い方。前に言った意味がわかった？」
「ちょっとはね。あなたも変わったけど、私も前回と同じようにはいかなくてよ。他の分野に手を伸ばして、強くなった気でいるのかもしれないけど、本当に魔法を極めると言う事はどういう事なのかを、教えて上げましょう」
「それは楽しみね。なら私はあなたに新しい可能性を教えて上げるわ」
「シェーナ対トレイシア……始め！」
　ディアスは合図と共に間合いを詰めようと飛び出した。
　剣を使う者が魔法を使う者に勝つためには、離れていては話にならない。一方的に魔法を撃たれてしまう。要は接近して魔法を撃たせなければいいのだ。しかし感のいい人なら、そろそろ気づくだろう。ディアスが忘れている事に……
「あまたに漂う風の精霊よ！　蒼き雷光となりて我が剣に宿れ！　ブルー・ライトニング・ソード！」
　ディアスの剣が蒼い稲妻をまとってトレイシアに襲いかかる。

対してトレイシアは冷静に後退しつつ、防御魔法を唱えた。
「……アンチ・フィジカル・ディフェンス・シールド！」
ギィィンッ！
ディアスの剣は耐物理防御障壁に弾かれた。いくら魔法がかかったいる剣でも、その中身である鋼を弾いてしまえば魔法は届かない。しかも今までの相手と違って、ちょっとやそっとじゃ防御障壁を破れそうになかった。
「はっ！」
ディアスはかまわず剣を防御障壁に叩きつけた。要は防御障壁が壊れるまで攻撃を続ければ良いのだ。
「あまたに漂う闇の精霊よ。我闇の理を用いて精霊門を開かん。汝ら魔力に干渉せよ！　我を守る盾となりて！　アンチ・マジカル・ディフェンス・シールド！」
トレイシアは対魔法防御障壁を張った。
「くっ！」
ディアスは五撃で対物理防御障壁を破壊したが、その間にトレイシアは新しい防御障壁を張っていた。今度は魔法が弾かれて剣が届かない。これではきりがない。本来のディアスの体なら、腕力と剣速がある分、トレイシアが新しい防御障壁を張る前に破壊できていただろう。
「闇の精霊よ。無の力を我が前に示せ。虚無の力持て、すべての力の源を絶たん！　ディスペル！」
「水の精霊よ。魔力の力を散らしめよ！　カウンター・スペル！」
ディアスはトレイシアの防御障壁を解呪しようとしたが、トレイシアはそれを予測して、魔法を打ち消す魔法を放った。その結果ディアスが放ったディスペルは、打ち消されてしまった。
「あなた。シェーナではないわね？」
トレイシアの言葉にディアスは動揺した。そしてその一瞬が命取りになった。
「輝き燃えたる炎の精霊よ……」

トレイシアの周りにボッと炎でできた魔法陣が展開した。
「我ここに火の円盤なる理を用いて、炎界の道を開かん。火充時、我に大いなる力の炎を与えたまえ！　バーニング・フレア！」
高速で唱えて放った爆炎の魔法が、ディアスに向かって突き進んだ。
ディアスはとっさに横に飛んで避けたが避けきれず、爆炎に半分飲み込まれた。
「ぐっ……」
変色障壁が真っ黄色に染まる。
爆炎と黒煙が晴れると、遠く間合いを開けたトレイシアが、対魔法防御障壁を張り終えていた。
トレイシアの戦い方は、地味だがまずは防御障壁を張り巡らせ、相手の攻撃を無力化する。その後に強力な魔法で止めを刺すのだ。
「世界に満ちたる光の精霊よ……」
トレイシアが上級魔法を唱え始める。
ディアスは上級防御魔法を使えない。防ぐには避けるか、呪文を唱え終わるまでに相手を黙らせるしかない。
「汝が光り我が道標とならん。汝が光り我が刃とならん。汝、我が敵を光の矢にて切り裂け！」
しかしディアスは今トレイシアが唱えている魔法がどんな物か知っていた。
「シャイニング・アロー！」
トレイシアは超高速の光の矢を放った。たった一発の小さな矢だが、密度が高く凄まじい威力とスピードを持っている。普通の人の目には、キラリと光ったようにしか見えない。しかし爆音はディアスの所ではなく、武舞台をドーム場に囲む結界で起こった。闘技場の客席に魔法が流れないように、武舞台を囲むように結界が張られているのだ。
ディアスは魔法のかかった剣で、超高速の光りの矢を受け流したのだ。

「くっ……痺れる」
ディアスは落としそうになった剣を何とか両手で握り締めてこらえた。しかしあまりの衝撃に動きが止まってしまった。
「なっ！？」
トレイシアは戦慄した。今の魔法は普通なら視認できない高速魔法であり、トレイシアの切り札の一つでもあるのだ。
（そんな……。防御障壁も張ってないのに防がれるなんて……）
しかしディアスも立て続けの戦いによって限界が来ていた。いや、正確にはシェーナの体にだ。自分の体だったらまだ余裕だとわかるだけに悔しい。だがここからが正念場だ。
（ちょっとは魔道士らしい所を見せないとな）
トレイシアが高速攻撃魔法を防がれて、動揺し警戒している間に、ディアスは呪文をため込んだ。
そしてトレイシアが呪文を唱えると同時に間合いを詰めた。
トレイシアが唱えた魔法は、またしても対魔法防御障壁だ。トレイシアは相手がシェーナでないと直感していた。そしてシェーナでない何者かは、今までの戦いで上級魔法を使わないのでなく、使えないのだと判断した。ならば防御を固めてしまえば勝てる。
「ファイア・ブラスト！」
ディアスが放った爆炎の魔法を、トレイシアは避けようともせず、防御障壁で防ぎながら勝負を決めるための魔法を唱えた。
炎がトレイシアを包み込み、爆炎が花を咲かせる。ディアスは次々とため込んだ魔法を放ち続けた。
「ファイア・ブラスト！」
トレイシアの周りで次々と爆炎が炸裂し黒煙が立ち上る。魔法による爆発の黒煙自体は、対魔法防御障壁が防いでくれるのだが、爆炎の魔法はトレイシアの視界を隠すと共に、トレイシアの周りの酸素を奪った。
「かはっ……か、風の精霊よ。我に集いて盟約を果たせ。突風となりて吹き荒れろ！　エア・ストリーム！」

トレイシアは呪文を中断し、突風の魔法で炎と煙を吹き飛ばした。
それを予想したディアスは、ある程度炎の魔法を放った後、再び炎の魔法をため込んでいた。
「ファイア・ブラスト！」
ディアスは突風が止むと、再び炎の魔法を放った。
パキンッ！
トレイシアの一番外側に張られた防御障壁が砕け散る。
「風の精霊よ。汝我を包み、踊れる盾となれ！　シルフィード・ロンド！」
トレイシアはしつこい炎の魔法を防ぐために、風の防御障壁を張った。トレイシアの周りを疾風が舞い、迫りくる炎をあさっての方向に退けた。
「ちっ！　次から次へと……」
ディアスは徐々に追いつめられていた。剣を初めとするあらゆる手段が、トレイシアによって封じられている。
ならば残す手は後一つ。ディアスが唯一覚える事ができた上級魔法を使うしかない。
「世界に満ちたる光りの精霊よ。我ここに光の理を用いて天空の扉開かん。汝焦熱となりて我が剣の刃となれ！　シャイニング・セイバー！」
まるで太陽が現れたかのようにディアスの剣が輝いた。
「ぐぅ……」
ディアスはどんどん魔力が剣に吸われていくのがわかった。この魔法は威力は強いが、消耗が激しい。シェーナの魔力と魔力容量があるから可能な魔法であり、ディアスの体では到底無理な魔法だった。
光りが収まると、ディアスの剣の周りで光りが激しく躍動していた。
その間にトレイシアは上級魔法を唱えていた。トレイシアは待っていたのだ。全ての障壁を張り、準備が整ったこの時を。

「輝き燃えたる炎の精霊よ。炎の王イフリートよ。我、祭壇に向かい地炎の門を開かん」
トレイシアを中心に炎でできた魔法陣がまるでドームのように多重に展開した。多重構造型立体魔法陣。この魔法陣を召喚しなければならない程の攻撃魔法を使えるの者は、同期の中でも五人といない。難易度が高く強力な魔法だ。
「うおおおおお！」
ディアスはかまわずトレイシアに向かって突進した。
「星に芽生える源の火海よ。その熱き力を我に与えよ！」
ディアスはトレイシアを間合いに収め剣を振るう。
パキィィンッ！
最初の一撃で風の防御障壁と対魔法防御障壁を易々と破壊した。そして二撃目でもう一枚防御障壁を破壊する。
「盟約より来たれ！　紅蓮の炎！」
そしてディアスの斬撃がトレイシアが張った対魔法防御障壁を全て砕いた。
内心肝を冷やしたトレイシアだが、まだ対物理防御障壁が残っている。
（私の勝ちよ！）
しかしディアスはバッと間合いを取ると、剣を大きく振りかぶった。それとトレイシアがラストスペルを唱えるのは、ほぼ同時だった。
「インフェルノ！」
トレイシアの周囲に展開していた魔法陣が爆発し、全方位に向かって巨大な爆炎が吹き荒れた。まるで炎の嵐だ。
「はっ！」
爆炎が吹き荒れたと同時に、ディアスの剣から太陽の様な光りの刃が放たれた。
上級防御障壁をいとも簡単に破壊する威力を持った光りの刃が、炎を切り裂きトレイシアに迫る。

対してトレイシアは魔法に対して無防備になっていた。
相打ち。誰もがそう思った。
ディアスは炎を切り裂いたが、周囲に広がった圧倒的な炎に飲み込まれ、武舞台の端まで吹っ飛ばされた。もちろん変色障壁は真っ赤に染まっていた。むしろその下の防御結界が健在である事に驚かされる。選手一人一人に結界を張っている先生達が、どれ程の実力を持っているかがうかがえた。
炎の海が消えると、トレイシアは武舞台の中央に立っていた。
変色障壁は黄色く染まっているが、それは自ら放ったインフェルノのバックファイアによるものだった。ディアスの放った光の刃は避けられてしまったのだ。魔法剣は剣にかかった全魔力を放出するかわりに、一発だけ魔法を放てる。鋼が通らなければ、その代わりに剣にかかった魔法だけを通れるようにすれは良いのだ。それをトレイシアは予測していた。だから至近距離でも避ける事ができたのだ。対してディアスは広範囲魔法を放たれて避ける事ができなかった。やはり魔法戦においてはトレイシアの方が一枚上手だった。
「勝者トレイシアァァァァ！」
割れんばかりの歓声が上がった。
「ここまでか……」
悔しいが割とディアスは満足していた。本来の自分とは全く別の道でここまでこれたのだ。しかも予想以上に戦えた事に驚いているくらいだ。
身を起こしたディアスにトレイシアが近寄って来た。
「はっきり言って驚いたわ。シェーナでない誰かさん。シェーナ以外にこれ程腕の立つ人がいるなんて……。あなたは誰？」
「ばれたか……。でも勘違いするなよ。シェーナの体だからできたんだ。俺の体だったらどうなってたかわからない。でも、もしかしたら倒れてるのはそっちだったかもしれないな」
「……わかったわ。あなたディアスさんでしょう？」
「感が良いな」

「分かれば簡単なものね。突然不調になった二人は、実は中身が入れ替わってた。だから相手の分野では素人になった。そうね？」
「あぁ。苦労したよ」
「元に……戻れるの？」
「後期になったら戻ってるさ」
「それは良かったわ」
「誰にも言うなよ」
「言わないわよ。体が入れ替わる様な魔法って言ったらネクロマンシーしかないわ。ばれたら退学ね。私はシェーナと戦いたいの。いなくなってしまったら困るわ」
「そうか」
「後期が楽しみだわ」
そう言ってトレイシアは武舞台を降りていった。

決勝戦はトレイシアが勝った。トレイシアにしてみれば、決勝の相手よりもディアスの方が何倍も強いと思った。もしディアスが本来の体に戻ったら、そして魔法を使い続ける事になったら、間違いなく驚異になる。いや、果たして勝てるかどうか……。トレイシアは事実だけを並べて考えた。非力なシェーナの体から繰り出された斬撃だから、防御障壁は五撃までもった。本来のディアスの力で斬撃を受けたら、次の防御障壁を張るのに間に合わないだろう。確実に斬られる。魔法と剣両方使える者は驚異になる。これはシェーナにも言えるだろう。後期トーナメントでは、恐らくシェーナは魔法と剣の両方を使ってくるだろう。ならばすべき事は一つだ。自分と同じ事を思っている人物が一人いる。ディアスをライバルとして見ているジェスターだ。

フィリアはシェーナをはげまそうと思い、選手用通路に来ていた。そこでフィリアはジェスターとシェーナを負かした憎きトレイシアを発見した。フィリアは気配を消しつつ近寄ると、通路に置かれて

いた荷物の影へと身を滑り込ませた。何となく気になったのだ。
そこでフィリアが聞いてしまった二人の会話の内容は、信じられないものだった。

「ちょっといいか？」
選手用通路の十字路でジェスターがトレイシアを待ち伏せていた。
「あら、奇遇ね。私もあなたに用があったのよ」
「どうやら目的は同じようだな」
「そのようね」
「まさかライバルだと思ってたディアスがシェーナさんと入れ替わってるとはな」
「やっぱりあなたも気付いていたのね。お互い驚かされたわね。そんな事よりもこれからの事よ。魔法と剣を両方使える彼女達に対抗するには、私達も魔法と剣を使えるようにならないと厳しいわ。今回は勝てたけど、元に戻ったら……認めたくないけど、今のままでは勝てないわ」
「そうだな。ディアスとあなたが戦うのを見て俺は身震いした。あんな戦いを見せられは黙っていられない。奴らの後を追うようで気にくわないが、そんな事も言ってられないな」
「利害一致ね。夏休みはなくなるわよ」
「構わん」

「これがディアスとシェーナに関する情報をまとめた資料です」
「うむ。ご苦労だった」
教頭質に二人の生徒が呼ばれていた。その二人が教頭に渡した資料には、ディアスとシェーナが三ヶ月に渡って行ってきた特訓内容が、細かく書かれていた。
ディアスがどれだけの魔法を覚えているか、その種類や熟練度はどれくらいなのか。要した時間はどれくらいなのか。そしてトーナメントでの結果まで書かれていた。

シェーナの方も同じだった。基礎的な技術をどれだけの時間で習得できたのか。技はどれだけ身に着けたのか。その種類や熟練度はどれくらいなのか。そして二人に共通して書かれている事は、剣と魔法を使った場合、どれだけの効果があり、汎用性応用性がどれ程あるのかなどが、詳しく書かれていた。

「うむ。上出来だな」

教頭のラシャスが呟いた。

「これでシェーナがネクロマンシーを使った事に対して、眼を瞑ってくれるんですよね？」

そう言ったのエリスだった。もう一人はクレイである。ディアスとシェーナの資料を作れるのはこの二人しかない。

「あぁ、いいだろう。下がってよいぞ」

「はい」

二人は教室を後にした。

「本当によかったのか？　あいつらに内緒でこんな事……」

「良かったに決まってるじゃない。そう思わないと……私だって好きでやってるわけじゃないのよ」

「ごめん」

「それにこの事はあの二人は知らない方がいいのよ。わかった？」

「あぁ、そうだな」

「片道十日はかかるから、それなりに用意しておいてね」

とうとう夏休みになり、二人は出発の準備を始めた。なにせ往復するだけで半月かかる旅だ。しかも毎日宿に泊まれるとは限らない。旅の殆どは馬車の中で過ごす事になるだろう。昨年もその旅路で家に帰っているシェーナは、大きな幌馬車と御者を手配していた。寝台付きなのでかなり大きい。ディアスが去年使った馬車とは雲泥の差があった。今はその幌馬車に着替えや、保存の利く食べ物を積み込んでいるところだ。

「なぁ、シェーナ。魔晶石があった場所って、最寄りの村からどれ

くらい離れてるんだ？」
「そうね。朝方に出ればお昼前には着くと思うわよ。モンスターに手こずらなければね」
「近いな。それにモンスターか。腕試しには丁度いいな」
「腕試しねぇ。前に行った時は、私一人でも帰ってこれたし、二人なら余裕なんじゃない？」
「そうなのか。でも今は自分の体じゃないんだし、油断は禁物だぞ」
「油断なんかしないわよ。試合じゃないんだし、自分の命がかかってるもの」
シェーナの言葉にディアスはうんうんとうなずいた。
「なぁ、シェーナ」
「ん？」
「今思ったんだけどさ、空間転移の魔法で、ガーネイルまでひとっ飛びってわけにはいかないのか？」
「それなら楽なのよね。でも人生そう上手く行かないものなのよ」
「……人生なのか？」
「ここから貴族丘までならどうって事ないんだけど、馬車で十日もかかる程離れていると、魔法陣も巨大になるし、魔力も相当いるのよ。私一人じゃ無理よ」
「そんなもんなのか……」
ディアスは今年の夏は実家に帰るのを諦めていた。その事を両親に知らせる手紙も書いてあり、明日出発する時に出す予定である。しかしできれば出したくなかった。両親はディアスが帰ってくるのを心から楽しみにしているのだ。
「ディアス……ごめんね」
ディアスの沈んだ顔からシェーナは悟った。
「いや、いいよ。冬の休みには帰るからさ」

馬車の旅はお世辞にも快適とは言えなかった。いくら道が舗装されていても、揺れるものは揺れるし、大きな幌馬車と言っても所詮

は馬車。一日でも閉じこめられたら窮屈でしかたがない。途中で立ち寄った町や村で、二人は大きく羽根を伸ばしつつガーネイルを目指し、七日間かけて、シェーナの故郷ガーネイルにたどり着いた。しかしシェーナの実家には立ち寄らず、すぐに魔晶石がある森へと向かった。流石に両親に会えば、中身が入れ替わっているのがばれてしまうだろう。そんな事でディアスの第一印象を悪くしたくない。

ディアスは勘違いしていた事があった。いや、シェーナの説明では誰もが勘違いするだろう。シェーナは一つ言い忘れていた事があった。それはシェーナが魔晶石を得た所は、対岸が見えないほど巨大な湖の中央にある島にあったのだ。その島の森には精霊が宿っていると言われていて、そのため湖の周囲にある町や村はちょっとした観光地になっていた。そして湖の中央の島はかなり大きく、小さな町なら丸々入ってしまう程だ。

「まぁ、なんだ。俺の予想からすると、あの島には精霊とかモンスターがいるから、船は出せないって展開になる気がするんだが……」

「そうよ。その島はいわゆる聖域ってやつよ。まぁ聖域ってのはそこには何か危険な物があって、それに近寄らせないために、聖域って名目で人を近寄らせないようにしてるのよね。でもあの島にはどうしても確かめたい事があって。それで去年行ってみたのよ」

「ほう。それでその聖域から魔晶石をぱくって来たと」

「うっ……なんかトゲがあるわね」

「単なる泥棒じゃないか？」

「気のせいよ。あは……あはははは……。たまたま見つけたからちょっと……ね。出来心と言うかなんと言うか……」

ディアスはじっとシェーナを見つめて目を離さない。

「……まぁいいか。それでどうやってあの島まで行くんだ？」

「それは簡単よ。朝露に紛れて飛んで行くのよ。人に見つかったら色々とまずいからね」

「飛んで行くにはちょっと遠くないか？」

「大丈夫よ。あのくらいの距離なら余裕よ」
「何とかなるかな？」
「男でしょう。しっかりしなさい」
「今は女だ」
「……言っとくけど、湖にもモンスターがでるからね。気を付けないと食われるわよ」
シェーナはディアスの言葉を無視して言った。
「でぇぇえ！　そんな物騒な湖が何で観光地になってるんだよ！」
「その昔とある英雄が、この辺り一帯にいたモンスターを、中央の島に封印したって話よ。だから湖にいるモンスターは中央の島付近から離れる事ができないみたいだわ。だから漁師は湖で漁ができるみたいだし、付近の村や町も安全なのよ」
「嘘くせぇ」
「私に言われても知らないわよ。とにかく明日出発よ。今日は飛行の魔法を復習しておく事」
「了解」

湖畔の町の朝は濃霧で覆われていた。直ぐ近くにいるシェーナは確認できるが、少し離れた所にある建物は、白いヴェールに覆われはっきりと見えない。
「風の闇の精霊よ。我、重力の束縛を絶ちて、風の翼をまとわん！　ウィンド・ウィング！」
シェーナとディアスが唱えた風の魔法により、濃霧が吹き飛ばされるが、ただかき回しただけに過ぎなかった。それ程濃い。湖周辺に住む人々は、この霧は湖中央の島のせいだと噂しているのが、頷いてしまう程不自然な濃さだ。
飛行の魔法は高度が高ければ高い程魔力を消費する。ディアスの体では二階建ての家程のしか高度が取れなかった。
「これは誤算ね。ここにはアレがいるってのに……」
シェーナは限界高度を飛びながら呟いた。

「アレってなんだ？」
隣に並んで飛んでいるディアスが聞いた。
「アレよ」
シェーナは霧の向こうに現れた塔のような物を指さして言った。
「何だあれ？」
「レイク・サーペント。水の中に住む巨大な蛇よ」
「えええええ！」
シェーナが言うとおり、サーペントとは巨大な蛇で、大きなものでは太さは大人が十人手を繋いで輪を作れる程あり、長さは大きな船を何重にも巻き付く事ができる程ある。湖にいる奴は海にいる奴程大きくはないが、人から見ればどちらも恐るべき大きさだ。
「迂回するわよ」
シェーナが言うより早く、レイク・サーペントがこちらに気づいて向かって来た。
「応戦はしないで。この霧の中ではぐれたらやっかいよ」
そう言ってシェーナはディアスに手を差し伸べた。
「わかった」
ディアスはシェーナの手を掴んだ。
「水の精霊よ。大気に満ちよ。汝が領域を広めるがいい！　フォグ・ボマー！」
シェーナが後方に突き出した手を中心に、爆発するように凄まじい霧が発生した。
「うわっ！」
「手を離さないで。奴らもこの霧じゃ私達を補足できないわ。今の内に突っ切るわよ！」
「奴らって……ひょっとしていっぱいいるのか？」
「うん」
「げっ！」
シェーナとディアスは霧の中を、多数出現した黒い柱のような影を避けながら、島へと向かった。そのために時間がかかり、島に着

く頃には既に霧が晴れていた。
　島から霧の晴れた湖を見ると、不思議な事にあんなにいたレイク・サーペント達の姿が見えない。アレは幻だったのだろうか？
「ここのサーペント達はね、水の中に封印されているの。他の場所にいるサーペントは、まれに陸に上がってくる事もあるんだけど、ここのは封印のために陸に上がって来れない。でも今朝の様に濃い霧が出ている時だけ、姿を現す事ができるの。でも陸には絶対上がれない。なんか悲しいでしょう。この霧は英雄の情けとも言われているわ」
「まるで呪いだな」
「そうね。封印も呪いも言葉が違うだけで、同じような物ね」
　二人はしばらく湖を眺めていたが、ディアスは急に立ち上がると、背後を振り向いた。
「シェーナ。何かいるぞ」
「うん。白い猿よ。爪が長くて大きな目の不気味な猿。でかい割には早いから気をつけて！」
「了解」
　ディアスは剣を抜きながら、自分達の周りを弧を描く様に取り囲んでいる猿達の気配を探った。二十以上いるが、三十より多くはないだろう。
「来るぞ！」
　木々の向こうにいる猿達の気配が高ぶり、頂点に達すると次々と飛びかかってきた。
「ムーンライト・ファランクス！」
　それに合わせてシェーナが唱えておいた魔法を放った。シェーナの手から十数本の光線が出現し、猿達を次々と串刺しにした。
　二メートルはある猿達の死体がドスンドスンと落ちてくる。
「はっ！」
　ディアスは魔法の弾幕を運良く潜り抜けて来た猿を、剣で真っ二つにした。しかし猿達は数の上ではまだ有利だと思い、まるで狂っ

たように次々と襲いかかってくる。
「キィイ！」
猿は細く長い腕の先にある長い爪を、まるで剣の様にディアス目掛けて振るった。
ディアスは早いが無造作に振るわれる爪を受け流し、猿を肩口からばっさりと切り捨てた。
「せぇい！」
返す剣で横から迫り来る猿の頭を切り落とし、真後ろから来る猿を、振り向かず脇を通す様に剣を真後ろに突きだして串刺しにした。
「キィ！」
猿は串刺しにされつつも、ディアスの頭をつぶそうと両手で挟もうとするが、ディアスは剣を抜きつつ身を低くして避け、その場で回転しながら剣を振るった。猿の体は上下に分かれて血を撒き散らし、ディアスはその血しぶきすら避けた。
（何て綺麗に戦うの……）
ディアスの戦いを見たシェーナは、猿から間合いを取りつつ思った。
「アンチ・フィジカル・ディフェンス・ウォール」
シェーナに向かって突っ込んで来た猿達は、いきなり見えない壁に衝突して弾かれた。
「輝き燃えたる炎の精霊よ。天空輝く太陽を模して、我に灼熱の炎球を授けん！　ファイアー・ボール！」
シェーナはその間に呪文を完成させ、炎の玉を放った。そして轟音が森に響き渡り、破壊の爆炎が猿達をバラバラに吹っ飛ばした。
残りの猿達は、わずか数分で群れの大半を殲滅したディアスとシェーナを見て、散り散りに逃げていった。
「ふ～。何なんだあの猿は？　普通じゃないぞ」
普通の猿ならばあんなに爪が長いわけがないし、あんなに凶暴じゃない。
「私に聞かれても困るわ。この島に封じられたモンスターでしょう」

「こんなの封印しないで全部やっつけてくれたらよかったのにな」
「今はそんな事言ったって意味がないわよ。先に行きましょう」
「また来たら面倒だしな。サクッと行って帰ろうぜ」
「そうね。魔晶石は島の中央にある洞窟にあるわ」
地上にぽっかりと空いた洞窟の入り口は、まるで巨大な井戸の様だった。洞窟と言われなかったら、ただの大きな穴だと思うだろう。
「これはどう見ても人の手で作られた穴だな」
ディアスは浮遊の魔法を操り、縦穴をゆっくりと降りつつ言った。
「そうね。まるで錐で突いたようね」
底へ着くと、底よりも少し高い位置に横穴があった。ちなみに底には小さな穴が空いていた。雨水が溜まらないようにするための排水溝なのだろう。横穴を少し行くと、そこにはちょっとした広場になっていた。その広場の中心には周りより一段高い台があり、その台の中央に、複雑な模様と精霊文字で描かれた大きな魔法陣があった。そしてその魔法陣の中央に、子供の頭程ある魔晶石がはめられていて、ぼんやりとした光りを放っている。その大きな魔法陣は複数の小さな魔法陣に囲まれていて、小さな魔法陣にも小さな魔晶石がそれぞれはめられている。丁度シェーナが持っていた魔晶石と同じくらいの大きさだ。
「これって何かの封印の要だろう？」
ディアスは魔法陣と魔晶石を見て言った。
「間違いないわね」
「間違いないわねじゃねぇよ！　魔晶石を取って封印が破れたらどうするんだよ！」
「大丈夫よ。前に取った魔晶石は、周囲に展開している小さな魔法陣にはめられた内の一つだから。こういうのは一度安定したら、ちょっとやそっとじゃ壊れたりしないわ。周囲の魔法陣は、中央の大きな魔法陣の補助的な物ね。……たぶん」
「たぶんじゃねぇぞ！　この事を湖畔の人達に知られてみろ。殺されるぞ！」

「ばれなければいいのよ。それにここにこんな封印がある事すら知らないはずよ」
「そう言う問題じゃないだろう。だいたいシェーナはどうしてこの事を知ってたんだ？」
「それはここに封印を施したのが私の御先祖様だからよ」
「……は？」
「ちょっとした偶然で、倉庫の中の本を読んだらここの事が書いてあったの」
「……で、その本にはなんて書いてあったんだ？」
ディアスはじっとシェーナを見つめて言った。
「……この地に最悪を封じ込めし闇の祭壇あり、何人たりも近寄る事なかれ」
「近寄ってどうする！？」
「だって、ほら……、そんな事書かれたら気になるじゃない？　てへっ」
「てへじゃねぇ！　俺の体でそんな事して誤魔化そうとしても不気味なだけだ！」
「うっ。しまった！」
「シェーナってさ、もしかして天然？」
「なっ！　失礼なっ！　天然じゃないわよ！」
「どうかな……。まぁそんな事はどうでもいい。それで、どうするんだよ？」
「どうでも良くないけど……。まぁいいわ。もちろんもう一個だけもらって行くのよ」
「大丈夫なのか？」
「大丈夫よ。ひょっとしたら封印の威力が弱まるかもしれないけど……。周囲にある魔晶石なら中央にあるのより、遙かに小さいから、影響も小さいはずよ」
「俺は大きさじゃなくて、位置や方位なんかが関係してると思うけどな」

「余計な知識まで身につけちゃって……」
「なんか言ったか？」
「ううん。気にしちゃだめよ。取ったらすぐに逃げるわよ！」
そう言ってシェーナは一番端の魔晶石をナイフでえぐり取り、出口に向かって走りだした。
「あっ！」
ディアスは慌てて後を追う。
「シェーナってさ。トレジャーハンターになれるよ」
「えへへへ。やっぱり？　じゃあ二人してトレジャーハンターにでもなろうか？」
「そいつは面白そうだな」
「なる気ないくせして」
「俺には夢があるからな」

シェーナとディアスは飛行の魔法を唱えると、島の上空へ飛び上がった。
「おい……シェーナ……」
「……うん」
二人は上空から島を見て同じ事を思った。
「島の形、気のせいかもしれないが、膝を抱えて丸くなってる猿に見えないか？」
「……見えるかも」
「あは……あは……あはははは……」
「あはははは……」
二人は乾いた笑いを上げると、目を合わせてうなずいた。
「見なかった事にしよう」
「元に戻るためには仕方ないよね？」
「とは言ってもな……。シェーナ。お前後でちゃんと闇の魔晶石を手に入れて、絶対にあそこにはめに行くんだぞ」
「怖いから嫌！」

「嫌じゃねぇ！」
「じゃあ、ディアスも一緒に来て」
「ああ、一緒に行ってやるよ。と言うか、引きずってでも連れて行く」

湖畔の町のとある宿で、シェーナは闇の魔晶石を使った魂交換の儀式魔法の準備に取りかかっていた。失敗は許されない。邪魔が入らないように、部屋の窓にはカーテンをかけ、ドアには鍵をかけてある。
二人の間には、魔法陣が書かれた布がひいてあり、その上には取ってきた魔晶石が中央に置かれていた。
そして二人の血が落とされた。
「ラモール！」
魔法が発動したと同時に二人は気絶した。
魂の光りがお互いの体に向かって浮遊し、沈むように入っていく。
「う……うん……」
しばらくして目を覚ましたシェーナは身を起こしてディアスを見た。ディアスも首を振りながら身を起こすと、シェーナを見た。
「やった……」
「元に戻った……よな？」
ディアスは一瞬鏡を見ているかと思った。しかしそれは鏡に映った姿ではなく、本物のシェーナだった。
「お帰り。私の体」
シェーナは自分の体を抱きしめた。
「おおおお！」
ディアスはそれを見てやっと実感した。そして歓声を上げるとぐるぐると腕を回し、自分の体を確かめた。
「ディアス……」
気付くとシェーナが目の前にいた。
「私ね。元に戻ったらすぐにでもしたい事があったの」

「へっ？」
シェーナの顔がぐんぐんと近寄って来るのを、ディアスは他人事の様に見ていた。
そしてシェーナはディアスと唇を合わせた。
ディアスは柔らかい感触を感じると共に、甘い香りに鼻孔をくすぐられた。そして気が付くとシェーナを抱きしめていた。シェーナもディアスの背中に手を回して抱きしめ返す。
「うふふ。ねぇ。ドキドキしてるよ」
シェーナは唇を離すと、ディアスの胸板に耳を当てて言った。
ディアスはこの三ヶ月間、鏡に映るシェーナを見てきた。しかしそれはまるで偶像だったかのようだ。今のシェーナは鏡に映っていたシェーナとは比較にならない程美しく、そして可愛かった。ディアスはこのまま抱きしめていたいと言う気持ちが高まってきた。
「シェーナ。これが俺の答えだ」
そう言ってディアスはシェーナの唇を奪った。
「んっ……」
今度は深く長く……
「あはっ……嬉しい……」
シェーナは目を潤ませて呟いた。

朝目が覚めると、シェーナはディアスの腕の中にいた。それが嬉しくてたまらない。
「おはよう」
シェーナが嬉しくてクスクス笑っていると、既に起きていたディアスが声をかけた。
「おはよう。ねぇ、ディアス。私の実家に来てよ」
「いや、やっぱり俺も家に帰るよ。ちょっとしかいれないけど、俺の姿を見せてやりたいんだ」
「……そっか。残念ね。私、夏はこっちにいるわ」
「それがいいさ」

「後期もさ。湖畔の別宅に来ない？　元に戻ってからも剣を習いたいし、ディアスも魔法覚えたいでしょう？」
シェーナは必死になって理由を探した。
「いいぜ。もう一人じゃ寂しいしな」
「うん！」

宿敵達

夏休みが終わり、シャルトン王立学校は後期に入った。
今日は後期登校初日のため、授業は午前中で終わり、シェーナ達は下校の帰りにレストランに寄っていた。
「教室が懐かしかったわ」
シェーナはしみじみに言った。
「ディアスもそう思ったでしょう？」
「そうだな。なんて言うか開放感があったな」
「それって親衛隊からの？」
エリスがクスリと笑って言った。
「それも大きいけど、難し過ぎる魔法の授業からだよ」
「私も汗くさい訓練から解放されてほっとしてるわ」
「なんて言うか、プレッシャーがなくなってほっとするな」
「そうそう！　それよ。言いようのない不安がずっとあったから、それがなくなってストレスからも解放されたわ」
ディアス達が談笑していると、一人の女生徒が近寄ってきた。
「どうやら元に戻れたようね」
その女生徒はフィリアだった。
「なっ！　フィリア！　お前、気付いていたのか！？」
ディアスは驚いた。それは他のみんなも同じだった。
「うん」
「誰にも言ってないわよね？」
「もちろんよ。やばそうな話みたいだし」
「ならいいけど……」
「それより私を医務室まで連れて行ってくれたのは、ディアスだったのね」
フィリアの頬がほんのりと朱に染まった。
「ありがとう」

「気にするな。当たり前の事をしただけだ。それにしても、男嫌いのフィリアが俺に礼を言うのは意外だな」
「それはもうやめたの。あなたが目覚めさせてくれたのよ」
「……はぁ？」
「私、嬉しかった。男の人にあんなに優しくしてもらったのは初めてよ」
「あのーもしもーし……」
シェーナは口を挟もうとしたが、フィリアは構わず話し続けた。
「私、今まで付き合ってきた子達とは別れて来たの。だから私と付き合わない？」
フィリアはみんなの前で堂々と告白した。
「だめよ！　ディアスは私と付き合ってるの！」
「……なっ！」
フィリアにとってそれは盲点だった。シェーナと言えば親衛隊が存在する程のアイドルである。そのアイドルが特定の誰かと付き合うとは思ってもみなかった。
「……考えてみれば体が入れ替わっていたのよね。何かあってもおかしくないか……。でも私は諦めない！」
フィリアは一人で拳を握り締めて盛り上がった。
「シェーナ様！　いえ、シェーナ！　あなたはこれから私の敵よ！」
「はぁ？」
「あなたからディアスを奪ってみせるわ！」
「おい。俺の意思はどうなる？　俺はシェーナが好きだし、付き合ってる。だからフィリアとは付き合えない」
「偉い！」
ディアスがハッキリ言ってくれたので、シェーナは嬉しくなった。
「ふっ……。人の心はいつも揺らいでいるものなのよ。今は無理でもいつか絶対に奪ってあげるわ！」
「……当人達の前で堂々と言い切れるのって、ある意味凄いわね」
エリスにここまで言わせるとは、フィリアはかなりの強者だ。そ

のフィリアはちゃっかりディアス達のテーブルに着いて、近くにいる定員に注文し始めた。
「あ、そうそう。これからあなた達のグループに入るからよろしくね」
「はぁ？　よろしくじゃないわよ！　なんであなたと一緒に行動しなきゃならないのよ！　私の事を敵って言っておきながら矛盾してるわよ！」
「あら、アレは言葉のあやよ。大丈夫。私はシェーナの事も好きだから。なんならシェーナも私と付き合ってみる？」
「冗談！　私はそんな趣味ないの！　あなたってどうしてそんなに奇抜なのかしら！」
「シェーナこそ猫かぶりだったのね。清楚でお淑やかなシェーナ様はどこへ行ったのかしら……？」
「人を見かけで判断したあなたがいけないのよ」
「俺も騙されていたんだがな……」
ディアスがボソっと言うと、クレイがうんうんとうなずいた。
「ほら見なさい」
「ディアス！　どっちの見方なのよ！」
「いや……その……ごめん」
「少なくとも、なりふり構わず大暴れするよりかはましだと思うけど。流石に応援席から落ちたりしないわ」
「そのお陰でディアスに助けられたわ。あぁ……医務室のディアスは優しかったわ」
フィリアはポッと赤くなって頬に手を添えると、フルフルと首を振る。
「おい！　俺は何もしてないぞ！」
「恥ずかしがらなくてもいいのよ」
フィリアは上目遣いにディアスを見つめた。
「むきー！」
とうとうシェーナはフィリアに飛びついた。

「その減らず口を塞いであげるわ！」
シェーナはフィリアの口に指を突っ込むと、左右に引っ張った。
「はっ、はひふふんへふは！　（な、なにするんですか！）」
フィリアもシェーナの口に指を突っ込んで、同じように頬を引っ張った。
「ははへははひ！！　（離しなさい！）」
「ふはへほうひ！　（喰らえ奥義！）」
フィリアは突っ込まれたシェーナの指を舐め始めた。
「ひっ！」
シェーナは驚いて指を引っこ抜く。
「なっ！　何するのよ！」
「それはこっちの台詞だわ。まぁ私はシェーナも好きだからいいけどね」
そう言ってフィリアはシェーナの顔を掴むと、そのままグイッと自分の方へ引き寄せ、唇を重ねようとした。
「このっ！」
しかしシェーナはフィリアの手を振り払って突き返した。
「ゆ、油断も隙もないわね。あなたって！」
「私は騎士希望よ。油断も隙もないわ」
「そう言う意味で言ってるんじゃないわよ！　」
「わかってて言ってるのよ？」
「……！」
シェーナは言いようのない怒りが込みあげて来た。
「私はフィリアを仲間に入れるのは嫌だからね！」

キーンコーンカーンコーン。
予鈴がなると、ディアスは席からすぐに立ち上がり、ベランダへと駆けだした。
二年後期になると、戦術戦略を学ぶ事が多くなり、前期よりも教室での授業が増えていた。

「クレイ。悪いが先に行ってるぞ」
「いつもの事だろ。気にすんな。それより早く行かないと来るぞ！」
ディアスは頷くと、呪文を唱え始めた。
「風の闇の精霊よ。我、重力の束縛を絶ちて、風の翼をまとわん！
ウィンド・ウィング！」
「待ちなさい！」
そこへ隣の教室から、ディアス達の教室に乱入して来たフィリアが叫んだ。
しかしディアスはそれを無視して飛び立った。
「ちっ！　風の聖霊よ……」
フィリアは呪文を唱えつつ教室を横断すると、ディアスと同じく教室から飛び立った。
「なっ！　いつの間に！」
クレイはフィリアが飛行の魔法を使ったのを見て驚いた。フィリアは少し前から魔法に興味持ち始め、魔法を魔道士学部の友達に習っていたようなのだが、もう飛行の魔法を使えるようになるとは驚きだ。ディアスだって飛行の魔法を制御できるようになるには、かなりの時間がかかったのだ。
「はっ……まさか！」
クレイはハッと気が付いて、ベランダに向かって駆けだした。
「ディアース！」
そして声のある限り叫んだ。
「何だ？」
ディアスは振り返ると、ディアスを追って空を飛んできたフィリアが見えた。
「げぇ！　って危ない！」
フィリアはまだ飛行制御がままならない、いきなりバランスを崩して真っ逆さまに落下し、ディアスを追い抜いた。
ディアス達の教室は五階にある。落ちれば命はない。
「何やってんだ！」

ディアスは飛行の魔法を制御して加速すると、フィリアを追って下降した。
（ま、まずい……）
フィリアは混乱していた。何とか制御を安定させようとするが、焦ってしまい上手くいかない。地面はもうを目の前だ。
（もうだめ……）
フィリアは諦め絶望し、目をギュッと閉じた。しかしいつまで経っても激しい激突は起こらなかった。フィリアが恐る恐る目を開けると、目の前にディアスの顔があった。
「この馬鹿野郎！」
ディアスがフィリアに怒鳴った。
ディアスは落下するフィリアに追いつき、フィリアを抱きかかえていた。
「あれ？　生きてる……。あっ！　ディアスがまた助けてくれたのね！　嬉しい！」
フィリアはディアスにしがみつくと、ギュッと抱きしめた。
「わっ！　抱きつくな！　落ちる……」
ディアスは何とかバランスを保ちつつ着地すると、フィリアを離した。
「お前な！　ちゃんと練習もしないで、飛行の魔法なんて使うな！」
「だって……今日こそディアスと一緒にお昼食べたかったのよ」
「……」
ディアスはシェーナが嫌がるので、いつもお昼はフィリアから逃げていたのだった。
「ごめんなさい」
フィリアが涙をにじませて、しおらしく謝ると、ディアスはそれ以上何も言えなくなってしまった。
「とりあえずどうするかな……」
ディアスが困っていると、クレイが走って向かって来た。
「大丈夫か？」

「なんとかな。フィリア。クレイに感謝しろよ。クレイが叫ばなかったら、俺は気付かなかったぞ」
「ありがとう。クレイ」
フィリアはとびっきりの笑顔でお礼を言った。
「お、おう。当たり前の事をしたまでだ。気にすんな」
クレイはちょっと赤くなった。
「クレイ。フィリアがお昼一緒に食べようってさ」
「良いんじゃないか？　毎日こんなんじゃ危なくてしょうがないぞ」
「……だよなぁ」
二人は毎日起こるフィリアの常識外れの行動に圧倒されていた。
まさかディアスを追うために飛行の魔法を覚えるとは思いもしなかった。
「とりあえずシェーナを説得するか……」
「シェーナかぁ。……怒るぞ。あいつの焼き餅凄いからなぁ」
「だよな……」
二人は気が重くなって肩を落とした。

「ファイア・ジャベリン！」
シェーナはディアス達と一緒に来たフィリアを見るなり、いきなりフィリア目掛けて炎の槍を放った。ここは町中なのに！
「きゃあっ！」
「えっ！」
「まじか！」
ディアス達はとっさに飛び散って避けた。
昼飯時の飲食街に、突如凄まじい爆音が響き渡った。
「何考えてるのよ！」
フィリアが怒って怒鳴った。当たり前である。
「いい加減ディアスを諦めなさい！」
「あなたは諦めろって言われたら、諦めるの？」
「私は良いのよ。ディアスは私のモノなの。だから諦める必要なん

てないんだから」
「私も諦める必要なんてないわ。ディアスはこれから私のモノになるんだから」
シェーナとフィリアはしばし睨み合った。
どうしてどこへ行っても敵がいるのだろうか？　ちょっと前まではサラが何かとちょっかいかけてきた。前期トーナメント以来、サラはちょっと友好的になったと思えば、今度はフィリアだ。しかもフィリアは別の意味でサラの何倍もたちが悪い。
ディアスは先ほどの事件をシェーナ達に伝えた。そして今後同じ様な事が起きたら大変なので、フィリアも一緒に行動させてあげようと言う話しになった。
「えっ……だって……」
シェーナは困った顔をしてディアスを見た。
ディアスも困った顔をしていたので、シェーナは更に困ってしまった。
ディアスは本当に自分の事を愛してくれているのだろうか？　そんな不安がシェーナの心を締め付けた。本当に好きならばもっとビシッとフィリアを断って欲しい。しかし相手がフィリアだと、なかなかそうはいかない。諦めると言う事を知らないフィリアは、何を言ってものらりくらりとかわして我が道を突き進むからだ。だから今回の様な事件が起きる。
「……わかったわ。これじゃ私が悪者だもんね……」
「ありがとう！　あぁ……憧れのシェーナとお友達になれるなんて夢のよう」
「言っとくけど。私はそっちの趣味ないからね」
「なら教えてあげましょうか？」
「結構！」
フィリアは帰り道も付いてきた。
「じゃ、私こっちだから」

そう言ってエリスとクレイが最初に別れた。クレイは方向が違うのだが、エリスとどこか寄って行くのだろう。続いてシェーナが別れる事になった。シェーナは最後にディアスとフィリアが残る事に心配になったが、ディアスの家はすぐそこだ。大丈夫だろう。

「俺の家はここだ。フィリアの家はどっちなんだ？」

「あっちよ」

そう言ってフィリアが指さしたのは真後ろだった。

「おいおい。何でここまで来たんだよ」

「何ってディアスの家に遊びに行くためよ」

「待て待て。俺はこれから用事があるんだ」

「どんな用事？」

「シェーナに剣の稽古を付ける事になってる」

「なんだ。そんなことなの。ならちょと休憩してからでいいじゃない。家に上げてよ」

「う、そりゃそうだが、男の家にほいほい上がるもんじゃないぞ」

「あら、私は何されてもかまわないわよ？　むしろして欲しいんだけど？」

「おいっ！」

「何赤くなってるのかしら？　可愛いわね。冗談よ。お茶の一杯くらい入れてよ。そしたら帰るから」

「……お茶の一杯だけだぞ」

シェーナは家に帰るとディアスの事が気になって気になって仕方がなかった。早く会いたい。この後剣の稽古を付けてもらう事になっている。だからディアスは別宅に来るはずだ。フィリアと何かあるはずがない。それでもシェーナは胸騒ぎがして、すぐに湖畔の別宅に行くことにした。

しかしあちこち探してもディアスがいない。まだ来ていないようだ。だからシェーナは別宅からディアスの家へと飛んだ。

「はぁ……美味しい」
フィリアは本当にお茶を飲むだけで大人しかった。それがディアスの油断を誘っていた事など、当のディアスは全く気づいていなかった。
「じゃあ、帰るわね。ちょっと上着取ってくれる？」
フィリアは椅子から立ち上がると言った。
ディアスは壁の洋服掛けに引っ掛けてあるフィリアの上着を取り、フィリアに上着を渡そうと近寄った。
（隙あり！）
フィリアはディアスの足を引っかけると押し倒した。
「うあっ！」
たまらずディアスは声を上げて仰向けに倒れた。
フィリアは素早くディアスの両手を掴み、体重をかけつつ押さえ込んだ。
ディアスは反射的にフィリアを蹴り上げようとしたが、相手が女である事に気がついて押し留まった。
「そうよね。女の子のお腹を蹴るなんてできないわよね」
「な、何をする！」
「決まってるじゃない」
フィリアはそう言ってディアスに顔を近づけて行った。

何かが倒れる音がして、ディアスの声が聞こえた。
シェーナが駆けつけてみると、ディアスがフィリアに組み伏せられているではないか。
「シェーナ。助け……」
ディアスがシェーナに気を取られた瞬間。フィリアはディアスを押さえていた手を離すと、ディアスの顔を手で挟んで正面を向かし、狙いをすませて唇を重ねた。
「あああああああああああああああ！」
それを見たシェーナが叫んだ。

「このっ！」
シェーナはフィリアに飛びつくと、ディアスからフィリアをはがした。そしてフィリアの頬に平手打ちをかまそうとしたが、体術に優れたフィリアに避けられてしまった。
胸騒ぎがしたと思ったらこれだ。シェーナは泣きたくなった。いや、もう涙がにじみ出ている。
「出てけぇ！　もう……出てってよ！」
シェーナは泣きながら叫んだ。
いくらフィリアでもこれには驚いた。
「その……ごめんなさい……」
フィリアは上着を拾うと、逃げるようにディアスの家を出ていった。
「シェーナ……すまない」
ディアスは泣いてるシェーナの前に立った。肩に手を置こうとしたが、さっきフィリアに唇を奪われた後ろめたさに手を置くことができない。
パンッ！
シェーナはディアスの頬に平手を入れると抱きしめた。こうしているとディアスを独占できて安心する。しかし今はそれでも安心できなかった。
「ディアス。私の事好き？」
「好きだ」
「じゃあ、愛してるって言って」
「愛してる」
ディアスはちょっと恥ずかしそうに言った。
シェーナはちょっと安心した。ここで何の動揺もなく普通に愛してると言われても、信用できなかっただろう。それはまだ二人の恋が未熟な証だった。
「じゃあ、キスして」
シェーナが唇を求めると、ディアスはそれに答えた。

「フィリアのキスなんて忘れさせてやるわ」
シェーナはディアスの愛に飢えていた。むさぼるようにディアスを求めた。

次の日からフィリアは大人しくなった。必要以上にディアスに近寄らなくなったのだ。これは彼女なりのけじめだった。
フィリアはシェーナに泣かれてから、自分を見つめ直した。
自分は今まで複数の女性と付き合ってきた。それは自分が男に興味を抱かなかった反動でもある。それだけにどれも本気の恋ではなかった。フィリアはシェーナの事も、ディアスの事も、今まで付き合ってきた女性達と同じように考えていた。しかしそれは間違っていた。シェーナは本気でディアスを愛している。ディアスも本気でシェーナを愛している。それを自分は遊び半分でちょっかいを出しては、二人の仲を邪魔していたのだ。
実際フィリアはディアスの事は尊敬していたし好きだった。しかし今にしてみればその感情は、今まで付き合ってきた女性達と同じく、本気で愛しているわけではなかったのだ。もちろんシェーナに対しても同じだった。
自分はやってはいけない事をしてしまった。しかもシェーナの目の前で。だからシェーナに嫌われてしまった。相当自分を怒っているだろう。もしかしたら憎んでいるかもしれない。そう思うと胸が苦しくなる。

そして次の日の朝、フィリアがシェーナに挨拶しても返事は帰ってこなかった。
フィリアは後悔した。調子に乗ってあんなに事しなかったら、フィリアはディアス達の中に十分入っていけたはずだ。いや、まだだ。過去形にはしたくない。過ちを犯したのならば、正せばいいのだ。もう同じ過ちを犯さない。償いもしよう。それでも許されないのならば、仕方がない。フィリアはそう思うと、早速行動に出た。

昼休みにディアス達は、いつもの様に飲食街へ行くために待ち合わせていた。
いつもは昼休みの予鈴が鳴ると、ディアスを追いかけるために、フィリアが教室へ乱入して来るのだが、昨日の事もあってフィリアは現れなかった。
「行きましょう」
シェーナは遅れて来たディアスとクレイが来ると言った。フィリアを待つ気はない。
（嫌な女……）
シェーナはそんな冷たい自分に自己嫌悪した。
「待って……」
そこへ四人揃ったのを待っていたかのように、フィリアが現れた。
フィリアはシェーナの前まで来ると、両膝を地に着けた。
「なっ！？」
シェーナはフィリアの行動に驚いた。フィリアは子爵と爵位は低いが、代々王宮に勤める騎士家の長女である。フィリアが膝を折るのは王のみであるはずだ。しかも公道という公の場で、フィリアはシェーナに膝を折ったのだ。
「ちょ、ちょっと何をしているのよ！　立って！　早く！」
「私は過ちを犯しました。だから私は裁かれなくてはなりません。私は誓います。もう貴方の邪魔はしません。どうしても許せないのならば私はシャルトンを去ります。しかし……しかしもし許されるのならば、この剣をお取り下さい」
フィリアは腰から剣を鞘ごと外すと、両手で剣を掲げて頭を垂れた。
「……」
シェーナは困った。本気で困った。フィリアは本気で後悔して、過ちを悔い改めようとしている。それはフィリアの行動を見ていれば明らかだった。それさえわかれば良かった。安心できる保証され

得られれば良かったのだ。しかし流石フィリアと言うところだろうか。彼女の行動はシェーナの想像を遙かに超えていた。これでは行き過ぎて、フィリアはシェーナに忠誠を誓う事になってしまう。
「ちょっと、フィリア。気持ちはわかったから、もういいから。やめて」
しかしフィリアは微動だにしない。むき出しの両膝が地面に突き立てられて痛々しい。
シェーナは困ってディアスを見たが、こればっかりはディアスもお手上げだった。首を横に振って、俺にはどうしようもできないと意思表示した。
（あーもー。何で次から次へと事件が起こるのよ！）
周りを取り囲んでいる生徒達は、シェーナの反応に期待している。
（えーい！　成るようになれ！）
シェーナはフィリアの剣を取った。
確か実家で読んだ本によると、この後王は、剣を鞘から引き抜き、剣の平で相手の肩を叩き、忠誠を誓った騎士を叙勲していた気がする。しかしそんな行動が許されるのは王のみだ。
シェーナがこの後どうすれば良いか戸惑っていると、エリスがフィリアの隣にしゃがみ込んで小声でつぶやいた。
「例え真似事とは言っても、叙勲の儀式を資格もない者が行うのは良くないわ。ここは公道なのよ。シェーナに悪い噂が立つわ。ここは私に任せなさい」
フィリアはハッとして頷いた。
「はいはい、ごっこ遊びはそこまでよ。シェーナ。剣を返してあげて」
シェーナは助け船が出てホッとした。
「フィリア、立って」
シェーナの声があって、初めてフィリアは立ち上がった。
「剣、返すわよ。フィリアも反省したみたいだし、昨日の事はもういいから」

「ごめんなさい」
「もう。こんなのやめてよね」
「けじめはつけないといけません。私はこれから貴方の剣となり盾となります」
「そう言うことは恥ずかしいからいいわよ。なんでこう……あなたって普通じゃないのかしら。忠誠とかそんなのいらないから、普通に友達でいて」
「シェーナ大好き！」
それを聞くと、フィリアがシェーナに飛びついた。
「わっ！　ちょっと！」
「ん～」
フィリアはまたまた調子に乗って頬ずりまでしていた。
「やめなさいって！　だからあなたは普通じゃないのよ。ちょっと、みんな見てるでしょう。ディアス達も見とれてないで……助けて……」
助けの手はディアス達でなく、別の所からやってきた。いや、これは助けの手と言うよりも、次の騒ぎの火種だった。
「そこの変態！　シェーナ様から離れなさい！」
その声はシェーナ様親衛隊だった。
五人の親衛隊は、弧を描く様にフィリアを取り囲んだ。
「ふっ。出てきたわね。馬鹿集団が」
「フィリアは人のこと言えないわ」
エリスが言うと、ディアス達だけでなく、周りの生徒達もうなずいた。
「あなたの行動は逸脱しています。抜け駆けも甚だしいわ。シェーナ様に近寄るのならば、親衛隊に入って、節度を守りなさい！」
「はぁ！？　ばっかじゃないの？　抜け駆け？　節度？　なんでそんな事をあなた達に許可されなければならないの？　一人で行動する勇気がないから群れてるだけじゃない。それにもう男がいる女を追っかけ回すなんてやっぱり馬鹿ね！」

（お前が言うな！）
ディアス達を含め、周りの全ての生徒が心の中で総突っ込みした。
「シェーナ様は騙されているんです」
「とんだ馬鹿共ね。シェーナの邪魔をする者はこの私が排除するわ。かかって来なさい！」
「面白くなって来たわね。私も手伝うわよ」
エリスはそう言ってフィリアの隣で呪文を唱え始めた。
「やれやれ、エリスの暴走を止められるのは俺だけだな」
クレイもそう言ってエリスの隣へ並んだ。
これには親衛隊の五人は尻込みした。まさか反対に攻撃されるとは思ってもみなかった。
「いい加減にしなさい！」
シェーナが怒鳴った。
「校内での私闘は禁じられているはずよ。それに……お昼休みなくなるわよ？」
鶴の一声だった。お昼を飲食街で過ごそうと思っている者にとって、時間は貴重である。グズグズしていたらゆっくりと御飯を食べられない。野次馬の生徒達も親衛隊達も、我先にと飲食街へと流れて行った。
「私達も行くわよ」
シェーナはため息をつくと、みんなを促した。

その日の放課後、人のいなくなった教室に、十人程の女生徒が集まっていた。シェーナ様親衛隊の主要メンバー達だ。
「シェーナ様は変わられてしまいましたわ」
「以前はお上品な言葉使いでしたのに、最近粗暴になっておられます」
「言葉使いだけでなくてよ。仕草も乱暴になってますわ」
「それもこれも、あのディアス達のせいよ」
「あの方達と付き合っていては、シェーナ様のためにならないわ」

彼女らの意見は自分勝手で都合の良い言い草ばかりだ。
「シェーナ様のお友達になった気でいるディアス達に制裁を！」
「でもどうやって排除するのですか？　相手はあのディアスやフィリアですよ？」
「私達親衛隊の人数は全学年の生徒を合わせて百三十四人います。多勢でかかればいくらなんでも倒せるのではなくて？」
「召集をかけましょう！」
「我らにシェーナ様の愛を！　邪魔者には制裁を！　裏切り者に死を！」
親衛隊達は円陣を組んで手を中心で合わせると、声を揃えて親衛隊の心得を唱えた。

ディアスは夕飯の材料を買いに商店街へ来ていた。今日の食事当番はディアスなのだ。
買い物の帰り道に、ディアスは複数の気配を感じた。その気配達はバラバラに動いているが、どれもディアスの後をつけている。
ディアスは口元を笑みの形に歪ませると、近くの公園へと向かった。街の中では思いっきり戦えないからだ。
ディアスは食材が入った紙袋を公園のゴミ箱に入れた。捨てるわけではない。鉄でできたゴミ箱なら、例え魔法が飛び交っても、中の食材を守ってくれると考えたからだ。
ディアスが公園の中央へ辿り着くと、わらわらと覆面をした者達が現れ、ディアスを取り囲んだ。驚いた事に全員女性で、その数は約三十人程だ。
「親衛隊か。いつかは来ると思ってたよ」
ディアスの予想通り、彼女らはシェーナ様親衛隊だ。
「ディアス。貴様を粛正する！」
リーダ格の女生徒が剣を抜きながら叫ぶと、他の親衛隊達も剣を抜き、杖を取った。
「おもしれぇ！　やってやる！　ウィンド・ウィング！」

ディアスは何も準備せずにここまで親衛隊達をおびき出したわけではなかった。短縮魔法をため込んでいたのだ。
風がディアスを取り巻き、ディアスは飛び上がった。
「ライトニング・ブラスト！」
「きゃぁあ！」
ディアスは空中から稲妻を放った。雷光が閃き女生徒が痺れてのたうちまわる。威力を弱めてあるので、しばらく身動きできなくなるだけだろう。
空を飛ぶディアスに向かって、親衛隊の魔道士達が次々と攻撃魔法を放った。
ディアスは巧みに飛行魔法を操って魔法を避け、そして剣を持った親衛隊達の元へと飛び降りた。夢中で魔法を放っていた親衛隊達が、止まらず仲間の元へ魔法を撃ってしまった。
混乱が起き、親衛隊達の動きが鈍る。
ディアスは味方からの攻撃に動揺した親衛隊達に向かって剣の平で斬りかかった。あっと言う間に親衛隊達を気絶させると、魔法を放っていた親衛隊達に手を向ける。
「エアストリーム！」
ディアスは親衛隊達に突風を浴びせて動きを止めると、一気に間合いを詰め、一人一人気絶させていった。
「これだけいてこんなもんか……」
ディアスは嘆息すると、倒れている女生徒達を見た。このままだと何かと危ない。ディアスはゴミ箱から食材を入った紙袋を拾うと、衛兵を呼びに公園を後にした。

次の日の朝、ディアスは教室に入ると、親衛隊に襲われた事をクレイに話した。
「やっぱりディアスも襲われたのか！」
どうやらクレイも襲われたらしい。
「クレイもか。ならエリスとフィリアも襲われたと考えた方が良い

な」
「エリスは大丈夫なんだろうか……」
クレイは胸が不安でいっぱいになった。
教室の扉が勢いよく開いて、フィリアが入って来た。
「昨日あの馬鹿共に襲われなかった？」
「やっぱりみんな襲われたのか……」
「エリスが心配だ」
エリスは優等生の部類に入る。しかしそれは防御や治癒魔法に秀でるからであって、攻撃魔法はあまり得意ではない。もしディアスを襲った数と同じくらいの人数で襲われたら、勝てるかどうかわからない。いや、逃げるだけで精一杯からもしれない。
「この事をシェーナは知ってるの？」
「いや、まだ襲われた事は言ってない。てっきり俺だけかと思ったよ。俺が狙われる理由は十分あるしな。俺だけなら問題なかったんだが……」
「ディアスはシェーナと付き合ってるものね。やっかいな事になったわね。もしエリスに何かあったら、シェーナがどんな思いをするか……」
シェーナの親衛隊達が武装してエリスをどうにかしたかもしれない。その事をシェーナが知れば、親衛隊達を野放しにしていた自分を責めるだろう。

「クレイ。エリスが今日休みみたいなんだけど、何か聞いていない？」
昼休みにいつもの待ち合わせ場所に行くとエリスはいなかった。
「エリス、今日は風邪で休むってさ」
クレイは青ざめた顔をしてシェーナに言った。もしエリスがいなかったら、シェーナには黙っておこうと内合わせしていたのだ。
「おかしいわね。休むなら通信魔法で先生に一報入れるはずなのに……」

「余程具合が悪かったんだろう」
「寝込んでいるなら仕方ないんじゃない？」
「学校終わったら見舞いに行ってくるよ」
「あ、私も行く」
「……そうだな。みんなで行こうな」
何とかシェーナをごまかせたが、これで放課後までにエリスを助け出さなくてはならくなった。
ディアスが教室に戻ってくると、机の上に一枚の紙が置いてあった。ディアスはその紙に飛びついた。そこには予想通り親衛隊達からのメッセージが書かれていた。
その紙には、私達はお前の友人エリスを捕まえている。エリスを返して欲しければ、放課後指定された場所に来るようにと書かれていた。もちろんこの事をシェーナや先生に言えば、エリスは無事は保証できないとあった。
「おい！　ディアス！」
クレイの方を見ると、クレイも同じ紙を持ていた。
「ディアス！　クレイ！」
フィリアも同じ紙を持って、教室へ飛び込んで来た。
三人は頷き合うと、ひとまず自分の席へと戻った。

ディアスはシェーナのクラスメイトに伝言を頼んだ。今日は用事ができたから一緒にお見舞いにいけなくなったと。見舞いよりも大事な用事を考えなければならないが、そんな事は後で苦労すればいい。今はシェーナに内緒でエリスを救い出す方が大事だ。
そして放課後、ディアス達はヴェールにある大きな公園に向かった。
ヴェールの端の方にある公園には人の姿がなかった。親衛隊が人払いをしたのだろう。公園の中央まで来ると、そこには親衛隊が十人集まっていた。
「エリス！」

クレイが叫んだ。
エリスは親衛隊達に捕まっていた。魔法が使えないように猿ぐつわをかまされて、手足は縛られている。
「くそう！　なんだってんだよ！　俺達を襲ってどうするつもりだ！」
クレイが切れて叫んだ。
「私達の望みはただ一つ。あなた達がシャルトンを去る事よ」
リーダー格の女生徒が言うと、エリスの脇にいた女生徒が、エリスの顔にナイフを突きつけた。
「ひっ！」
ひんやりした感触に、エリスが小さく悲鳴を上げる。
「あなた達は邪魔なのよ。あなた達のせいでシェーナ様はおかしくなられたわ」
「はぁ？　妬みも大概にしろよ！　てめぇらエリスを傷つけてみろ。生きて返さないぞ！」
クレイが怒気を叩きつけると、リーダー格の女生徒が手を挙げた。すると公園のあちこちから親衛隊達が現れ、ディアス達を取り囲んだ。その数約八十人。どうやら殆どの親衛隊達は、人質を取ってまでディアス達を排除したいと思っているようだ。
しかしディアスはシャルトンをやめる訳にはいかない。でもエリスを傷つけられるわけにもいかない。
「あなた達！　いったい何をしているの！」
ディアス達がどうやって事を治めるかを考えていると、シェーナの声がした。
「シェーナ様！」
親衛隊達は悲鳴の様な声で、シェーナの名を呼んだ。そしてその横にいる人物に視線が集中した。そこにはシャルトンの先生ゲイルがいた。魔法学部の先生で、誰もが注目している人物の内の一人だ。
「こいつはどういう事だ？」
ゲイルが親衛隊達を見回して言った。

思いも寄らないシェーナとゲイルの登場に、親衛隊達の頭の中が真っ白になった。
実を言うと、シェーナにこの事件を知らせたのは、親衛隊の一人だった。彼女は確かにシェーナに憧れているが、エリスを人質に取って、ディアス達に脅迫する程狂ってはいなかった。そして仲間達の行動に恐怖して、シェーナとゲイルに相談を持ちかけたのだ。
突如親衛隊の一人が逃げ出した。それをきっかけに親衛隊達は、蜘蛛の子を散らすようにわっと逃げ出した。
残されたのはエリスを捕まえている二人だったが、二人はエリスを放すと、その場に崩れ落ちた。もう逃げられないとわかったからだ。良くて停学、悪くて退学になるだろう。
「エリス！」
クレイは弾かれた様に飛び出すと、エリスの猿ぐつわを外し、縛られた手足を解放した。
「クレイィィ」
エリスはひしっとクレイに抱きつくと泣き始めた。
「クレイ！　クレイ！　怖かったよぉ！」
「もう大丈夫だ」
シェーナはエリスの前に来ると、身を折って頭を下げた。
「ごめんなさい。エリス。私があいつらを野放しにしていたために、こんな事に……」
「ううん。シェーナは悪くないよ。悪いのはあの馬鹿達なんだから」
「でも……」
「どうしても気になるっていうなら、お昼十食分おごってくれたらそれでチャラでいいよ」
「……へっ？」
シェーナはキョトンとして目を丸くした。
「儲かっちゃった」
エリスは努めて明るく言った。相当無理しているのは明らかだ。しかしそれがエリスなのだ。どんな事があろうと、無理してでも明

るく努め、空元気でも元気に振る舞う。
「エリスらしいわね。いいわよ」
シェーナは泣き笑いを浮かべて言った。
「ふふふ。高い店行くわよ」
「ちょっと待て！　お昼なら一緒に行く俺達はどうなる！？」
クレイが慌てて言った。
「もちろん自腹！」
「普通の所を要求する！」
「え～！　せっかくただ飯食えるのよ。高い所行くに決まってるでしょ」
「ただなのはエリスだけだ！」
「いいわよ。みんなにも迷惑かけた事だし、みんなにおごるわ」
「おぉ！　流石は伯爵令嬢だなぁ。どこかの田舎貴族とは大違いだ」
クレイがエリスに合わせて明るく言う。
「どこかのって誰の事だよ」
「ディアス！」
クレイとエリスが口を揃えた。
「くっ……。同郷のくせによく言うぜ」
「私達は一般人だからいいのよ」
「そうだそうだ。悔しかったらおごってみろ！」
「絶対嫌だ！」
「盛り上がってる所すまないが、事情聴取するから、みんな来い」
ゲイルが言うと五人はげっそりと肩を落とした。
八十人程の親衛隊達は、訓告処分となり、主犯格の十人は停学となった。さすがに八十人も退学にしたら、大問題となるからだ。公式発表は親衛隊内部の抗争による騒乱罪。エリスの事は一言も公には出てこなかった。エリスも誘拐されたと公表されなくてホッとした。こんな事で目立ちたくない。
後期の試験は早い。年度末ではく、年末の冬休み前に行うからだ。

理由は簡単。年度末にはシャルトン王立学校の入学試験があるからだ。
元に戻ったディアスとシェーナは、本試験である予選は難なく好成績を収めた。特に前回さんざんな成績のディアスは、油断していた相手を全て一瞬の内に倒している。そしてディアス完全復活の噂が広まり、トーナメントは興奮に包まれた。
ディアスの快進撃は準決勝でフィリアと当たるまで続いた。
「ふっ。やはりあなたを止めるのは私しかいないようね」
武舞台の上でフィリアは剣を抜きつつ言った。
「ジェスターもいると思うぞ」
「そんな事は聞きたくないわ」
「……」
「ディアスに対抗するために覚えた魔法を見せてあげるわ！」
「そいつは楽しみだ」
ディアスは段々とトーナメントが物足りなくなっていた。日々の練習でも実力を全て出し切れる相手がいない。これでは自分の本当の実力がわからない。シェーナに稽古をつけているが、魔法の方は張り合いがあっても、剣の方はやはり物足りない。だがフィリアの剣はディアスとほぼ同等だ。
「ディアス対フィリア……始め！」
試合開始と同時にフィリアは後退した。後の先を得意とするフィリアは自分から手を出さない。そして間合いを開けるのは、呪文を唱える時間を稼ぐためでもあった。
「光の精霊よ。天空より御下りて我が剣に宿れ！　スカイ・レイ・ソード！」
「水の精霊よ。凍える息吹よ。我に集いて刃となれ！　アイス・ファルシオン！」
ディアスの剣が光りに包まれ、フィリアの剣が冷気を吹き出し、周囲にダイアモンドダストを振りまく。
ディアスは間合いを取りつつ、フィリアの口元と左腕に付けてい

る腕輪を見た。フィリアは魔法をため込んでいる。短縮魔法を使えるようだ。
ディアスは間合いをつめつつ、対抗するための呪文を唱えた。
そしてディアスは間合い入るなり、剣をフィリアの頭上へと振り下ろと見せかけて、袈裟懸けに剣を振り下ろす。
しかしフィリアは当たり前のようにディアスの斬撃を避け、ディアスが返す剣で切り上げた斬撃も受け止める。剣と剣が激突した瞬間、高熱の光刃と超低温の氷刃の温度差のせいで、小さな水蒸気爆発が起こった。
フィリアは受け止めた剣を戻すと、ディアスの銅を狙って横薙ぎに剣を振るう。
しかしディアスは後ろに飛んで避ける。
「アイス・ジャベリン！」
フィリアが氷の槍を放ち、まるで錐の様な氷柱がディアスに迫る。
「うおっ！」
ディアスはまるで鋭い突きのような氷の槍を、上半身をひねって避けた。
フィリアは剣士らしく、魔法をまるで斬撃のように使った。短縮魔法は手数を増やし、間合いの外へ相手が離れても追撃するためのものだ。フィリアはシェーナとはまるで違う使い方をする。むしろディアスの戦い方に似ている。
（面白い！）
ディアスは口元を笑みで歪めると、剣を握り直した。
本来フィリアの様な後の先を得意とする相手には、遠距離魔法を撃って、じれた相手が間合いをつめて来た所に、こちらが後の先を取り、相手のペースを乱すのがもっとも有効な手段だが、ディアスはあえて自分から間合いを詰めて行った。相手の領域で勝ってこそ面白い。
まるで疾風の様に間合いを詰めたディアスは、徐々に剣速を早めつつ斬撃を繰り出した。初めはわざと剣速を落として振るう事で、

次の斬撃を振るった時に、相手の対応を鈍らせるためだ。しかしフィリアはそんな小細工が通じるような相手ではなかった。ディアスの斬撃を弾き、受け流し、そして避ける。ディアスとフィリアの剣が激突する度に、花火のように水蒸気爆発が起こり、辺りは霧が出たようになった。

フィリアはこの時を待っていた。ディアスの剣を押し返すと、一気に間合いを取る。

「フリジット・ブリット！」

フィリアが放った超低温の冷気の塊は、辺りの水蒸気を巻き込んで、周りの空間その物を凍らせつつ迫った。放ったのは中級魔法だが、威力は上級魔法に匹敵する。

「ウォーター・レジスト！」

しかしディアスはフィリアが使う魔法から推測し、すでに対水防御障壁を用意していた。

冷気の塊は、まるでディアスを避けるように、途中で軌道を変えた。

「これならどう？　ライトニング・ブラスト！」

フィリアは凍れる空間目掛けて、電撃波を放った。無数に枝別れた稲妻が、水蒸気を伝いつつ四方からディアスに迫る。

「ウィンド・トルネイド！」

ディアスは竜巻を発生させる魔法を放った。竜巻はディアスを中心に渦を巻き、水蒸気を吹き飛ばした。そしてディアスは竜巻が収まると同時に間合いを詰める。

「はっ！」

「やぁっ！」

二人は間合いをつまると、お互いに高速の斬撃を繰り出した。

二人は激しく立ち位置を変え、まるで二重螺旋のロンドのようだ。しかしそのロンドも長くは続かない。最初にステップを踏み外したのはディアスだった。勝機と見たフィリアが、勝負を決めるために必殺の一撃を放つ。しかしそれはディアスの誘いだった。ほんの少

しだが、大きく振るってしまったフィリアの隙を見逃さず、ディアスはフィリアの斬撃を着け流しつつ、すれ違いざまにフィリアの銅を薙ぎ払った。
「そんな……」
フィリアの変色障壁が真っ赤になり、フィリアは敗北を知った。
審判が勝者の名を上げ、闘技場が完成に包まれる。
「何で毎回毎回勝てないのよ！」
いきなりフィリアが叫んだ。
「何かが……何かが足りないのよ！　はっ！　そうよ。私になくて、ディアスにある物……。それはシェーナの愛！」
「……は？」
「愛の力は偉大だわ！」
「もしもーし？」
「こうなったら私も一線越えるしかないわ！」
「おいこら。どうしてそうなるんだ！？」
「ふっ。そうとわかればこうしてはいられないわ。計画を練らないと……」
「人の話を聞け！」
「聞いてるわよ。シェーナはディアスには手を出すと怒るわ。でもシェーナ自信に手を出す事に関しては何も問題ないわ！」
「俺が怒る！」
「シェーナを落とした後ならあなたも……。うふふふ。三人で愛し合えば何も問題はないわ。みんなで幸せになりましょうよ」
「……フィリアって本当に自分本位だな。それに剣の腕とは関係ないぞ」
「精神的に関係してくるのよ。と言うことで私はシェーナを探してくる！」
そう言うとフィリアは武舞台を走り去って行った。
「……ダメだ。未だにあいつの事は分からん……」
ディアスはどっと疲れが出た。

そして遂に決勝。前期では果たせなかったジェスターとの戦いである。
ジェスターはディアスと向かい合い、常に感じるディアスの威圧感に歓喜した。これだ。こうでなくては面白くない。ジェスターもディアスと同じく強者に餓えていた。
「ディアス対ジェスター……始め！」
「火の精霊よ。我に集いて破壊の焦熱となれ！　ファイア・ブランド！」
ジェスターは魔法を使い始めたディアスに対抗するために、トレイシアに魔法を習っていた。そしてその成果を見せる時が来た。しかしディアスは解呪の魔法を唱えると、ジェスターの剣にかかった炎の魔法を消し去った。
「お前とは剣一本で戦いたい」
そう言ってディアスは剣を正眼に構えた。
「……ふっ」
ジェスターは苦笑すると、剣を下段に構えた。
今までディアスのために魔法を覚えてきたと言うのに、これでは意味がないではないか。いや、意味はある。今のジェスターは依然と較べ物にならない程強くなっている。
ディアスとジェスターはジリジリと間合いを詰めていく。お互い相手の足、腕、肩、腰、そして目を見て、どう動くか探り合い、隙をうかがう。
その間にも二人は正眼、上段、下段を始めとした様々構えを流れるように変え、時には相手に会わせ、時には相手の出方を封じ、時には相手を誘う。
短くも長い時間が流れ、いきなりジェスターに大きな隙ができた。明らかに誘いである。しかしディアスはあえてその誘いに乗った。
「はっ！」
ディアスは稲妻のような斬撃を袈裟懸けに振り下ろした。

ジェスターは待っていたかのように剣を斜めに傾け、ディアスの剣を受け流す。
甲高い音が鳴り響き、火花が飛び散る。
しかしディアスも最初の一撃は様子見であり、本気の一撃ではない。流れきる前にすぐさま剣を引き、その場で回転するように横薙ぎに剣を振るった。
銀の軌跡が空を切り、風切り音が剣に続く。
「ちぃ」
後の先を取ろうとして失敗したジェスターは、舌打ちしつつ後ろに飛び、横薙の斬撃を避ける。
しかしディアスの斬撃は一撃で止まらなかった。強引に遠心力の乗った横薙ぎを切り返しつつ、更に一歩踏み込む。
ジェスターは意表を突かれたが、それでも難なくディアスの斬撃を受け止める。
またしても激しい火花が二人の間で飛び散る。
ディアスは受け止められるのを読んでいたのか、剣を跳ね上げ、すぐさま唐竹に剣を振り下ろす。
ジェスターは横に避けつつ、横凪の斬撃をディアスに打ち込んだ。
銀の光が弧を描き、ディアス目掛けて疾風となって襲いかかる。
ディアスは迫り来る銀の刃をしゃがんで避けつつ、ジェスターの足を狙って、地面を滑るような斬撃を放つ。
しかしジェスターは銀の刃を後ろに飛んで避ける。
ディアスはしゃがんだために体勢が低い。
勝機と見たジェスターは、剣先をディアスに向けつつ剣を体の脇に引き、低い体勢のディアスに向かって、矢の様な鋭い突きを放った。
しかしこの時ディアスは、体勢が低いながらも剣を下段に構え、後の先を狙っていた。
ディアスは紙一重でジェスターの突きを避け、足をバネを使って立ち上がりつつ、剣を水平に振るい、ジェスターの脇を駆け抜けた。

まさか突きを避けつつ横薙ぎの斬撃を放つとは思わなかったジェスターは、ディアスの斬撃をまともに受けてしまった。しかし無理な体勢からの一撃は、変色障壁は黄色の染めただけだった。もし実戦でジェスターが鎧を身に着けていれば、刃はその下の生身には届かなかっただろう。しかし剣に魔法がかかっていたら、真っ二つになっている。

ディアスはジェスターが突きの体制から元に戻るよりも速く振り向き、返す剣を横薙ぎに斬撃を振るった。

ジェスターは突きの体勢から剣を戻し、その勢いのまま剣を上から背中に回し、辛くもディアスの剣を受け止めるが、衝撃が軽すぎる。ディアスの一撃はフェイントだった。

ディアスは流れるように剣を引くと、そこから槍のような突きを放った。

何もかもが遅すぎた。突きを避けられ後ろに回られ、振り向いた時には、既にディアスの剣はジェスターの胸を突いていた。

ジェスターはディアスの突きをまともに胸に喰らって後方へと吹っ飛んだ。

変色障壁が真っ赤になり、ジェスターの視界を朱に染める。

「馬鹿な……」

まさかこうもあっさりと負けるとは、ジェスターは思いもしなかった。

ディアスは後期になってから遅れを取り戻そうと必死に鍛錬を続けてきた。そしてシェーナとも手合わせし、高速で飛んで来る魔法を避け続けている内に、動体視力や反射神経が鋭くなり、ジェスターの動きや剣捌きが前と較べ物にならない程見えていた。

敗者にかける言葉はない。ディアスは茫然自失しているジェスターを残し、武舞台を退場した。

後期の魔道士学部のトーナメントでは魔法剣が流行った。殆どの生徒が剣に魔法をかけて戦ったが、どれも中途半端な者ばかりだっ

た。授業にないことなのだから、それは仕方ないだろう。例外がシェーナとトレイシアだった。

「やはり独学では無理ですな」

「うむ。では来年度からは例の報告書に基づいて作った、魔法剣の授業カリキュラムを取り入れて行く方向で、話を進めていくとしますか」

「しかしそんな中途半端な事に、大切な授業時間を割くことは反対です！」

「いやいや、見たまえ。トーナメント予選から今日まで魔法剣を使おうとした生徒は、全体の八割いる。皆が望んでいる事なのですよ」

「そうですとも。それにディアスとシェーナの成長ぶりを見たまえ。他の学校に対して圧倒的な戦力になる。今回のトーナメントには、王立騎士団長並びに魔道士団長が見えられている。上手くいけば国からの援助金を増やせるかもしれません」

「そうですな。それに騎士団長、魔導士団長はきっと魔法剣を使用した生徒の話を王宮でするでしょう。そうなれば他の学校にも噂が飛ぶでしょう。これは避けられない事です。ならば他の学校よりも早く、魔法剣の授業を取り入れるべきです。我らの学校が魔法剣を最初に広めた学校として、後生に残すために」

「しかしディアスめ。ジェスターとの試合に魔法剣と使わないとは……。これではデモンストレーションにならないではないか」

「いやいや、フィリアとの戦いだけでも十分ではないのか？」

「駄目だ。両団長とも、あれくらいの者はいくらでもいると言っておる」

「はったりではないのか？」

「いやわからぬぞ。王国の暗部には、我々の想像を遙かに超える超人達がいるとの噂だ」

「もっと見せつける必要があると言うわけか。となるとディアスはともかくフィリアは少し役不足だな。担任の私から見てディアスは

その力を全て出し切っていない。魔導士学部の優勝者と是非戦わせて見たい」
「それは私も思っていたよ。是非戦わせよう」
「なら今年のトーナメントに少し修正を加えますか」

「やっと戦えるわね」
トレイシアは武舞台の上でシェーナに言った。
「そうね。あなたの剣の腕、見せてもらったわ。なかなかやるじゃない」
「そう言っていられるのも、今の内よ。魔法でも剣でも貴方を圧倒してみせるわ」
「やれるものならやってみなさい！」
そして試合の合図が上がり、両者共間合いを取るために離れた。
「風の精霊よ……」
「炎の精霊よ……」
両者共円を描く様に動きつつ、次々と魔法をため込んでいく。
先に間合いを詰めたのはシェーナの方だった。
「風の精霊よ。我集めるは大気の怒り、我求めるは蒼き怒号。汝我を導く蒼き雷光となりて刃に宿れ！　ブルー・ライトニング・セイバー！」
シェーナが天に掲げた剣に、蒼い雷光が降臨し、多重の螺旋を描きつつ剣を覆った。
「火の精霊よ。踊れる破壊の源よ。我が内に宿りし熱き情熱の炎を持て、我が剣に集え！　フレイム・グラディウス！」
対してトレイシアは波打つ爆炎を剣に宿らせた。
「エアストリーム！」
シェーナは間合いに入る前に、ため込んでいた突風の魔法を放った。しかしトレイシアは避け方を知っていた。無理に留まろうせず、風に乗るように大きくバックステップして後退する。
シェーナはそこへ唱えておいた魔法を放った。

「ムーンライト・ファランクス！」
シェーナの手から、十数本の光線が不規則な軌道を描いて打ち出された。そしてその光線が全てトレイシアに多方向から襲いかかる。
「アンチ・マジカル・ディフェンス・シールド！」
しかしトレイシアも唱えて置いた対魔法防御障壁で、全ての光線を防ぎきる。
その間にシェーナは間合いを詰める。
「アンチ・フィジカル・ディフェンス・シールド！」
更にトレイシアが対物理防御障壁を唱える。
「ディスペル！」
「カウンター・スペル！」
トレイシアの防御障壁を砕こうと、シェーナが解呪の魔法を放つと、それを予想していたトレイシアが、解呪の魔法を対抗魔法で打ち消した。
「ディスペル！」
しかしシェーナは再び解呪の魔法を放った。
「ちっ。カウンター・スペル！」
トレイシアは保険のためにもう一つ唱えていた、対抗魔法で更に打ち消す。
「ディスペル！」
だがシェーナは更に解呪を放った。
「くっ！」
トレイシアの対物理防御魔法を砕け散る。
そしてシェーナは剣の間合いまで距離を詰めていた。全ては予測の範疇だった。
「はっ！」
ギィィンッ！
シェーナの稲妻の剣と、トレイシアの炎の剣が激突し、激しい稲妻と炎を放った。
「せいっ！」

シェーナは更に横薙ぎに剣を振るった。
トレイシアは後ろに下がって避けるが、シェーナは更に踏み込んで、返す剣で横薙ぎに剣を振るった。
「くっ！」
トレイシアは剣を縦にして受け止めるが、その瞬間シェーナは激突する反動を利用して、その場で高速回転すると、遠心力の乗った重い斬撃をトレイシアに叩き込んだ。
パキィンッ！
トレイシアは対魔法防御障壁を破壊されて吹っ飛ばされた。
しかしまだその下の変色障壁は黄色いままだった。
「ライトニング・ブラスト！」
そこへ追い打ちをかけようと、シェーナが稲妻の魔法を放つ。
「ウィンド・レジスト！」
トレイシアは体制を崩しながらも、対風防御障壁を放って防いだ。
「ディスペル！」
更にシェーナはその防御障壁を解呪しつつ、間合いを詰めて剣を振りかぶった。
（いったい何発解呪をため込んでいるのよ！）
トレイシアは剣でシェーナの剣を受け止めようと、迫り来る剣に剣を合わせる。
「ディスペル！」
シェーナは今度は、トレイシアの剣にかかった炎の魔法を解呪した。
「なっ？」
トレイシアは驚愕した。魔法のかかっていない剣はただの鋼の塊である。魔法のかかった剣を受け止める事はできない。シェーナの稲妻の剣は、まるでバターを溶かしながら進む様に、トレイシアの剣を切り落としつつ、トレイシアの銅を薙ぎ払った。
トレイシアの変色障壁が真っ赤になった。そして気づいた。シェーナは剣にかける魔法以外、一発も上級魔法を放っていないのだ。

「あなたの戦い方は完璧だわ。でも完璧すぎるの。だから読みやすいのよ。それに……」
シェーナは剣にかかった魔法を振り払いながら解く。
「あなたの剣の腕では、私の剣を受けるには、まだ……未熟！」
そう言ってシェーナはゆっくりと剣を鞘に収めると踵を返した。
（……決まった！）
シェーナは自分に酔っていた。しかしそのせいで興奮したフィリアが卒倒し、ディアスに介抱され、その事を後で知ったシェーナが一騒動起こす事になるとは、今はまだ思ってもみなかった。

二学年目のトーナメントが終わり、見事ディアスとシェーナは優勝を果たした。これで終わりと思った二人がホッとしていると、突然闘技場に緊急特例放送が流れた。それは今年度の後期に限り、各学年の剣術学部と魔道士学部の優勝者が、トーナメント終了後に試合を行うと言う内容だった。
そして四学年目のトーナメントが終わった次の日、冬休みを一日削ってまで行われる試合が開始された。
各優勝者は試合に出場する事を義務づけられたが、他の生徒は予定通り冬休みになった。剣術学部のトーナメント優勝者と、魔道士学部のトーナメント優勝者が戦うのである。闘技場には冬休みだと言うのに、殆どの生徒が闘技場に集まっていた。中には予約した馬車のチケットをキャンセルまでした生徒も少なくない。
一学年目の対決は、たいした盛り上がりもなく、魔道士学部の生徒があっさりと勝った。
今日の目玉は一学年の対決でも、三学年でも四学年でもない。二学年目のディアスとシェーナの戦いであるのは、誰の目にも明らかだった。魔法剣をまともに使い始めた二人の戦いである。これから魔法剣を極めようとする生徒達は、決して見逃す事のできない戦いだ。
『皆さん！　お待たせいたしました！　今日のメインイベントと言

っても過言ではない試合が始まろうとしてます！　まるで学校側が仕組んだとしか思えないこの試合……あっ、すみません。すみません。口を慎ます……えっとっ……。ごほん。失礼しました。誰もが夢見た対決が、今始まろうとしています。果たして勝つのはディアスか！？　シェーナか！？』

「ふふふふ。私が勝ったら何をおねだりしようかなぁ」
「勝つのは俺だ。俺はもう決まってる。勝ったら昼飯一ヶ月シェーナのおごりだ！」
「もう。みみっちいわね」
　なんと当の二人は自分達の対決に賭け事をしていた。負けた方が勝った方の言う事を何でも聞く事になっている。
「決めた！」
「何にしたんだ？」
「今は教えないわ！　教えて欲しかったら負けなさい！」
「普通逆だろう！？」
「負けたら恥ずかしいから教えないわ」
「……気になるぞ」
「ふふふふ。あなたはもう私の術中にはまったのよ。気になるでしょう？」
「……術だとばらしていいのかよ？」
「うっ。しまった……」
「やっぱりシェーナって天然だ」
「なっ！　違うって言ったでしょう！」
「そうかなぁ」
「……その事に関しては後でゆっくりと話し合いましょう」
「可愛いと思うけどなぁ」
　シェーナは美人だとか綺麗だとか言われる事が多かったが、可愛いと言われる事は殆どなかった。だからディアスに言われて動揺した。

「かわっ……うぅ」
シェーナは真っ赤になって俯いた。
「照れた顔も可愛いな」
「はうっ。ディ、ディアス。あ、あなたわざと言ってるでしょう！」
「いや、まじめに言ってるけどなぁ」
「ディアスこそ私を術にかけようとしてるのね！」
「そういうつもりじゃなかったんだけどなぁ。後でゆっくりと話し合うか」
「わかったわ。そろそろ始めましょう」
シェーナは剣を抜いて構える。ディアスも剣を抜いて構えた。
「ディアス対シェーナ……始め！」
「光の精霊よ。天空より御下りて我が剣に宿れ！　スカイ・レイ・ソード！」
ディアスは間合いを詰めつつ、光属性の魔法を剣にかけた。
「あまたに漂う風の精霊よ。汝我に一条の雷光をれに授けよ。されば轟く雷鳴を響かせん！　ライトニング・イプシロン！」
対してシェーナは風の最上級魔法を剣に掛けつつ後退した。
「光りの精霊よ。闇を滅ぼす光球となれ！　レイ・ブリッド！」
ディアスがシェーナの足を止めようと、光弾を放つ。
しかしシェーナは後退するスピードを落とさず、光弾をかわしつつ呪文を唱えた。
「闇の精霊よ。踊れよ踊れ、我が手の上で。舞えよ舞えよ我が意思よりて」
それはディアスの知らない魔法だった。
「さすれば我は汝に魔具を授けん！　ブラインド・ソード・ダンシング！」
シェーナの魔法が完成すると同時に、シェーナが腰からぶら下げていた革ベルトから、魔法の文字がびっしり彫り込まれた六本の短剣が、弾かれるように飛び出した。そして宙を舞いシェーナの周りをぐるぐると回り出す。

「はっ！」
シェーナの掛け声と共に、短剣達がディアスへ襲いかかる。
「おもしれぇ！」
ディアスは襲いかかって来る短剣を次々と光りの剣で弾き返した。
短剣はシェーナが動かしているが、実際にシェーナが手で振るっているわけではないので、ディアスにとって何の驚異でもなかった。もっともシェーナも短剣の遠隔操作だけでディアスを倒せるとは思っていない。この攻撃は次の攻撃の複線だった。
「ムーンライト・ファランクス！」
シェーナが光線を放つと、短剣達はいっせいにディアスから離れた。
拡散するように放たれた光線達は、あるいは直接ディアスを狙い、あるいは短剣に弾かれて真横からディアス襲いかかり、あるいは短剣に弾かれてディアスの後ろから回り込んだ。多方向からの一斉攻撃である。しかも短剣に弾かれて、光線達は曲がり出したのだ。
しかしディアスは驚異的な反射神経と感で、全ての光線を避け、弾き、受け流した。
「ラピット・ブリッド！」
シェーナはディアスが回避行動に専念している所に、超高速の光弾を放った。しかしシェーナはその瞬間ゾクリと寒気を感じ、とっさに横に飛んだ。
「けりゃぁ！」
ディアスは瞬時に剣で光弾を弾き返した。
光弾はシェーナがいた場所を通過し、背後の武舞台を包み込む防御フィールドに激突し、爆発と共にフィールドを激しく振動させた。とっさに避けていなかったら、今の一撃で終わっていたかもしれない。攻撃していたのに、いつの間にか攻撃されている。一瞬の隙が命取りだ。
「エア・ストリーム！」
ディアスがお得意の突風の魔法を放つと、シェーナは意識を集中

して、短剣達をディアスと自分の間に、円を描くように集めた。
「シールド・オブ・リフレクション」
短剣達を基に鏡の様な魔法陣が現れた。そして風が鏡の魔法陣に激突すると、そのままの勢いで、ディアスに吹き返した。
「ぐおっ！」
予想だにしなかった対抗手段に、ディアスはまともに突風を喰らって後退した。
間合いを十分に開けたシェーナは、次々と魔法を貯め込んでいく。
遅れてディアスもシェーナに対抗するために、魔法を貯め込む。
ディアスは押されている事を自覚した。いくらシェーナの攻撃魔法を避けても、なかなか剣の間合いに入れないでいる。しかもあの短剣達は意外とやっかいだ。しかし踊れる短剣達の弱点を発見してしまった。
「フリジット・ブリッド！」
ディアスはシェーナに冷気の塊を撃つと見せかけて、短剣を狙って冷気の塊を放った。
氷付いた短剣達は、氷の分だけ重くなり地に落ちた。
ディアスはシェーナが動揺した隙に、もう二つほど短剣を凍りづけにすると、シェーナは短剣達を放棄して、次の攻撃手段に移った。思い切りが良くて、的確な判断だ。
「ライトイニング・アロー！」
シェーナは稲妻の矢をディアスに向かって放った。
「アンチ・マジカル・ディフェンス・シールド！」
対してディアスは対魔法防御障壁を張って防ぎつつ、シェーナに向かって間合いを詰める。しかしシェーナの猛襲はこれから始まった。
「ファイアー・ボール！」
炎の玉がディアスに襲いかかり、対魔法防御障壁が砕け散る。ディアスは魔力が低い分、対魔法防御障壁を張っても、シェーナの魔法を一、二発くらいしか防げない。

「アンチ・マジカル・ディフェンス・シールド！」
それでもディアスはため込んだ防御障壁を再び張る。
シェーナは次々とため込んだ魔法を放った。
無数の稲妻が、炎の波が、氷の刃がディアスに次々と襲いかかる。
ディアスは対魔法防御障壁を砕かれつつも、懲りずに次々と対魔法防御障壁を張り、間合いを詰める。
（全てはこのために！）
「プラズマ・ブリッド！」
シェーナは中級魔法の中に一発だけ上級魔法をまぜた。しかも見た目はさほど派手ではない奴だ。
「はあっ！」
しかしディアスは凄まじいプレッシャーのかかった雷弾を見極め、剣で受け流した。防御障壁で受けるか、剣で弾き返そうものなら、その場で爆発していただろう。それを証明するかのように、ディアスの斜め後方の防御フィールドに激突した雷弾が、稲妻をスパークさせ、巨大な雷光と轟音をともなって爆発した。まさに驚異的な感である。
ディアスはその光りを背に、一気に間合いを詰めた。
「はっ！」
光りの矢の様な突きがシェーナの喉へと迫る。
「テレポート！」
しかし光りの刃が届く前に、シェーナは空間を渡った。
「はっ！」
現れたのはディアスの真後ろだった。シェーナは現れたと同時にディアスに向かって、稲妻の剣を振り下ろした。
「テレポート！」
「なっ！？」
シェーナはとっさに後ろを振り向いた。自分なら後ろに現れるからだ。
しかしディアスは剣が通り過ぎた後に、同じ場所に現れた。百八

十度向きを変えて。
そしてシェーナの一瞬の隙を突くように、ディアスの斬撃がシェーナを襲う。
「せいっ！」
「くぅっ！」
シェーナは体勢が悪かったが、それでも強引に身をひねりつつ、ディアスの剣を受け止めた。それは本当に偶然だった。シェーナの背筋がゾクッと冷たい汗を流す。
「はっ！」
そんな事知ったこっちゃないディアスは、更に光りの斬撃を繰り出した。
シェーナは何とか後退するが、ディアスはその動きに合わせて間合いを詰めつつ剣を振るう。
（この動き……）
いつもシェーナはディアスに稽古をつけてもらっていたので、ある程度ディアスの癖を知っていた。
（ここよ！）
ディアスの斬撃の合間を縫うようにして、シェーナの剣がディアスの剣を受け流し、そのままシェーナの剣は、流れるようにディアスの肩口へ弧を描いた。ディアスに教えてもらった返し技だ。
ギィィンッ！
ディアスの変色障壁が黄色く染まる。
ディアスはとっさに身を捌いて避けたのだが、避けきれずにかすったのだ。
「せぇえい！」
「くっ！」
ディアスの剣が閃いたと思ったら、凄まじい剣気がシェーナの頭上から襲ってきた。
シェーナがとっさに剣を上げるが、斬撃は上からこなかった。
ディアスの斬撃は唐竹でも袈裟斬りでもなく、横薙ぎだった。フ

エイントだ。
ギィィィンッ！
駆け抜けるようにして振るわれた横薙ぎの斬撃が、シェーナの防御障壁を真っ赤に変えた。
「うそ……」
シェーナは呆然として剣を落とした。
シェーナは負ける事が怖かった。総合主席を取るために不利になるとか、そんな事じゃない。負けることによって、ディアスが興味をなくしてしまうのではないかと思ったからだ。
「今回は俺の勝ちだな」
ディアスが振り向いて言った。
審判がディアスの勝利を告げ、アナウンサーが絶叫していたが、シェーナには単なる雑音にしか聞こえなかった。それ程どうでもよかった。大切なのはディアスが自分をどう思うかである。
「今回……？」
「ん？　何だ。もうお終いにするのか？」
「や、やだ。次は絶対に勝つ！　勝つまで戦う！」
「勝つまでかよ」
「そうよ。私が勝ったら今度はディアスが挑戦する番だからね！」
「当然だな。その前に負けないけどな」
「あっ。言ったわね。絶対に勝って見せるわ」
「それにしてもさっきのは危なかった。剣で負けちゃ洒落にならないな」
「ふふふふ。次は危ないどころじゃなわいよ。まぁその前に絶対間合いに入らせないけどね」
「お互い修行が足りないって事だな」
「そうね。でもまだまだお互い時間があるわ」
ディアスはシェーナの剣を拾い、シェーナに手渡した。
シェーナは剣を受け取るとディアスの手を取って握手した。
二人は歓声に包まれながら、武舞台を後にした。

翌年度、王から勅命で魔法剣の授業が正式に取り入れられる事が決まった。

二人の生徒を中心に、新しい風が今、シャルトンに吹き荒れようとしている……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5402t/

シャルトンの風

2011年5月28日09時40分発行